
麻帆良に来た召喚士

ぎゃりこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麻帆良に來た召喚士

【Nコード】

N93720

【作者名】

ぎゃりこ

【あらすじ】

テイルズオブファンタジアのクラスがネギまの世界に行くお話。

ブローグゝ新たな旅立ちゝ（前書き）

どうしても書きたくなり書いてしまいました。

ブローグへ新たな旅立ち

「これでエターナルソードの封印は終わりか…。帰る前に精霊の森に行くか」

彼の名前はクラス・F・レスター。世界の脅威だったダオスを倒した時空戦士の一人だ。彼は今、時の魔剣「エターナルソード」の封印を終えたところだった。

精霊の森

「相変わらず凄い木だな」

彼が見ているのは大樹ユグドラシル。たった一本で世界中に満ちるほどのマナを生み出している木だ。

「さてそろそろ帰らないとな…。？なんだ！？」

クラスが帰ろうとすると突如ユグドラシルが光出した。

「マーテルか？」

彼が大樹の精霊の名を呼ぶと光が強くなり、その光が消えたときそこには誰もいなくなっていた。

？？？

「…てください。…きてください。…起きてください」

「ん、ここは？」

彼が目を覚ました場所は白い世界。所々赤や青などいろいろな色の光が浮いている。

「起きましたか」

「マーテルか？ここはどこなんだ？」

クラスの目の前にいたのは緑色の髪をした女性。彼女こそが大樹の精霊マーテルである。

「ここは大樹の中です。クラス。あなたに頼みたいことがあります」

「精霊が人に頼み事か？それに頼りになる奴なら他にいるのだろう。あいにく私は早く家に帰りたいんだが」

「あなたにしかできないのです」

「…話を聞こうか」

「実は…」

この世界とは違う世界に大樹ユグドラシルと似たものがありその世界の大樹から助けを求められたらしい。その世界では近いうちに何かが起こる。それを阻止して欲しい。これがマーテルの言葉のすべてだ。

「にわかに信じられんが、あなたがウソを言うはずもないしな。だが、一つ聞きたいなぜ私なんだ？精霊がいなければ私は何の役にも立たないぞ。」

クラスの疑問にマーテルが答える。

「心配には及びません。向こうの世界とこちらの世界はわずかではありますが精霊が行き来できる程度には繋がっています。それに向こうの世界に行かせることができる人間はもともと私たち精霊に近づいてきた召喚士のあなたにしかいません」

「…私にしかできないのだな？」

「はい」

「わかった。何をすればいい？」

「ありがとうございます。それではこれを受け取ってください。」

マーテルが渡してきたのは六枚のカード。

「これは？」

「あなたの仲間の力の一部を譲り受けたものです。これを使えばあなたは彼らの力を使うことができます」

カードを見るとかつての仲間たち、クレス、ミント、チェスター、

アーチエ、すずの姿が描かれていた。そして最後の一枚には…。

「おいおい、これは何の冗談だ？」

そこに書かれていたのはダオス。クラス達が倒したデリス・カーラインの戦士の姿が書かれていた。

「彼も力を貸してくれました」

「責任重大だな」

「それではあちらの世界に送ります。こちらに」

マーテルがそう言う彼女の隣に扉が出てきた。クラスが扉の前に来ると彼はマーテルに行った。

「ひとつ頼みたいことがあるんだが…」

「なんででしょう？」

「あいつに…ミラルドに必ず帰ると伝えてくれ」

「わかりました」

その言葉を聞き、クラスはその扉を開けた。

ブログ〜新たな旅立ち〜（後書き）

感想待ってます。

召喚士、麻帆良に降り立つ（前書き）

クラスが吸血鬼と出会います。

召喚士、麻帆良に降り立つ

クラスが目を開けると目の前には大樹があつた。

「これがマーテルの言っていた大樹か。確かに似ているな。それにしても…」

クラスは周りを見渡す。目に見えるのは前の世界の未来で見たような建物と一つだけの月。

「本当に異世界に来てしまったようだな。まずは人を探すか」

「その必要はないぞ」

「誰だ!？」

クラスが振り返るとそこには小さな女の子と耳に機械のような飾りをつけた女の子がいた。

警備なんてめんどくさかったが今夜は面白くなりそうだな。目の前にいるのは青い髪の男。体の所々に刺青をしている。おそらく魔法の効果を高めるものだろう。そして何よりもあの指輪。かなりの魔力を感じる久しぶりに面白い戦いができそうだ。

「ふんつ。あいにく侵入者に名乗る名前はない。茶々丸お前は手を出すな。」

「ハイ、マスター」

さあ、私を楽しませて見せろ！

「行くぞっ!」

くそっ!この世界に来ていきなり戦闘とはついてない。とりあえず距離を取るか。

「逃がさんっ!氷結・武装解除!」

うまくいってくれよ

「私を守れ!ノーム!」

ノームが地面を操り壁を作る

パキイイン

なんとか使えたか

「面白い術を使うなこれならどうだ！氷爆！！」

相手が使うのは氷の魔術かなら

「奴の魔術を防げ！イフリート！！」

イフリートは火の精霊生半可な氷の魔術は効かない。

「イフリート、時間を稼いでくれ！」

「了解した。岩をも融かす我が炎を見せてやろう。」

なんだ奴が召喚したこいつの魔力量は！？並の魔法使いを軽く超えるほどの魔力だぞ！それをああも簡単に召喚するとは…少し本気を出すか。

「いいぞ面白くなりそうじゃないか！」

精霊の複数同時召喚はあまり使いたくないんだがな。

これが今の私の全力だ。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック。来れ氷精大気に満ちよ。

白夜の国の凍土と氷河を。こおる大地！！」

「まさか火の精霊である我が凍るとわな…」

火の精霊か…なかなか楽しめたぞ…！？なんだこの魔力は！？

「死を暗示する方位には破壊を司る物を招くがよい。生命の息吹を感じたならそこは誕生を司る者の場所である。逝く者に涙する乙女は死を左手に感ずる場に招かれよ。風は乙女と向かい時の流れのよ

うに等しくみなに吹き抜ける…」

くそっ！間に合わない！

「指輪の契約のもと我が呼び声に答えよ！」

まさかイフリートが凍らされるとはな。だが地水火風の精霊の同時召喚。これなら精霊同士がお互いを高めあい先ほどとは比べ物にな

らない。

「テトラリーダー!!」

まずい四方を固められた。しかも先ほどより力が上がっているだといふ？どうする？たとえ茶々丸が加わったとしてもこいつらには勝てない。

「そこまでだ。」

まさかエヴァがやられるとは…、それに周りにいる四体の精霊かなりできる。僕でも勝てるかどうか…。

「彼らを下がらせてくれないか？」

素直に聞くなりよし、聞かないなら術者を仕留める。

「そこにいるおじょうちゃんが手を出さないでくれるならかまわないが。」

「お、おじょうちゃんだと…？この私をおじょうちゃんだと！？貴様覚悟はいいだろうな…」

「覚悟も何も私はまだ君の名前を知らないのにな、それとも初対面と思ったのは私の間違いだったかな？」

「むっ…。エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。」

「私はクラス・F・レスターだ。エヴァンジェリン手を出さないでくれるのかな。あまり無益な戦いをしたくないのだが」

「わかつてる。今の私ではこいつらに勝てない」

エヴァがそう言うのとエヴァの四方を囲んでいた四体の精霊が消えた。

「クラスさん僕はタカミチ・T・高畑。悪いけど僕たちのトップにあつてもらいたいんだけどいいかな？」

「構わない」

「それじゃついてきてくれ」

学園長室

「異世界から来たか…。にわかには信じられんのだ」

これが普通の反応だろうな。記憶でも見せられれば簡単なんだが…。

「この世界の魔法で私の記憶を見せることはできないのか？」

「できないことはないがいいのかの？」

「プライベートなことを見ないでくれるならかまわない。」

「それなら大丈夫じゃ。この魔法は君が見せたい記憶を見るものじゃからな」

「ならいい。始めてくれ」

思い浮かべるのはあの旅のこと。クレス達と出会い。世界を回り。時を超え。世界を守り。奴の想いを知り。あの星のことを思った。

「なるほどのう。確かにウソは言っていないようじゃ。…うむわかった！君を教師として雇うことにしよう」

今何と聞いた？

「教師？私が？」

「うむ、これからこの世界で生活するのじゃろう？それなら職は必要じゃろ？」

頭が痛くなってきた。

「色々言いたいことはあるがまあいい。それより時間をくれ。この世界のことをよく調べたいのでな。」

「うむ、教師の件は来年からにしよう。それで住むところじゃが…」
「うちで預かるう。」

エヴァンジェリンがそう言ってきた。

「うむ、わかった。エヴァに頼むことにしよう。クラス君もそれでかまわないかの？」

「ああ」

「それじゃあ、ついてこい」

エヴァ宅

「随分とたくさんの人形があるんだな」

「ゴ主人ナンドゴイツハ」

並べてある人形を見ていると一体の人形がしゃべりだした。

「エヴァンジェリンなんだこいつは？」

「そいつは私の初代パートナーだ。もつとも今は魔力が足りなくて動けないがな。チャチャゼロ。そいつは異世界から来たクラスだ。しばらく家で預かることにした」

「クラス・F・レスターだ」

「チャチャゼロだ。ヨロシクナ旦那」

挨拶を終えソファに座る。茶々丸は台所に向かった。おそらく夕食の準備だろう。

「それにしても召喚術が興味深いな」

「私としては人間でも使える魔法の方が興味深いがな。それよりエヴァン…」

「エヴァでいい。長ったらしいだろ」

「じゃあエヴァ、チャチャゼロを借りても良いか？」

「かまわないが何をする気だ？」

「こつちでも契約できるか試してみたいんだ」

「面白そうだな」

そう言つてエヴァはチャチャゼロを取りに行った

「確かここに契約の指輪が…」

旅の中で集めた契約の指輪を机の上に並べる。

「ナニスンダ？」

並べ終えたところでエヴァがチャチャゼロを持ってきた。

「今からお前にクラスと契約してもらう。うまくいけば自由に動けるようになるぞ」

「ウマクイカナカツタラドウナルンダ？」

「「さあ…？」」

「オイ！チヨットマテ！」

「冗談だ失敗したら何も起こらんよ。好きな指輪を選んでくれ」

「ソコノラピスラズリガイイ」

「わかった」

ラピスラズリの指輪を指にはめほかの指輪をしまう。

「じゃあ、始めるぞ」

「オウ」

「我、いま意思持ちし人形に願ひ奉る。指輪の盟約のもと、我に彼女を従わせたまえ…。我が名は…クラス・F・レスター」

光がチャチャゼロを包みしばらくして消えた。

「成功したのか？」

「オオ動ケルゼ！ゴ主人！アリガトナ、旦那」

チャチャゼロが立ち上がり机の上を歩きながら言う。

「よかったですね。姉さん」

そっぴいながら茶々丸が夕飯を持ってきた。

「旦那、一杯ヤンネエカ？イケルロダロ？」

チャチャゼロがいつの間にか酒を持ってきていた

「おっ！いいねえ！」

エヴァとチャチャゼロとともにグラスを上げる。

「新たな出会いに…」

「新タナ友二…」

「新たな世界に…」

「「乾杯！」」

次の日

「ダラシネエナア、旦那」

「チャチャゼロ、耳元で飛び跳ねないでくれ頭に響く…」

召喚士、麻帆良に降り立つ（後書き）

感想待ってます。

召喚士、修行をする（前書き）

別荘で修業します。

召喚士、修行をする

「うゝむ…」

「マールからもらったこのカード今のうちにちゃんと扱えるようにしたいんだが。」

「ドーシタンダ、旦那？カードトニラメッコシテ？」

「チャチャゼロか…。ここら辺に魔法を使っても大丈夫な場所ってあるか？」

「頭の上のチャチャゼロに話しかける。」

「ソレナラゴ主人ニ頼ンデ別荘出シテモラウカ」

「別荘？」

「俺ガ聞イテキテヤルカラココデ待ッテロ」

「ああ」

「この世界の魔法はすごいな…」

「あの後エヴァに地下室にあるボトルの前に立たされたと思ったたらボトルの中に転移していた。」

「ここでの一日は外での一時間になる。修業にはうってつけだろ」

「ありがとう。エヴァ」

「かまわんさ」

「さて、さっそく使ってみるか…」

「ポケットから一枚カードを取り出す。」

「我に力を与えよ。クレス・アルベイン！」

「カードが光り私を包む。」

「ナカナカ強ソウジャネエカ」

「それがクレス・アルベインか」

「すごいな。頭に体の使い方が流れ込んでくる」

「剣や盾の構え方からアルベイン流剣術までそのすべてが頭に流れ込

んでいく。

「ほかの者たちのも試してみるか」

数時間後

「だいが使いこなせるようになって来たな」

「エヴァか…」

「どうだ私と実践稽古しないか？」

「ケケケ、俺も混ぜろヨ」

「二対一はさすがに無理だろ」

「一対一なら何とか召喚できるが二対一はきつい」

「ナラ俺八旦那ニツクゼ」

「なら茶々丸は私につけ」

「ハイ、マスター」

「それじゃ、始めるぞ…始め！」

合図とともにチャチャゼロと茶々丸がぶつかり合う。その後ろでエヴァが詠唱を始めている。

「喰らえっ魔法の射手連弾・氷の17矢！！」

「いでよっノーム！全て撃ち落とせ！」

地面から出たノームがミサイルのような形状になりエヴァの攻撃を撃ち落としていく。

「狡猾な魔界の住民よ、契約に従い我に従え！グレムリンレアー！チャチャゼロをサポートしろ！」

トカゲに似たグレムリンレアーが八匹チャチャゼロの周りに現れる。四匹はチャチャゼロのサポートをし、残りの四匹はエヴァに向かう。「なかなかやるじゃないかだがこの程度では私には勝てないぞ！氷神の戦鎚！」

エヴァが巨大な氷塊によってグレムリンレアーをつぶそうとしたがグレムリンレアーが持ち前の速さで避ける。

「ちっ、ちょこまかと！」

「我に力を与えよ。アーチエ・クライン！」

エヴァがグレムリンレアーに手こずっているうちに箒で上に跳ぶ。

「これなら避けきれまい。魔法の射手連弾・氷の199矢！！」

199もの矢にエヴァと戦っていたグレムリンレアーがやられる。

「クラスはどこに行つた！？」

「蒼溟^{そうめい}たる波濤^{はとう}よ、戦禍^{せんか}となりて厄^{やく}を呑み込^こめ！タイダルウェーブ

！」

クラスの真下、ちょうどチャチャゼロの前から巨大な津波が現れる。

「しまった！」

「避けきれません」

「三対一でもよかつたんじゃないのか？」

実践稽古の後エヴァがそう言ってきた。

「無茶言うな。今回私が勝てたのは優秀な前衛がいたからだよ」

隣に座っているチャチャゼロの頭を軽く叩きながら言う。

「ケケケ、アリガトヨ」

「ふんつ、私は奥で休むが貴様らはどうする？」

「私も休むとしよう。さすがに疲れた」

「ではお部屋に案内します」

部屋に向かおうとしたらチャチャゼロに呼び止められた

「オイ旦那、サッキノトカゲ出シテクレヨ。切りアツテミテエ」

「グレムリンレアー。チャチャゼロの相手をしてくれ」

一匹だけだし部屋へと向かう。さすがに疲れた。

別荘の中で一日過ごし外に出たら丁度タカミチが来た。

「警備？」

「そう、世界樹とか貴重な魔道書とかを狙って外から侵入者が来る
ことがあるんだ」

「別にかまわないが」

「そうか、それじゃ夜の十一時に世界樹前の広場に来てくれ。ほかの警備の人達と顔合わせするから」

そう言つてタカミチは走つて行つた。

世界樹前広場

「今日から警備に加わるクラス君じゃ」

ここにいるほとんどが魔法使いか。向こつの世界では考えられないな、人が魔法を使うなんて。

「クラス・F・レスターだ。よろしく頼む」

「実力を見てもらつたためにタカミチ君と模擬戦をしてもらつ」

「お手柔らかに頼むよ」

「こちらこそ」

タカミチと握手をしたあと十分に距離を取る。

「いざ尋常に、始め！」

ヒュンッ！

顔に向かつてきた目に見えない何かを顔をそらして避ける。

「まさか初見で居合拳を避けられるとは思いませんでした」

「生憎この程度避けないとあいつには勝てなかったからな。こつちも行かせてもらつ。闇黒を渡り歩く影よ、契約に従い我に従え！シャドウ！我を守れ！」

タカミチが攻撃してくるがシャドウが作り出す闇の中に吸い込まれていく。

「元素を統べる老爺よ、契約に従いその力を我に貸し与えよ！マクスウェル！」

クラスの背後に学生帽をかぶり杖を持った老人のような姿をしたマクスウェルが現れ光となり指輪に吸い込まれる。

「宇宙に散らばる無数の星々よ我が願いを聞き入れ我が眼前に降り注げ！うまく避けてくれよ…。シューティングスター！！」

空からマクスウェルの魔力で造られた無数の光の球がタカミチに降り注ぐ。だがタカミチはそのほとんどを居合拳で撃ち落とした。

「そこまで！クラス君の実力はわかったじゃろ今日はこれで解散じゃ」

広場にいる魔法使いが帰っていく中タカミチが来た。

「さすがですね。世界を救っただけのことはあります」

「私はただ精霊たちの力を借りてるただだよ。一人では何もできない」

「クラス君」

タカミチと話していると学園長が話しかけてきた。学園長の後ろには褐色で長身の少女と髪を横で結んだ刀を持った少女がいた。

「彼女らが警備の時に君のパートナーとなる」

「龍宮真名だ。よろしくクラスさん」

「桜咲刹那です。よろしくお願いします」

「クラスだ。よろしく」

二人と握手を交わす。

「オイ、旦那。早く家帰ッテ一杯ヤロウゼ」

チャチャゼロが頭に乗りながら話しかけてくる。

「わかった、わかった。それじゃ、また」

帰ろうとすると学園長に腕を掴まれた。

「それはそうとクラス君。広場に空いた穴をどうにかしてくれんかね？」

学園長の指差す先にはシューティングスターで空いた無数の穴がある。いている。

「私がか！？」

「まさかこんなになるとは思わなくてのう。それじゃあ後は頼むぞい」

そう言うとかかなりの速度で走り去って行った。その場に残ったのはクラス、チャチャゼロ、真名、刹那の四人だけ。

「手伝おうか？クラスさん」

「私も手伝います」

「いやかまわないよ。奔放なる大地の精よ、契約に従い我が前に現れる！ノーム！」

「にゅ〜ん」

四人の目の前に手足のないモグラのような姿をしたノームが顔を出した。

「ノーム。この広場に空いた穴をふさいでくれ。」

「りよ〜か〜い」

その言葉とともに穴がどんどんふさがっていく。

「しゅ〜りよ〜」

「ありがとう。ノーム」

「またね〜」

そう言つてノームは土の中に消えた。

「模擬戦でも思ったけど、クラスさんの召喚術はすごいね」

「私はすごくないさ。一人では何もできないからな」

「オイ、トットト家二帰ローゼ」

「そうだな、じゃあ、また」

「うーん」

「ドウシタダ？」

「いや、何か忘れているような気がしてな……」

「ソノウチ思イ出スダロ」

「それもそうだな」

「我、何時まで、ここ、いる？我、何、守る？クラス、何処、いる？」

「クラスさん！精霊一人（？）忘れてます！」

召喚士、修行をする（後書き）

感想待ってます。

召喚士、先生になる（前書き）

先生になります。

召喚士、先生になる

あれから一年の時間が流れ私は教師になることになった。そして今、私が担当する2・Aの前にいるのだが…。

「肉まん一個ちょうだい」

「一個ねオケよ」

「じゃお願いします」

「あいあい」

「新任美形だといいけど」

「ネタにするんでしょ」

「…騒がしいな」

隣にいるタカミチに言う

「元気があっていいじゃないか。それじゃあ、僕が呼んだら入って来て」

「わかった」

それにしても先生か…あつちの世界ではミラルドに頼りっぱなしだったからな。こんなことなら少しは協力しとくんだったな。

「それじゃあ、入って来てくれ」

さて、いくか。

ガラッ！

「今日から君たちの副担任になるクラス・F・レスターだ。担当教科は数学だ。よろしく」

「「「……………」」」

嵐の前の静けさってか。

「カッコイイ！！！！！！」

「洪くて素敵かも」

まったく三十路前のおっさんに何を夢見てるんだ？

「それじゃあ、HRはクラス先生への質問タイムにしよう。」
「まあいいか。」

「質問がある奴は手を挙げる」

「はいつ！！！！」

「じゃあ、神楽坂」

タカミチから名簿を借りて名前を呼ぶ

「プロフィールを教えてください！」

「29歳、身長176cm、体重62kg」

「次、佐々木」

「恋人はいますか？」

「腐れ縁の幼馴染がいる」

なんで残念そうな顔をする？

「次、大河内」

「目の下や手にある刺青はなんなんですか？」

「我が家に伝わるおまじないだ」

「次、古」

「強いあるか？」

「体を動かすのはあまり得意じゃない」

「次、早乙女」

「もしこの中で付き合ったらだれですか？」

「中学生と付き合うことはあり得ない」

「次、綾瀬」

「趣味はなんですか？」

「読書と料理だ」

キンコンカーン…

「もうないみたいだね。それじゃあ、HRはこれでおしまい」
「やっと終わった。よくまあ、質問のネタが尽きないもんだ。それじゃあ、明日の準備をしてから図書館島に行くか。」

図書館島

この世界の科学力はすごいなテレビと言いパソコンと言いあっちの世界のツールぐらいの科学力はあるんじゃないか？いやさすがに大陸を浮かせたり時間転移をしたりはしないか。

「あの〜」

電球ぐらいならあっちの世界でも作れるか。電気はヴォルトを使えば。

「すいませ〜ん」

この図書館島もすごいな王立学院を軽く超える量の書物があるなんて。

「クラスせんせー」

「ん、宮崎か？すまんな本に夢中になってた」

「だ、だいじょ〜ぶです。えと、今お時間ありますか？」

「ああ、ちょうど読み終わったところだ」

「なら、きよ、教室に来てください」

「わかったそれじゃあ行こうか」

教室

ガラ！

「『ようこそ！クラス先生ー！』」

歓迎会かそういえば向こうでも子供たちが何回かやっていたな

「ササ、主役は真ん中に〜」

「ふう」

「どうだいこのクラスは？」
タカミチが飲み物を持ってきた。
「まるで、アーチェがたくさんいるみたいだよ」
「ハハハッ」
「ふむふむアーチェ、それが恋人の名前ですか？クラス先生」
「アーチェは知り合いのお転婆娘だよ」
「じゃあ、恋人はどんな人なんですか？クラス先生」
「さあな、私のことなんか調べてないでみんなで騒げ」
「今日のところは引き下がるけど絶対スクープ取るよ」
まったく退屈しそうにないなこの世界は。

夜

「今日は龍宮とか」
「よろしく頼むよクラス先生」
「おいおい、こんなところまで先生とか言わないでくれ」
「了解、クラスさん」
しばらく見回って何もなかったので龍宮と別れた。

エヴァ宅
ガチャ
「帰ッタカ旦那」
「ただいまチャチャゼロ」
「今日モ別荘使ウノカ？」
「ああもつ少しで新しい技が完成するんだ」
「老ケルゾ」
「ほっとけ」

召喚士、先生になる（後書き）

感想待ってます。

召喚士、少年と出会う（前書き）

ネギが出ます。

召喚士、少年と出会う

「ウェールズに？」

朝学園長に呼ばれて学園長室に行ったらウェールズに行くよう言われた。

「そうじゃ、魔法学校の卒業生の修行の内容が教師をすることでのうちの学校で預かることになった。今回は顔合わせみたいなもんじや」

そう言つて学園長が書類を渡してきたが…。

「学園長、子供に教師をやらせる気か？」

書類には9歳と書かれている。

「大丈夫じゃよ。ネギ君は優秀じゃし。ワシらが導いてやればいいじゃろ」

「わかりました。」

「それで飛行機のチケットじゃが…」

「それなら大丈夫だ。向こうに近いうちに行くと言えといてくれ」

「うむ、わかった」

英雄の息子か…。

エヴァ宅

「…ということでウェールズに行くことになった」

家に帰りエヴァに話すと

「ふんっ、サウザンドマスターの息子か」

不機嫌な顔でつぶやいた。

「私に登校地獄とか言う不愉快な呪いをかけたやつの子息子だよ…いや待てよ奴の子の血なら私の呪いも解けるか？」

「おいおい、女子供は殺さないんじゃないのか？」

「世間知らずのガキに現実を教えてやるのさ…それよりどうやってウェールズに行くんだ」

「ん？ああ、エヴァにはまだ見せてなかったな。別荘に行けば分かるよ」

別荘

「なんだ？これは？」

そこには鳥を模したが機械があつた。

「これはレアバード。ヴォルトの魔力を使って動く飛行機械だ。魔科学の産物だよ」

「まて、魔科学は大量に魔力を使うんじゃないのか？」

「レアバードはヴォルトの魔力で十分動くからな。大丈夫なはずだ。それに茶々丸に協力してもらって改造してるからな」

「茶々丸が？」

エヴァが後ろにいる茶々丸を見る。

「ハイ、この世界の技術を取り込みより少ない魔力で動くようにしています」

「そういうことだ、この世界の飛行機より早いからな。それでエヴァ、明後日には出発するつもりだからその時に認識阻害魔法で一般人には見えないようにしてくれ」

「まあ、いいだろう。その代わり貴様の血をもらっぞ」

「わかった。それじゃ頼むぞ」

魔法学校

「手紙には今日来るって書いてあるけど…」

どんな人が来るのかな。手紙には優秀な人が来るって書いてあるけど。

「どんな人が来るのかしらね」

「少なくともネギよりは頼りになる人よね」

お姉ちゃんとアーニヤと話していたら空から大きな機械の鳥が下りてきてそこからたくさんの刺青をした人が下りてきた。

「君がネギ君だね？」

「私はクラス・F・レスターだよろしく」

「ぼ、僕はネギ・スプリングフィールドです。よろしく願いします」

「私はネカネ・スプリングフィールド。ネギの姉です」

「私はアナ・ユーリエウナ・コロウア。ネギの幼馴染よ。私のことはアーニャって呼んでくれていいわ」

「よろしく二人とも」

その後しばらく魔法学校のことや麻帆良学園のことを互いにしていたがネギ君が意を決したように聞いてきた。

「クラスさんはどんな魔法を使うんですか？」

「残念ながら私は魔法は使えない」

そう答えたらネギはものすごく驚いたような顔をした。

「でも、タカミチはすごい魔法使いつて」

タカミチか、別に召喚のことを言ってもかまわなかったんだがな。

「私が使うのは魔法じゃなくて召喚術だ。どれ、一つ見してやろう」シルフでいいか…。

「翠の風まとう姉妹よ、契約に従い我が前に現れる！シルフ！」

目の前に小柄な少女の姿をしたシルフが二人現れる。

「彼らと遊んでくれ」

そう言うシルフは風でネギたちを浮かばせる。ネギたちは最初は戸惑っていたが今では笑顔で遊んでいる。

「それが異世界の力かの？」

後ろを見ると威厳漂う老人が立っていた。

「あなたは？」

「ワシはこの魔法学校の校長じゃ、君についてはコノエモンから話は聞いておる。ネギのことをよろしく頼みますぞ」

「見本となるように頑張ります」

その後この世界の魔法について聞いているとネカネが話しかけてきた。

「あのクラスさんどれくらいこの町に滞在するつもりですか？」

「2、3日ぐらいだが」

「ならうちに泊まりませんか？ネギもあなたのことを気に入ってるようですし」

「好意に甘えるのでしょうか」

ネギの家

「クラスさん。僕に召喚術を教えてください！」

夕食を頂いた後くつろいでいたらネギ君にそう言われた。後ろにはアーニヤちゃんもいる。

「悪いがそれは無理だ」

そう言うネギ君とアーニヤちゃんが詰め寄ってきた。

「なんでですか！？」

「けちけちしないで教えなさいよ！」

「理由を言うから落ち着け二人とも」

そう言う素直に下がってくれた。

「召喚術は魔法が使えない私が少しでも魔法使いに近づくために研究したものだ。精霊と語りあうために体中に刺青を施し、精霊と出会うために世界中を渡り歩いた。精霊に認めてもらうために力を示した。ここに来るまで約30年かかった…。君たちには魔法がある。私と違って才能がある。ならばその力を極めるように頑張れ。そうすれば私なんかよりすごい魔法使いになれるさ。」

「わかりました！クラスさんに負けなくらいすごい魔法使いになつて見せます！」

「いい返事だ。」

そう言うネギ君たちの頭を撫でて寝室に行く。

寝室

「やはり、精霊を体に取り込むのは危険だな…。なら、精霊を鎧のように体にまとわせるか。これなら体への負担も少なくて済むか…。」

なら詠唱は…ネギか？」

後ろを見るとそこにはネギ君がいた。

「そんなとこにいないでこっちに来たらどうだ？」

「何をしているんですか？」

私のメモを見ると尋ねてきた。

「召喚術の新しい技術を考えているところだ」

「新しい技術ですか？」

「ああ、私の召喚術は接近戦に弱いからな。それを補うためのものを今考えているところだ」

「何か僕にも手伝えることはありますか？」

「いや特にないな…」

「そうですか…」

「そんな顔をするな。何かあつたら頼らせてもらうさ。それより早く寝た方がいい。明日はいろんな精霊を見せてあげるから。」

「はいっ！」

ネギ君はそう返事すると自分の部屋に帰って行った。

「私もそろそろ寝るか」

「クラスさん、こつちです」

「早く来なさいよ、クラス」

「無茶言うなよ、私はそんなに若くないんだ」

息を切らせながら坂を上がりそこから下を見ると湖と森があつた。

「いい景色だな」

「ここが僕たちの修行場です」

ここなら彼女の力を使えるか。

「早く呼びなさいよ！」

「そう急かすなよ」

そっついポケットから指輪を出しはめる。

「それは？」

「これは精霊たちとの契約に必要なもので召喚術の際、発動媒体と

なる契約の指輪だ」

さてと呼ぶか。

「古代松の守り手よ、契約に従い我が前に現れる！アレフ！」

目の前に現れるのは濃い茶の髪的女性。

「久しぶりですね御主人様。何の御用ですか？」

「アレフ、下の森で3個ほど琥珀を作って来てくれないか？」

「わかりました。しばしお待ちを」

そう言つて下に降りて行つた。

「クラス、今のはなんの精霊なの？」

「古代松の精霊アレフだ」

「ふーん、なんか弱そう」

まあ確かに強そうではないが…。

「すべての精霊が攻撃に特化しているわけではないからな。だが戦えないわけではないぞ、森の中とか木がたくさんあるところなら樹脂を使って相手を琥珀の中に閉じ込めることもできる」

説明しているうちにアレフが戻ってきたその手の中には四つの琥珀がある。

「それじゃあ、面白いものを見せてやる」

アレフから一つ琥珀を受け取れると湖に向かって思いっきり投げた。しばらくするとぼちゃんとかさな音が聞こえた。

「ああ!？」

「何しているのよもったいない！」

二人の言葉を無視してアレフに語りかける。

「アレフ、あの琥珀から見える景色を私たちにを見せてくれ」

「かしこまりました。少々お待ちを…」

アレフが目をつむり両手を前に出すとそこには湖の中を移す水晶玉大の琥珀が現れた。

「すごい！」

「アレフは琥珀を通して世界を見ることができんだ」

その後、アレフによって世界中に散らばる琥珀の景色を3人でずっ

と眺めていた。

「もう帰っちゃうんですか？」

二日後帰ることになった私を、ネギ、アーニヤ、ネカネの3人が見送りにきてくれた。

「私にも教師の仕事があるからな」

元気いっぱい2・Aの生徒が頭に浮かぶ。

「また精霊見せてよね」

「また会いましょう」

「そっちにネギが言ったらよろしくお願いします」

「ああ、それと君たちにプレゼントだ」

ポケットに入れていた物をネギに渡す。

「これは琥珀のペンダント？」

「ああ、良ければ大事にしてくれ。それじゃ、また逢う日まで！」
レアバードに乗り飛び立つ。

「英雄の息子か……。そこらへんの子供と変わらないな……。あのく
しゃみがなければ」

召喚士、少年と出会う（後書き）

アレフは小説に出てきた精霊です。ほかにもモンスターやオリジナルの精霊も出すつもりです。感想待ってます。

召喚士、新技開発（前書き）

新技が完成します。

召喚士、新技開発

「やっとできた…」

「ケケケ、ナカナカ強ソウじゃネエカ。サツソクヤリアウカ？」

「勘弁してくれ。もう二日も寝てないんだ」

別荘

「ご機嫌じゃないかチャチャゼロ。何かいいことあったのか？」
今にも鼻歌でも歌いそうな顔で刃物の手入れをしている。

「アア、旦那ガヤツト新技ヲ完成サセタンデナ。ヤツト切リアエル
ぜ」

「そいつは面白そうだな。で？あいつは今どこにいるんだ？」

「寝テルヨ。二日寝テナイ見テエダ」

「そうか…」

私も久々に本気で暴れるか…。

「なんで二人は獲物を見るような眼で私を見ているんだ？茶々丸」
二人と目を合わせないように近くにいる茶々丸に訊ねる。

「ハイ、二人ともクラスさんの新技に興味があり戦ってみたいよ
うです」

「ハハハッ！クラス！今回は茶々丸を貸してやる！貴様の新技と
やらで私たちを満足させてみる！」

「ケケケケケ！早くヤリアオウゼ？」

なんだか震えが止まらない…。

「そういうことです。今回はよろしくお願いします」

「はあ…」

「さあ！いつでも来い！」
しょうがない…。

「焰王の従士よ！契約に従い我に力を与えよ！フラムベルグ！全てを灰燼と化す焰を我に纏わせ鎧と成せ！ブレイズメイル！」

真紅の鎧に包まれ手には炎をかたどったような剣が握られる。

「これが私が編み出した精甲術だ！」

「精霊を自分で纏つての身体強化か。なかなかやるじゃないか！最初から全力で行くぞ！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！契約に従い我に従え氷の女王！」

エヴァが空を飛び右手を上げ呪文を唱える。

「ゴ主人俺ラモ巻キ込ムツモリカヨ！？」

「広範囲完全凍結殲滅呪文、回避します！」

呪文を聞いたチャチャゼ口と茶々丸が急いで離れる。

「…陽炎」

「来れ！とこしえのやみ！えいえんのひょうが！！」

いくつもの氷柱が現れクラスが凍る。

「どうしたクラスその程度か！？全ての命ある者に等しき死を其は安らぎ也！こおるせかい」

「では、そろそろ行かせてもらおうか」

「何！？」

エヴァの後ろにはクラスと炎でできた数体の分身。

「さすが魔王を倒したことだけはある。チャチャゼ口お前もこちらに来い！久しぶりに心躍る戦いだ！」

「茶々丸、来い！」

「ケケケ！」

「ハイ、クラスさん」

空中に4人が集まる。

「フラムベルグよ！彼女に其の力を貸し与えよ！茶々丸！できる限りその二人を押さえろ！」

「了解」

茶々丸もクラスと似たような鎧をまとい、炎をかたどった双剣を持って二人を押さえる。

「粗暴な紅蓮の猛者よ、翠の風まとう姉妹よ、奔放なる大地の精よ、蒼き水流の女傑よ、地水火風を司りし四大精霊よ…」

「まずい！チャチャゼロ止める！」

「通しません」

チャチャゼロがクラスに向かったが茶々丸に阻まれる。

「我に仇名す敵を封じる堅固な牢と貸せ！テトラプリズン！！」

四大精霊が作り出す四面体にエヴァとチャチャゼロを閉じ込める。

「くっ！エクスキューションーソード！！この程度の牢など壊してくれる！」

エヴァがテトラプリズンに罅を入れているが遅い。

「精霊の統括者よ、契約に従いその力を我に貸し与えよ！オリジン！」

クラスの後ろに四本の腕を持った人間の姿をしたオリジンが現れ光となって指輪に吸い込まれる。

「輝く御名のもと 地を這う穢れし魂に裁きの光を雨と降らせん安息に眠れ 罪深き者よ！ 耐えて見せろ！ジャッジメント！！」

無数の光が落ちる直前にテトラプリズンが壊れる。

「くっ！」

「アブネエ！」

ジャッジメントの光を二人が避ける。

「どうした！エヴァ、お前の全力はこんなものか！？」

立ち上がったエヴァが指を動かすとクラスが何かに縛られた。

「くっ！？糸か！？シルフ！」

「ふんっ！」

縛っている糸を切ろうとシルフを呼び出したがエヴァの魔法の射手にやられてしまう。

「ハッ！つまるところ詠唱さえ止めてしまつたら私の敵ではないということか」

エヴァが近づいてきながら笑う。

「…油断は禁物だぞエヴァ。開放、フラムベルグ」

クラースの鎧が解かれフラムベルグが現れる。

「なっ！？」

「詰めが甘かったな、エヴァ！鋭く咆哮する雷鳴よ！」

糸を切りエヴァに向かったフラムベルグを見て詠唱を始めるが…。

「クラースさん！後ろです！」

「旦那八全体ノ把握ガ甘カッタナ」

ゴンッ！

振り返ったクラースの脳天にチャチャゼロのみね打ちが叩き込まれた…。

「つつ！？…ここは？」

「ヤット目覚メタカ、旦那」

周りを見ると隣にチャチャゼロが座っていた。

「…ああ、お前にやられたんだっとな」

「ケケケ、久シブリニ熱クナレタゼ」

酒を飲みながら答えるチャチャゼロの体には所々罅が入っていた。

「エヴァは？」

起きながらチャチャゼロに聞く。

「旦那ガ最後ニ出シタヤツニヤラレテ気絶シテルヨ」

「ならあの勝負は引き分けか。オリジン」

チャチャゼロにダイヤモンドを近づけ罅を直す。

「気ガ利クジャネエカ。ツイデニ妹ノモ直シテクレヤ」

チャチャゼロが歩き出すのでそれについていく。しばらく歩くと広い部屋についた。

「姉さん。クラースさんも」

茶々丸はエヴァの看病をしていた。その体にもチャチャゼロと同じような日々があった。

「妹、才前ノ傷モ旦那二直シテモラエ」

「ハイ、わかりました」

そう言つてこちらを向く。その体にはチャチャゼロ以上の罅があった。

「オリジン」

チャチャゼロと同じように直していく。

「ありがとうございます」

「んっ」

茶々丸を直し終えたところでエヴァが目を覚ました。

「今回は引き分けだったな」

目を覚ましたエヴァにそう言つと。

「バカ言え。あのままやっていればチャチャゼロが茶々丸を倒してたはずだ。と、言うことで私の言うことを一つ聞いてもらつぞ」

「待て！そんな約束はしてないぞ！？」

「敗者は勝者に従うものだろう？」

「じゃあ、前回の勝負の時は！？」

「茶々丸をレアバードの改造の時に貸してやった」

「待て！その時は血をやつただろ！？」

「あれは認識阻害魔法の対価だ」

「くっ！わかつたよ。私は何をすればいいんだ？」

「とりあえず、目をつぶれ」

エヴァの言つとつり目をつぶるとエヴァに顎を持たれた。この体勢はまさか！？

チュッ！

目を開けるとエヴァに唇を奪われていた。

「なんなんなんなんあなにをする！？」

「くっくっく、どうした顔が赤いぞ？今のは仮契約の一番簡単な方法だ」

「仮契約？」

「貴様の契約と似たようなものだ。貴様が魔力を与えて精霊を強化

するのと同じように従者に魔力を与えて身体能力を強化することができる。しかもアーティファクトというマジックアイテムも手に入る」

「アーティファクト？」

「このカードを持ってアデアットと唱えてみる」

渡されたカードを見るとクラススの周りに指輪が浮いており、クラススの後ろには精霊たちが描かれていた。

「アデアット」

パアッ！

「これは契約の指輪か？」

「随分とあるな、精霊という奴はそんなにおるのか？」

エヴァが指輪を一つ手に取って眺めながら聞く。

「私が文献で見たことがあるのはセルシウス、レム、ヴェリウスくらいか。だが精霊としか契約できないわけではないしな数が多いに越したことはないだろう」

「それもそうだな、しもう時はアベアットだ」

「アベアット」

指輪がカードに戻る。

「さて、そろそろ外に出るか。クラスもほどほどにしとけよあんまり引きこもつてると老けるぞ」

「ほっとけ」

「ナア、切リアオウゼ」

この日から、チャチャゼロからのラブコールが増えた。

召喚士、新技開発（後書き）

契約して欲しいオリジナルの精霊、モンスターを募集します。
感想待ってます。

召喚士の設定（前書き）

クラスがかなり強くなっていますが異世界補正とかそんな感じで
納得してください。

召喚士の設定

ネギまの世界に来る前の設定

ダオスを倒してから元の時代に戻りしばらくしてからエターナルソードの封印の旅に出る。その時にいくつか新しい契約をした。その後ユグドラシルに行きネギまの世界へ。

クラスの設定

召喚術：精霊や魔族、モンスターなどと契約し使役するもの。

主な使用方法として、召喚し戦わせる、魔力を借り魔術を放つ、召喚し補助行動（穴のあいた地面の修復、レアバードに電力の供給など）をさせる、などがある。

精甲術：精霊や魔族、モンスターなどを武具として体に纏う。

主に接近戦の時に使う。またまとった精霊などの一部を誰かに纏わせたり精霊などを開放して戦わせたりもできる。

ユグドラシルカード：マートルからもらったカード。時空戦士とダオスの力の一部を秘めている。

主な使用方法として、カードの力を使いクラス自身が彼らになる、カードから力を借り力の一部を借りる（身体能力や初級魔術など）、魔力を込め召喚する（異世界から呼ぶのではなく魔力で形を与えるので魔力量によって力に違いが出る）。

クラスが契約しているもの

シルフ：風を司る精霊。契約の指輪はオパール。

イフリート：炎を司る精霊。契約の指輪はガーネット。

ウンディーネ…水を司る精霊。契約の指輪はアクアマリン。

ノーム…地を司る精霊。契約の指輪はルビー。

マクスウェル…元素を司る精霊。契約の指輪はターコイズ。

ルナ…月を司る精霊。契約の指輪はムーンストーン。

ヴォルト…雷を司る精霊。契約の指輪はサードニックス。

アスカ…光を司る精霊。契約の指輪はトパーズ。

シャドウ…闇を司る精霊。契約の指輪はアメジスト。

オリジン…根源を司る精霊の王。契約の指輪はダイヤモンド。

グレムリンレアー魔界の住人。契約の指輪はサファイア。

プルート…冥界の王。契約の指輪はエメラルド。

フラムベルク…炎の剣の守護者。契約の指輪はカーネリアン。

フェンビースト…氷の剣の守護者。契約の指輪はカイヤナイト。

ワイバーン…ドワーフの守護者。契約の指輪はサーペンティン。

アレフ…古代松の精霊。契約の指輪はクリスタルアンバー。

チャチャゼロ…意思持ちし人形。契約の指輪はラピスラズリ。

移動手段

レアバード…ネギまの世界の技術を取り入れかなり少ない魔力でも飛行できるようになった。

召喚士の設定（後書き）

今のところはこんな感じです。フラムベルク、フェンビースト、ワイバーンの契約の指輪それっぽいのを見た目で選んでみました。感想待ってます。

召喚士と警備とバカレンジャーと（前書き）

警備をします。

召喚士と警備とバカレンジャーと

夜

「さてと始めるか…」

伸びをしながら歩き出す。今日は私とチャチャゼロ、龍宮、桜咲の四人で警備の日だ。

「ケケケ、早クナンカデネエカナ」

「ふわぁゝあ、私は出ない方がいいけどな」

うずうずしているチャチャゼロの言葉に欠伸をしながら答える。

「クラスさん。少しは警戒してください」

「警戒はしてるよ、ただこのところ徹夜が続いててね」

「徹夜して何をしてるんだい？」

「何エヴァと戦ってるだけだよ」

話に入ってきた真名にそう答える。

「あのエヴァンジェリンとかい？」

「ここ最近ずっとだよ」

精甲術が完成してからというものお前の頭にはそれしかないのかってくらいに。

「マア、旦那トノコンビナラ今ノトコロ負けナシダゼ」

「エヴァンジェリンにもかい？」

「ゴ主人ト妹ノコンビデモ俺達二八勝テネエヨ」

さて戦闘準備を始めるか。

「蒼き水流の女傑よ！契約に従い我に力を与えよ！ウンディーネ！敵を蹴散らす激しき水塊を我に纏わせ鎧と成せ！アクアメール！ウンディーネよ！彼女に其の力を貸し与えよ！」

海のような青い鎧で身を包み手には大剣が握られている。チャチャゼロは同じような鎧に双剣を構えている。

「精霊を使った肉体強化か…」

「さて警備の仕事を始めましょうか」

クラスがそう言うのとチャチャゼロが答えた。

「ドウヤラ団体サンガ来タミテダゼ」

チャチャゼロが見る方向には数十体の鬼がいた。

「斬岩剣！」

これで三十体目。どんどん増えてくる、きりがいいな……。それにしても。

「ケケケケケケケ！モット俺ヲ熱クサセテクレヨ！」

「荒れ狂う流れよ！スプラッシュ！煮え湯を飲ませてやろう！レイジングミスト！」

チャチャゼロさんがクラスさんの周りの敵を流れるような剣舞で切っていく。クラスさんは防御はチャチャゼロさんにすべて任せかなりの敵を殲滅している。負けなしというのにも納得がいく。

「きりがいいな……。あれをやるか。」

桜咲にも疲れが見えるしな。

「慈悲深き夜の女王よ、恵み豊かな光の精よ、契約に従いその力を我に貸し与えよ！澄み渡る明光よ、罪深きものに壮麗たる裁きを降らせよ！レイー！」

空から無数の光が降り注ぎ殲滅していく。

「これで最後だ！霊冥^{れいめい}へと導く^{みちび}破邪^{はしゃ}の煌めきよ 我が声^{わこえ}に耳^{みみ}を傾^{かたむ}けたまえ 聖なる祈り^{せいいの} 永久^{とわ}に紡^{つむ}がれん 光り^{ひか}あれ グランドクロス

！

敵が集まっていた場所に巨大な十字架が現れ敵を殲滅する。

「龍宮、術者は見つかったか？」

『ああ、今とらえ終わったとこだ。学園長への報告は私がするから先に帰っていいよ』

「よろしく頼むぞ。チャチャゼロ、帰るぞ」

「モウ終ワリカヨ、旦那切リアオウゼ」

「勘弁してくれ、早くベツトに飛び込みたいんだ」

「ショウガネエ、今日八勘弁シテヤルヨ」

次の日の放課後

「ということでもいつものように君たちが残ったわけだが…」

目の前には綾瀬、長瀬、クー、佐々木、神楽坂の五人。通称バカレ
ンジャーがそろった。

「君たちを見てると私に教師の才能がないということがよくわかる
よ…」

「いーのよ別に勉強なんかできなくても、この学校エスカレーター式
だから高校まで行けるのよ」

神楽坂はそう言うがな。

「別に進学のために勉強しろと言ってるんじゃないんだ。君たちには
好きなことがあるだろ？友達とお喋りすることだったり、部活で
頑張ることだったり、好きな人のことを思うことだったり、学生の
うちはそういうことに励めばいい。それはいいことだ。だけど、頭
の固いやつが偶にいるんだ。学生の本分は勉強だ。とかそんなこと
してる暇があるなら勉強しろ。とか自分たちの思い通りに学生たちの
未来を決めようとするやつらがな」

「クラーズさんがそうだったんですか？」

綾瀬がマシユマロカレースープという紙パックジュースを飲みなが
ら聞いてくる。

「私はどうしても恩師の研究を受け継ぎたくてな。その研究は他の
奴らからは不可能だとかあり得ないとか言われていたがな」

いつも大事にしてある帽子を撫でながら言う。

「話がずれたな、まあ、私が言いたいのは好きなことをしたい
なら、勉強ぐらい軽くこなしてみろってことだ。今日の補習はこれ
で終わりだ」

「クラーズさん一つ聞いていいですか？」

綾瀬が相変わらずジュースを飲みながら聞いてくる。

「その研究はどうなったんですか？」

「頭の固いやつの驚く顔は傑作だったぞ」
綾瀬の頭を軽く叩きながら教室を出る。

図書館島

「綾瀬か…どうした？」

「数学教えてくださいです」

綾瀬がノートと教科書を開きながら私の向かいの席に座る。

「で、なんで急にやる気出したんだ？」

「学校の勉強なんか私に私の好きなことお邪魔されたくないですし、頭の固い人を驚かせるほどの研究にも興味あります」

「そうかそうか、そう言ってもらえるのはうれしいが私の研究を教えるわけにはいかないな」

「なぜです？」

「君はまだ若いんだもう少し世界を見る必要がある」

「くだらない世界をですか？」

「ふっ、確かにくだらない世界かもしれないが、少なくとも君の周りはそんなことないと思うけどな」

「……」

「まあ君がいろんな世界を見てそれでも私の研究が気になったら私のところに来い。少しなら教えてやろう」

エヴァ宅

「クラス、手紙だ」

「手紙？」

エヴァから手紙を受け取るともうすぐこちらに来ると言うネギ君からのものであった。

「随分とうれしそうじゃないか？」

「そうか？」

「まあ、私もだがな、これでやっと忌々しい呪いが解ける！」

ネギ君。まあ、その、なんだ。こっちはいろいろ大変だから覚悟し

ておけよ？

召喚士と警備とバカレンジャーと（後書き）

次回原作突入です。
感想待ってます。

召喚士、少年のサポートをする（前書き）

原作突入です。

召喚士、少年のサポートをする

学園長室

「では指導教員を紹介しよう。入っていいぞい」

「失礼します」

「久しぶりです！クラスさん！」

「久しぶりだなネギ君。元気にしてたか？」

ネギ君の頭をなでてやる。

「クラスさん。そいつの知り合いなんですか？」

「ああ、一度会ったことがあってね」

神楽坂の質問に答えていると。

「そうそうもう一つ。このか、アスナちゃん、しばらくはネギ君をお前たちの部屋に泊めてもらえんかの？」

「げ」

「えゝ」

「ええよゝ」

三者三様の反応をした後、神楽坂は学園長に猛抗議し始めた。

「なんで私たちの部屋なんですか！？クラスさんの部屋でいいじゃないですか！」

「あゝ、神楽坂。私は居候の身でなネギ君を止めることができないんだ」

そんなゝ、と言いながら座りこむ。

「クラス君には少し話があるから残ったくれるかの。三人は教室に向かいなさい。しずな先生頼むぞい」

「ネギ君にあのクラス担任をやらせるんですか？」

学園長に話を聞くと今日から教師になるネギ君が2・Aの担任なるようだ。

「うむ、あのクラスならネギ君にいい影響を与えらると思うしの、そ

れに君の近くの方がいいじゃろ」
「わかりました」

少し遅れて教室に向かうと丁度ネギ君が入るところだった。
「失礼しま……ん？」
「ふわりっ。」

何やってるんだ！？なぜ障壁なんか張ってる！？
ポフッ。

「ゲホゲホ！いやー、引つかかつちやたなあ。ゴホ！」
気付いたか…やれやれ、先が思いやられるな。

「へぶっ！？あほ！あああああああ、ぎやふんっ！？」

このトラップは春日と鳴滝姉か、特別課題だな。その後ネギ君の自己紹介が終わりクラスの皆にもみくちやにされている。

「クラス先生。マジなんですか？」

「学園長が大マジだ。まあ、私がサポートするから大丈夫だとは思
うが…。あ、それとあのトラップは春日と鳴滝姉だよな？」

「そうです。…子供が先生って」

長谷川が頭を抱えて席に戻った。あの子には学園長が言っていた認
識障害魔法が聞いてないみたいだな。

ちなみに授業はいつの間にか始まった神楽坂と雪広の喧嘩のせいで
失敗に終わった。

「やつぱりネギ君を担任にするのは早すぎるだろ…ん？あれは…」
少し離れたところでネギが神楽坂に連れていかれていった。あとに
は散らばった本と宮崎が呆然としている。

「どうした？宮崎」

「あ、クラスせんせい。さっき、階段から落ちたところをネギせん
せーにたすけてもらったんですけどアスナさんが…」

「あー、もういい大体はわかった」

おそらく魔法がばれたんだろう。初日ではれるとは…あとでネギ君

に注意しないとな。

「それにしても一人でこんなに運んでたのか？綾瀬達に頼まなかったのか？」

「ゆえたちは歓迎会の準備があつて…」

ネギ君の歓迎会か。

「そういつときは私を頼れ。いいな？」

まわりに散らばった本の三分の二ほどを持って宮崎に言う。

「は、はい！」

「で、何処まで運べばいいんだ？」

「図書館島までお願いします」

さてと…。

『いやあ~~~~~！』

「なんでしよう？」

「さあな」

ネギ君、これ以上問題を起こさないでくれ…。

ネギ君の歓迎会が無事(?)に終わり解散となった。

「ネギ君に神楽坂。ちよつといいか？」

「なんですか？クラスさん」

「どうしたのよ？」

「ネギ君。魔法のことばれただろ？」

そう言くとネギ君がかなり焦り始めた。

「な！？何でわかつたんですか！？」

「クラスさんも魔法使いなの！？」

「落ち着け二人とも」

その後どうして魔法がばれたかを聞いた。

「宮崎を守るためか：なら仕方ないな。だが、ここでは必要以上に魔法を使うな。ここはあの村と違ってほとんどが一般人なんだから」

「うん」

ネギの頭を軽く撫でてやる。

「で、神楽坂」

「心配しなくても魔法のことは言わないわよ」

「いや、そうじゃなくてな。ネギ君は頭はいいがまだ人として未熟だ。だから君たちで導いてくれちゃんとした人になれるようにな」
ネギと同じように頭を撫でながら言う。

「私が言いたいのはそれだけだ。また明日な」

夜

「どうしたんだい？ クラース先生。難しい顔をして？ 子供先生のことかい？」

夜の警備をしている時考え事をしていたら龍宮が聞いてきた。

「いや、桜咲のことだ」

「わ、私ですか？」

いきなり名前が出た桜咲が聞き返してきた。

「さっきまで小テストの採点をしてたんだがな…綾瀬の点数が上がって来てて桜咲の点数が下がって来てるんだ。このままだとバカレンジャーのメンバー入れ替えになりそうだぞ」

「そ、それは、お嬢様の護衛で勉強に身が入らなくて…」

「そうか、私の授業では桜咲の手の甲に近衛を狙う鬼が現れるのか」
授業中刹那が手の甲をつねって眠気を飛ばしてるのを何度か見たことがある。

「そ、それは…」

「くくつ、それは大変だな刹那。なんなら私が撃ちぬいてやろうか？」

「ケケケ、俺ガ切ツテヤルヨ」

「待て、二人とも。相手は桜咲でも手こずる相手だぞ。ここはタカミチにも協力を頼んで…」

うるたえる桜咲を三人でいじっている

「これからはしっかり聞くので、もう勘弁してください！」

そろそろ許してやるか。

「ほらっ」

プリントを一枚、桜咲に渡す。

「これは？」

「お前が寝そうになつてた授業の要点をまとめたものだ。しっかり復習しとけよ。今度のテストで点数落とすようなら補習組に入れるからな」

「わかりました…」

さてと、もう少し遊ばせてもらうか。

「しかし、どうするクラス先生？もしかしたらすでに刹那は鬼に乗っ取られているかもしれないぞ？」

「そうか、その可能性を考えてなかったな…」

「コイツゴト切り刻メバイジャネエカ」

「それは最終手段だチャチャゼロ。私が以前見た文献に心の精霊について書かれていた、そいつと契約できれば…」

「そんなこと悠長なこと言ってる場合か！？こうなったら核がある左手を撃ちぬいて…」

「もうやめてくださーい！！」

召喚士、少年のサポートをする（後書き）

感想待っています。

召喚士、面倒事に巻き込まれる（前書き）

新しい精霊が出ます。

召喚士、面倒事に巻き込まれる

「理論的にはこれでいいはずなんだが…」

足元には巨大な魔方陣とその中心にある狐のぬいぐるみ。

「随分と面白そうなことをやっているじゃないか？」

「エヴァか…」

「で、何をするつもりなんだ？また新しい技でも開発したのか？」

「残念ながらそれはまだだ」

「クラスさん。これでいいでしょうか？」

エヴァと話していると茶々丸が円柱状の台を四つ持ってきた。

「ああ、それでかまわない。それをさっき言った場所に並べてくれ」

「ハイ、わかりました」

茶々丸が四方に台を並べる。

「よし。魔方陣から出ててくれ。…地水火風の精霊たちよ。汝らの力の一部を我に貸し与えよ」

エヴァたちを外に出し地水火風の精霊の力の一部を茶々丸が置いた

四つの台の上に召喚する。すると魔方陣が光出した。

「おい、何をする気だ？」

「心の精霊を呼び出す」

右手で印を結びながら答える。

「呼び出すだと？可能なのか？」

「ほかの精霊と違い心の精霊は人間が生み出した精霊だ。ほかの精霊よりは呼び掛けにこたえてくれるだろう。では、始めるぞ」

『我、いま人が生み出し精霊に呼びかける。我が声が届くのならはその姿を現せたまえ。我が名はクラス・F・レスター人と精霊を繋ぐものなり…』

クラスが唱え終わると魔方陣の光が増し、その光がおさまると巨大な狐の姿をした精霊がいた。

「私は心の精霊ヴェリウス。あなたが私を呼んだのですか？」

「そうだ。あなたと指輪の契約を交わしたい」

クラスが呼びかけるがヴェリウスはクラスのことをじっと見ている。

「どうしたんだ？」

「…あなたはなぜ精霊と契約を結ぶのですか？」

「私は…」

何のためだ？ 恩師のため？ あいつのため？ マーテルのため？ エヴァのため？ ネギ君のため？ それとも私の自己満足のためか？

「いいでしょう。あなたの心からは悪しき思いは感じられません。カルサイトの指輪を」

「…ありがとう。…我、いま心の精霊に願ひ奉る。指輪の盟約のもと、我に精霊を従わせたまえ…。我が名は…クラス・F・レスタ」

ヴェリウスが光となり契約の指輪に宿る。

「…悪しき思いか」

エヴァが何かつぶやいていた。

次の日

「じゃあ、一時間目を始めます。テキスト76ページを開いてください」

エヴァの隣に座ってネギ君の授業を見ている。ネギ君はどんな授業をするのかな？

「The fall of jason the flower .
……」

さすがに発音はいいな。

「じゃあ、今のところを誰かに訳してもらおうかな」

ほとんどの生徒が顔をそらす。神楽坂なんかそんなに回して大丈夫なのか？と思うぐらいにそらしている。

「……じゃあ、アスナさん」

「なんで私なのよ!？」

ネギ君。少しは察してあげなさい。まあ、私もあてたことはあるが……。

「えーと……ジエイソンが……花の上……に落ち春が来た?……」

「アスナさん勉強だめなんですねぇ」

「なっ!？」

今のはダメだなネギ君。

ゴンッ!

持ってた本(もちろん背表紙)でネギ君を殴る。

「~~~~~!？何するんですか!？クラスさん!」

「神楽坂は勉強はできないが誰かのために動くことができるやさしい子だ。いい先生になりたいなら学力だけで生徒を判断するな」
「素晴らしい席に戻るとエヴァが話しかけてきた。」

「なかなかいいことを言うじゃないかクラス先生?」

「私の幼馴染の言葉だよ」

放課後

やれやれテキストを忘れてしまつとわな。

「あつ、クラス先生。家庭科で野菜ジュース作っただけですけど飲みませんか?」

神楽坂が赤色の野菜ジュースを渡してきた。

「丁度のどが渴いていたんだ、ありがとう」

ゴクッゴクッ!

なんか変わった味だな?

「なんにも起こらないじゃない」

「おっかしーな」

何か二人で話てるがどうしたんだ?

「クラス先生……」

「どうした?近衛」

顔が赤くなってるぞ？風邪か？

「先生つてよく見ると、なんかすごいかつこえーな」

よく見ると他の生徒も顔を赤くしてこっちを見ている。

「先生、どうぞこれを……」

「先生これ食べて！。家庭科で作ったの」

明らかにおかしいな。

「ネギ君に神楽坂、後で聞きたいことがある！？」

パンツ！

おいおい龍宮その銃で何をするつもりなんだ？それと桜咲、なぜ刀を抜いてるんだ？

「くそっ！」

急いで教室から出る。

「くくクラスせんせー！」「くく」

くそっ、どんどん増えてくる。どこか身を隠せる場所はないか？

「クラスさん！こっちです！」

ネギ君がいる部屋に駆け込むとアスナが扉を閉め鍵をかけた。

「はあはあ……一応聞いとくがさっき私が飲まれたものはなんだ？」

「ほ、惚れ薬です」

「なんでそんなものを作ったんだ？」

「実は……」

朝のお詫びに神楽坂が前に欲しいと言った惚れ薬を作ったが、神楽坂はそんな怪しいものはいらないと思って丁度来た私に飲ませたと。

「ネギ君ここでは魔法を使うなといったろ、それと神楽坂、そんな怪しいものを人に飲ませるな」

本で二人の頭を軽くたたく。

「ごめんなさい」

「まあ、過ぎたことを言ってもしょうがないか。二人は誰も入らないようにしといてくれ」

こんなことに精霊の力を借りたくないが…。

「心を見し狐よ、契約に従い我に力を貸し与えよ。ヴェリウス！」
うまくいってくれよ。

「心を司りし精霊よ、不浄を退ける力となれ、リキュペレート！」
これで大丈夫なはずだ。

「神楽坂みんなが元に戻ってるか様子を見てきてくれ」

「わかったわ」

それにしても疲れた。

エヴァ宅

「今日は随分と楽しそうだったじゃないか？」

家に帰るなりエヴァがそんなことを言ってきた。

「エヴァも同じ立場になったらそんなこと言えなくなるぞ」

一般の生徒はともかく龍宮や桜咲まで武器持参で来たんだ。

「あの二人にハートを撃ち抜かれそうになったからな。殺意がない
分逆に怖かった」

召喚士、面倒事に巻き込まれる（後書き）

感想待ってます。

召喚士、図書館島に行く（前書き）

期末試験です。

召喚士、図書館島に行く

学園長室

「ネギ君への最終課題ですか？」

「うむ、それで君には一芝居うつてもらいたいんじゃない？」

「へっ？」

地底図書室

「本当にこんなところに来るのか？」

学園長に言われたとおりに変装はしたが、魔法の本のうわさだけでここまで来るとは思えな…。

ザッパーン！

どんな行動力だまったく。

「ん、ここは？」

「…って、ここはどこなの…！？」

ようやく起きたか。

「ようこそ地底図書室へ」

「誰です？」

「私はこの管理人の一人、藤林すずです」

「管理人さんか？」

「なら、早く出口教えてよ」

全く生徒のためとはいえないんでこんなことを…。

「それはできません。あなた方にはこれからテストまでここで勉強をしてもらいます」

「なぜでござるか？」

懐から魔法の本を出す。

「あなた方はこれを求めてここに来たのでしょう？」

「メルキセデクの書！」

ネギ君、魔法関係のやたらというんじゃない。

「魔法の本につられてここまで来た者には特別補習を行うことになってます」

そんな〜とバカレンジャーがへたり込む。

「それでは勉強スペースに案内します」

すると後ろからぐぎゅる〜っ！と音が鳴った。振り返るとバカレンジャーが顔を赤くして俯いている。

「ここにいる間のお食事は私が準備します。朝食の準備もできていますよ」

「「「やつた〜」」」

どうやらしつかりできてるな。私も手伝うつもりだったがネギ君一人で大丈夫か。この分ならテストで最下位脱出も大丈夫だろう。

「すず殿。ちよつといいでござるか？」

「どうしました？長瀬さん」

大体聞きたいことはわかるが…。

「お主は忍者でござるな？」

「そう言うあなたもそうでしょう」

「甲賀中忍、長瀬楓ござる」

「伊賀栗流、藤林すずです」

「聞かない流派でござるな？」

「この世界では私しか使い手はありません」

「フム、いつか手合わせ願いたいものでござるな」

「ええ、いつか。それより勉強の方はいいのですか？」

「にんにん、大丈夫でござるよ、では」

戻ったか、そろそろ食事の準備をするかな

テスト前日

「きゃあああああああつ！」

なにがあつた！？

「フオフオフオ」

目の前には水浴びをしていたと思われる、佐々木、クー、長瀬の三人と佐々木を捕まえている学園長の声を発するゴーレム。学園長にはお仕置きが必要だな。

「あれは地底図書室を荒らすゴーレムです。クーさん。長瀬さん。あれを倒すのを手伝ってください」

「任せるアル！」

「了解でござる」

「フオ！？」

クーが足を殴って動きを止めた瞬間長瀬が佐々木を助け出す。

「二人とも下がってください。忍法・雷電！」

ゴーレムにクナイを投げ、クナイがあたった左腕に雷を落とし破壊する。

「みなさん！滝の裏に非常口があります。そこに向かってください」

「わかったわ。みんな行こう！」

「ふおふおふお、クラス君も演技派じゃのう」

「学園長。こんなことは予定になかったはずですが？」

「なに。ちよつとしたお茶目じゃよ」

「そうですか。なら。忍法・児雷也！来い！」

「ふお！？クラス君。その巨大な力エルはなんじゃ？」

「ちよつとしたお茶目ですよ学園長」

「ふお~~~~~！！？」

テスト当日

「まったく、あの子らは遅刻ですか」

新田先生が時計を見ながらつぶやく。

「新田先生。彼女らのことは私に任せて教室に行ってください」

「それじゃあ、クラス先生頼みます」

キンコンカーンコン

「遅刻ー！！」

「やっと来たか。お前たちは別教室だついてこい」

「あつ、クラス先生」

別教室

「さて、テストを始める前に神楽坂、綾瀬、クー、長瀬、佐々木の五人に言いたいことがある」

五人がこちらを見る。

「地底図書室の管理人から話は聞いた。よく頑張ったな」

「……はいっ！」「……」

「それじゃあ、テストを始める。試験時間は……」

クラス成績発表後

「どこに行くんだ？ネギ君」

荷物をまとめて駅に向かうネギ君を呼びとめる。

「故郷へ帰ります」

「君の夢はそんなに簡単にあきらめられるものなのか？」

「それは……」

「それに君のために頑張ってくれた彼女たちに何も言わないのは失礼じゃないのか？」

そう言つて後ろを向く。そこにはネギを止めるために走ってきたバカレンジャーと図書館探検部の皆が。

「いまさら合わせる顔がないです」

逃げようとするネギ君を捕まえ、彼女たちに渡す。そして後ろから歩いてきて言う学園長のもとへ行く。

「学園長。その合計し忘れた彼女たちの点数を早く彼女らに伝えてやってください」

「クラス君は見ないのかの？」

「地底図書室で彼女らの世話をしたのは私です。見なくてもわかります」

第一位2年A組

召喚士、図書館島に行く（後書き）

感想待ってます。

召喚士、彼女を想う（前書き）

お楽しみください。

召喚士、彼女を想う

春休みのある日の夜

クラススの荷物の中に入っていた森を思わせる深緑色の宝石が輝きだした。

「エレメントオーブが光っている？…まさかっ!？」

その輝きを見るなりクラススはあるところへ向かって走り出した。

「おい、クラスス。そんなに慌ててどこ行くんだ？」

「世界樹だ!」

世界樹

「世界樹が光ってるだど？」

私の後ろについてきたエヴァが光り輝いている世界樹を見て驚きの声を上げる。

「マール！そこにいるんだろ!？」

エレメントオーブを掲げ、大樹の精霊に呼び掛ける。すると、世界樹の光が一か所に集まりマールの姿となる。

「世界を渡りし召喚士、クラススよ。よく来てくれました」

「あなたがここまで来たんだ。何か問題が起きたのか？」

この世界もしくはあちらの世界で何かが起こったのか？

「心配ありません。どちらの世界でも何も起ってません。今日はあなたに渡したいものがあつてきました」

「私に渡したいものだと？」

「はい。一つは時の魔剣です。いずれ必要になる時が来るでしょう」マールが渡してきたエターナルソードを苦笑しながら受け取る。

「せっかく私が封印したのにな」

「もう一つはミラルドからです」

「ミラルドから？」

マールの足元にはたくさんの書物が置かれていた。

「あなたにこれから必要だと言われておりました」

そこには私が集めた魔道書や古文書、論文などがあつた。

「そろそろ限界のようです。どうかこの世界に悲しみの涙が流れないよう……」

そう言い残すとマーテルは光に戻り世界樹の中に入って行った。世界樹は2、3回点滅を繰り返すといつもの世界樹に戻った。

「悲しみの涙が流れないよう……。か」

エヴァが後ろでポツリとこぼした。

エヴァ宅

『クラスへ

元気にしてますか？誰かに迷惑をかけていませんか？変な意地張ったりしていませんか？まあ、返事は無事帰って来てからでいいわ』

「相変わらずだな」

『私は元気です。学校の方も順調です。ただ、生徒たちが帰った家の中がいつも以上に広く感じます』

「……」

『早く帰って来て未来についてあなたの話を聞かせてください』

「……まだ、先になりそうだな」

『まあ、精霊さんに頼んでまで帰ると言ってくれたのでその日が来るまで待つてあげる』

「必ず帰るよ」

『この手紙と一緒に精霊さんに送ってもらったのは、あなたが集めていた本とあなたが旅に出ている間に見つけた役に立ちそうな本です。足引っ張らないようにしっかり研究続けるように』

「言われなくてもわかってるさ」

『あと、あなたが好きなチェリーパイのレシピも送ってもらったから。自分で作るなり、誰かに作ってもらうなりしてください。それでは、また会える日まで。』

ミラルドより』

読み終わり手紙をしまっているとキッチンからいい匂いが漂ってきた。

「チェリーパイが焼けました」

茶々丸が焼きたてのチェリーパイを持ってキッチンから出てきた。

「うまいな」

エヴァが一口かじってそう呟く。私も一切れ取り口へ運ぶ。私の好きな甘さ控えめのチェリーパイが口の中に広がる。私、エヴァ、チャチャゼロ、茶々丸の四人で食べ、チェリーパイはすぐになくなった。

召喚士、彼女を想う（後書き）

感想待ってます。

召喚士、氷の精霊と出会う（前書き）

感想、ありがとうございます。

精霊を過小評価していると書かれてましたが、設定としてはクラスは詠唱を短縮しているので威力は抑えられています。

クラスの強さとしては『紅き翼』の連中と同等かそれ以上。前衛がいれば負けることはない。

という感じです。

召喚士、氷の精霊と出会う

朝起きたら山が凍っていた…。

「…エヴァ。おまえなんかやったか？」

「私は今封印されているんだぞ。おまえの精霊じゃないのか？」

まわりにはかなりの数の野次馬がいる。異常気象だの、化学兵器だのいろいろな憶測を並べ立てている。

「とりあえず、学園長のところに行くか」

「そうだな」

学園長室

「さっぱりわからん」

学園長に山のことを聞いたが案の定の台詞だった。

「むしろ、ワシが聞きたいくらいじゃ。クラス君。こんなことできる精霊はおるのかの？」

「氷の精霊、セルシウスならできるかもしれないが今のところ何とも言えないな情報が少なすぎる」

「そうじゃのう。このことはクラス君に任せても良いかの？ほかの先生たちは野次馬を納めるのに手いっぱいなんじゃ」

「かまわないが…」

「それじゃあ後は頼んだぞい」

エヴァ宅

「やはり情報が足りないな」

わかったことは山が凍ったのは深夜に一瞬として凍ったらしい。これは天文部的那波に聞いたものだ。後はまあ凍った場所はイフリートの力でどうにかなるということだ。原因を取り除かなければ意味がないが。

「ん？そう言えば長瀬がああ山で修業していたな」

ポケットから携帯を出し長瀬に電話をかける。

『クラス殿何か用でござるか?』

「ああ、氷漬けになってる山って長瀬の修行場だったよな?何か最近変わったことはなかったか?」

『特に何も…いや一つあったでござる』

「なんだ?」

『昨日、山から下りる時、不思議な御仁を見かけたでござる』

「どんな奴だ?」

『肌が氷のように青くて、青色の狼のような動物を横に連れておった』

「わかった、ありがとう」

『あいあい。このくらいお安い御用でござるよ。それでは…』
電話を切り古文書を開く。

「氷のような肌に狼か……」

次々とページをめくり、新しい本を開いていく。

「これも違うこれも…ん?…これだ!」

ページをめくっていた手の動きが止まる。

「氷の精霊は、氷の肌を持ち蒼き狼を従えるか…」

やはり氷の精霊か…しかしなぜこんなところに?精霊は本来自らを奉るところから動かないはずだが。シルフのように我を忘れているのか?いや精霊が本気を出せば学園都市まで凍っているはずだ。ということはまだ自我が残ってるのか?どちらにせよしっかり準備しないとな。

「やはり精霊か?」

エヴァが後ろから覗きこみながら言う。その言葉に頷きながらケータイを開く。

「龍宮か?氷漬けの山の件で仕事だ。…ああ、刹那もいるなら呼んでくれ。…請求は学園長に頼む。…それじゃあ、エヴァの家の前に来てくれ。それじゃ」

ケータイを操作し学園長にかける。

「クラスです。氷漬けの山は精霊の仕業だと思われます。それでですねおそらく戦闘になると思いますので周りに結界の準備をしておいでください。お願いします」
それじゃあ準備を始めるか。

エヴァ宅前

あの旅の時と同じ服に着替えて外に出ると丁度二人が来た。

「さて、クラスさん私たちは何をすればいいんだい？」

銃を持った龍宮が訪ねてくる。

「これから氷の精霊と戦いに行く」

「氷の精霊が山を凍らせたのですか？」

「おそらく、漏れ出た冷気が山を凍らせたのだろう」

桜咲の疑問に答えると龍宮が焦った声で聞いてきた。

「漏れ出た冷気だけで山を凍らせるって、本気を出したらどうなるんだ？」

「少なく見積もっても学園は簡単に凍るだろうな」

二人が信じられないという顔をしている。

「そんな相手に勝てるんですか？」

桜咲が刀を握りしめ言う。

「心配することないぞお前たち。クラスはそんな相手と同等以上の力を持つものを使役できるんだからな」

いつの間にか来ていたエヴァが二人に言う。

「そう言うことだ二人とも。今回は精霊の状態が不安定だから念のためにお前たちを呼んだんだ」

そう言う二人が胸をなでおろした。

「さて、それじゃあ準備を始めるか。この魔方陣の中に入ってくれ、自分の足元に書かれている魔方陣の中に龍宮、桜咲、それとチャチャゼロを招き入れる。」

「粗暴な紅蓮の猛者よ、焰王の従士よ、一時の間、汝らの力を我らに貸し与えよ。我らの剣となり、盾となれ。イフリート！フラムベ

ルク！」

四人に紅蓮を想わせる紅い鎧がつけられる。また、クラーズの手に
は紅い大剣。チャチャゼロには双剣が持たされた。龍宮と桜咲もそ
れぞれの武器に赤い光が纏った。

「それじゃ、いこうか」

凍った山

「誰だ！？そこにいるのは！」

クラーズ達が頂上にたどり着くと青い肌をした女性が氷づけされた
巨大な狼の前に座っていた。

「私はクラーズ・F・レスター。召喚士だ」

そう言う彼女が驚いた顔をした。

「そうかお前が……。私はセルシウスだ。クラーズ。おまえを優秀な
召喚士として頼みがある。我が従者フェンリルを殺してくれ」

「なぜだ？」

「フェンリルは大量の瘴気を喰らい体内に取り込んでしまった。も
はや助かる見込みはない。それにそろそろ私の方も限界だ」

そう言うセルシウスは今にも倒れそうだ。

「龍宮。セルシウスを安全な場所へ。その後は遠くから援護射撃を
頼む」

「了解」

そう言うセルシウスを抱えて山を下りていく。

「チャチャゼロ、桜咲。私のサポートを頼む」

後ろに下がりながらそう言う。

「はいっ！」

「ケケケ！任せトキナ！」

二人の返事とともに氷に罅が入りフェンリルが顔を出した。

「UWOOOOOOOOOOOOOOON……！」

「いくぞ！吼えよ！古の炎！不浄の生命を灰燼へと誘え！エンシェ
ントノヴァ……！」

「斬空閃！秘劍・百花繚亂！！」

[illegible]

「いけるか？焔の御志よ！？くつ！」

「ここからが本番か……」

「イクゼエ！」

「奔放なる大地の精よ、契約に従い我に従え！ノーム！奴の足元を

GA A ! ?

「そのまま捕まえろ！」

「G
A
A
A
A
A
A
! ! ! !」

炎でフェンリルを囲む。

!

発を起こした。

a a a a a a a
「 G A A A A A A A A a a a a a a

爆発が収まるとそこには何も残っていなかった。

「終わつたな」

エヴァ 宅

「ありがとうございました」

セルシウスが頭を下げる。

「かまわない。それよりあなたと契約を結びたいんだが……」

「わかりました。それではアズライトの指輪を」

「我、いま氷の精に願い奉る。指輪の盟約のもと、我に精霊を従わせたまえ……。我が名は……クラーズ・F・レスター」

セルシウスが光となって指輪に宿る。

これで終わりか…。

学園長室

「いれどつしようかのつ?」

麻帆良新聞

「隕石衝突か!？」

「一晩にして山が凍るといふ不可思議な事件が起こった裏山だがそれが一日で溶けるといふこれまた不可思議な事件が起こった。取材班が裏山に行くとそこには巨大なクレーターがあり一連の事件に何らかの関係があるのではないかと思われます。一部では隕石墜落や化学兵器など様々な憶測が……」

召喚士、氷の精霊と出会う（後書き）

感想待ってます。

召喚士、守る（前書き）

新学期です。

召喚士、守る

今日から新学期またあの騒がしい彼女たちの相手をするのか。

「……3年！A組！！ネギ先生＆クラス先生ー！！」
全く朝から元気だな。これが若さか。

「えと…改めまして3年A組の担任になりました。ネギ・スプリングフィールドです。来年の三月までの1年間よろしくお願いします」
「副担任になったクラスだ。よろしく」

「……はーい」
「……よろしくー」

エヴァがネギを鋭い目で見てる。…ああ呪いのことか。そんなことを考えていたらしずな先生が教室に来た。

「ネギ先生、クラス先生。今日は身体測定ですよ。3・Aの皆もすぐ準備してくださいね」

「あ、そうでした。ここですか！？わかりました。しずな先生」
何か嫌な予感がするので廊下に出る。

「…えと、あのッ。今すぐ脱いで準備してください！」
問題発言だぞネギ君。

「ネギ先生のエッチ……っ」
「間違えました」

そう言いながらネギ君が廊下に飛び出してきた。

「落ち着きが足りないぞ。ネギ君」

「そうですね。みんなの先生なんだからもっとしつかりしないと…」
「その意気だ、ネギ君。私はやることがあるので後は頼んだぞ」

「はいっ」

ネギ君の頭を撫でて職員室に向かう。

帰り道

桜通りを通ると近衛が裸の宮崎を抱えてわたわたしていた。

「近衛どうしたんだ？」

スーツを宮崎に掛けながら近衛に聞く。

「あ、クラスさん。よーわからんけど、ネギ君が事件の犯人を追いかけてもーて、アスナもそれをおいかけていったんよー」

「とりあえず、宮崎を運ぶぞ」

「わかったえー」

全くエヴァめ。私の仕事を増やしやがって。女子寮につき宮崎を近衛に頼んでネギ君たちの様子を見に行くことにする。

「ウチの居候に何すんのよーっ」

すごいなアスナ。エヴァの障壁を破るなんて。

「とりあえず連れて帰るか…。アーチエ」

箒に乗りエヴァと茶々丸を回収して家に帰る。後ろでアスナが何か言っているがとりあえずは無視だ。

エヴァ宅

「で、なんで生徒の血なんか吸ってるんだ？」

「魔力を回復するためだよ」

「なら私の血を吸え、魔力の回復なら私の血で充分だろ」

「それは私側に着く気になったということでもいいのか？」

「前にも言ったとおり私は中立だ。命の危険がない限り手は出さない」

「ふんっ、まあいいさ…ではいただくとしよう」

二日後

ネギ君が方にオコジヨを乗せていた。あれが以前文献で見たオコジヨ妖精か…。また今度見せてもらうか。それより。

「今日も待ったりサボらせてもらっよ。」

「残念ながら1時間目の私の授業は強制参加だ」

エヴァを猫のように持ち上げ教室に連れていく。

「クラス！？何をする放せ！」

「教室に着いたら放すさ」

教室で話した後、茶々丸に頼んで逃げないようにしてもらった。

放課後

チェリーパイを食べながら街をぶらつく。チェリーパイは春休みからよく茶々丸が作ってくれるようになった。

「どこに行くかな…。そう言えば茶々丸が言ってた猫広場ってこのあたりだったよな」

しばらくしてたどり着くとそこでは戦闘が行われていた。

「魔法の射手連弾・光の11矢！！」

「追尾型魔法、至近弾多数…避けきれません。すいません、マスタ―…。もし、私が動かなくなったらネコのエサを…」

何やってるんだ！！

「ノーム！彼女を守れ！」

地面が盛り上がり茶々丸を守る。

「え、クラスさん！？」

ネギ君が驚いてこちらを見る。神楽坂やオコジヨも同様にこちらを見る。

「やいてめえなんで邪魔をするんでえ！」

オコジヨが何か言ってるが無視して茶々丸に話しかける。

「大丈夫か？」

「ハイ。ありがとうございます」

「なら先に帰っている。私はネギ君たちに話がある」

「わかりました」

そう言っただけで家に向かって歩き出す茶々丸。それを見送った後ネギ君と向かい合う。

「…クラスさん。クラスさんもエヴァンジェリンさんの味方な
んですか？」

ネギ君が杖を握りしめながら聞いてくる。

「私は中立だ。命の危険がない限り手は出さない」

「兄貴騙されちゃあいけませんぜ。奴もきつとエヴァンジェリンの
仲間だ今のうちに姐さんと二人で倒すんだ！」

なるほどこのオコジヨがネギ君を…。

「少し黙っててくれないか、オコジヨ君。話がややこしくなる。と
りあえず座ろうか」

近くのベンチを指さしながら言う。

「クラスさんはエヴァンジェリンさんとはどういう関係なんです
か？」

ベンチに座るなりネギ君が聞いてきた。

「友達以上家族未満って感じかな。教師になる1年ぐらい前から一
緒に住んでる」

「じゃあ、やっぱりエヴァンジェリンさんの仲間なんですね」

「さっきも言ったがこの件に関しては命の危険がない限り中立だ」

「じゃあなんでさっき手を出したんでい」

オコジヨが言うがそんなの決まってる。

「もちろん命の危険があったからだ」

そう言うとなぎ君がびくつと身を震わせた。神楽坂も俯いている。

「でも、相手はロボットですぜい」

「ロボだろうと私が知っている茶々丸は彼女だ。たとえ姿が同じだ
ろうと記憶を持っていようとも作りなおされたのならそれは私の知
っている茶々丸ではない」

オコジヨも黙ってしまった。

「そう言うことだネギ君。他人の言葉に惑わされずに自分で考えて
行動しろ。それと神楽坂、ネギ君が間違えたときには君が教えて導
いてあげるんだ。それじゃあな」

ネギたちの頭を軽く撫でて家に帰る。

エヴァ宅

「さつきはありがとうございました。しかしなぜ私を助けてくれたのですか？私が壊れても記憶のバックアップはしてあるので何度でも直せます」

「ネギ君達にも行ったが、私が知ってる茶々丸は君だけだ。たとえば記憶があっても作りなおされたのならそれはもう別人だ」

「…よくわかりません」

「理解しなくても良いさ。私が好きでやったことだ」

「…クラスさん。今日の夕飯は何が食べたいですか？」

「さつきまでと話がつかないぞ。」

「急にどうしたんだ？」

「お礼をしたいんです」

お礼か。

「そうか…。ならマーボーカレーが食べたいな」

「マーボーカレーですか？」

「向こうの世界の食べ物だ。確かこの前チエリーパイのレシピと一緒に送られてきたはずだが…あった。これだ」

この前送られてきた本の中からレシピを探し出して茶々丸に渡す。

「わかりました。では夕食を楽しみにしててください」

夕食

「うつつまい！？茶々丸おかわりだ！」

やはりうまいなマーボーカレーは。

「茶々丸私もおかわりだ」

「ハイ、クラスさん」

「ほんとにうまいな…。しかも何かが回復しそうなうまさだ」

エヴァが満足げに語っている。

「RPGで言うならHPとTPだな」

「どれくらい回復するんだ？」

笑いながらエヴァに聞く。

「もちろん全回復だ！これさえ食べればボス戦も楽勝だ！」

私たちは味噌おでんを食べたがな。今度リクエストしてみよう。

召喚士、守る（後書き）

マーボーカレーをつまみ食いしまくったのはいい思い出です。もうそろそろなくなるんじゃないかね？というぐらい食べまくったことがあります。ボアと戦うころには鳳凰天駆を覚えてました。感想待ってます。

召喚士、見守り看病する（前書き）

エヴァが風邪をひきます。

召喚士、見守り看病する

日曜日。ネギ君がどんな答えを出したのか聞きに行こうとしたら神楽坂とオコジヨが走ってきた。

「どうした？そんなに急いで」

「あ、クラスさん。ネギ見なかった？さっき飛び出して言っちゃって」

どうやらまだ答えを見つけてないようだ。まあ、これくらいは手伝ってやるか。

「神楽坂。ネギ君は琥珀のペンダントをしていたか？」

「琥珀のペンダント？確かつけてたような……」
なら大丈夫か。

「アレフよ。ネギ君のところまでこの指輪を導け」

そう唱えると契約の指輪から光が伸びる。

「この光の先にネギ君がいる。指輪はまた今度返してくれればいい」
神楽坂に指輪を渡しながら言う。

「ありがとう。クラスさん」

そう言うなり神楽坂は走って行ってしまった。

「私も様子を見に行くか……すず」

そう唱えると木の葉が舞い上がりそれが収まるころにはクラスの姿はなくなっていた。

翌朝

『ありがとう、長瀬さん。ぼく……なんとか一人で頑張ってみます』
そっくりネギは箒に乗って飛んで行ってしまった。それにしても一人……まだ少し周りが見えてないようだ。まあ、すぐに気付くだろ……。

「そろそろ……」

「帰るでござるか？」

考えているうちに後ろに回られたみたいだ。

「ええ、今回の任務は終わりましたから」

「では、手合わせをお願いしたい」

長瀬が構えを取る。

「いいでしょう…忍法・不知火！」

一瞬で長瀬の後ろに回り込む。

「むっ!？」

振り返った長瀬ののど元に小刀を当てる。

「いつの間に拙者の小刀を？」

「後ろに回り込むついでに盗らせていただきました」

「拙者もまだまだ修行が足りぬでござるな」

「あなたは強いです。ですが私のいた場所に比べてこの世界は易し過ぎます。忍者は…非情でなければ務まらないのです」

「非情でござるか…」

「私はそう育てられました。あなたは違うようですね。…少しうらやましいです。では、またいつか」

木の葉が巻き上がる。そのうちに長瀬から離れ、山を下りる。

「なんで私はあんなことを言ったんだ?…もしかしてすずの感情が…」

次の日

「吸血鬼が風邪とはな」

私の目の前には顔を赤くしているエヴァが寝ている。

「魔力の減少した状態のマスターの体は10歳の少女のそれと変わりありませんので」

メイド姿の茶々丸がそう答える。それを聞きながらケータイを取り出す。

「それじゃあ、私も看病するか………もしもし、学園長か?エヴァ

の看病をするので今日は学校を休む。それじゃ」

「フォッ?とか、ちよっ?とか言ってたが何とかしてくれるだろう。」

「よかつたのですか?」

「別にかまわないさ。授業も今日は2・Aだけだしネギ君が何とかしてくれるだろう」

「実際予定よりも先に進んでるから一日ぐらい休んでも平気だ。」

「いえそうではなく、学園長が何か焦っていたようでしたので」

「大丈夫だろ」

「何度も頼みを聞いてやったんだ一日ぐらい別にいいだろ。」

「カランコロン」

「誰か来たみたいだな。」

「茶々丸。誰か来たみたいだぞ」

「では見てきます。クラスさん。マスターのことお願いします」

「エヴァの言葉で茶々丸が下に向かう。」

「まったく、私が風邪とはな」

『うわっ!?!びっくりした!ち、茶々丸さんですか!』

「この声は…」

「ネギ君か」

「リビング」

「不老かつ不死である彼女が風邪なんか引くわけないでしょう」

「そのとおりだぞ。私はこの通り元気だぞ」

「そんなこと言うなら後ろで支えているこの手離していいか?」

「え、エヴァンジェリンさん!」

「ネギ君が懷から何かを出す。」

「……………なんだそれは?」

「果たし状ですっ!僕ともう一度勝負してくださいっ!」

「それが君の答えか、ネギ君。」

「ならここで決着をつけるか?私は一向に構わないが……………」

「…いいですよ。その代わり僕が勝ったらちゃんと授業に出てくだ
さいね!!」

さて、これ以上はダメだな。

「そこまでだ」

エヴァを本で軽くたたくと気を失った。それを肩に担いで寝室に運
ぶ。

寝室

「クラスさん、ネギ先生、私は薬をもらってきますのでその間マ
スターを見ていていただけませんか？」

「わかった」

「ええっ!!僕がですか!？」

ネギがなぜだか知らないが焦ってる。その間に茶々丸は言っしま
った。

「僕は敵なんですよね?ここにいていいんですか?」

なんだそんなことか。

「帰りたいければ帰ればいいさ。だけど君は風邪で寝込んでる生徒を
見捨てることはしないだろ?」

「そ、そうですね」

そんなことを言っているとエヴァ咳をし始めた。

「コホツコホンツ…ハアハア…のどが…」

「のどが渴いたんですね。クラスさん台所は…」

ネギ君がこつちを見て固まってる。

「どうした、ネギ君?」

「何やってるんですか?クラスさん」

今、私はエヴァを抱き上げ膝の上に座らせてる。

「ああ、この方が飲ませやすいんだ」

「ちうちう…」

エヴァが私の首筋から血を飲んでいる。さてそろそろいいだろ。エ
ヴァの背中を軽くたたき飲むのをやめさせてから寝かせる。

「ハアハア寒い…」

「どうしよう汗でパジャマがぐっしょりだ」

「シルフ。エヴァを着替えさせてくれ」

エヴァを着替えさせている間部屋の外に出る。

「それじゃあ、私はお粥でも作るから後は頼むぞ」

「ハイ、わかりました」

「クラスさん。マスターは？」

茶々丸が薬を持って帰ってきた。

「今ネギ君が見てるんだが…」

『何を見た！？どこまで見たんだ、言え貴様ーーーーっ!!』

「あ…マスターが元気に…よかった」

「まあ、ぶり返すかもしれないしな。もう少し寝かしとくか」
本を持って寝室に向かう。

召喚士、見守り看病する（後書き）

感想待ってます。

召喚士、見学する（前書き）

短いです。

召喚士、見学する

夜

『こちらは放送部です。これより学園内は停電となります。学園生徒のみなさんは極力外出を控えるようにしてください』
さて、そろそろエヴァが動くか。確か大浴場だったな…。

「言っただろう？ 私は悪い魔法使いだって。…ふふ、一人で来たことを後悔させてやろう」

結局ネギ君は一人で来たのか…。十分な装備をしてきたようだが…。

「やれ。我が下僕たちよ」

エヴァが操っている生徒に脱がされていく。

「彼女たちは後で何とかするとしてオコジヨの方を見てくるか」

ネギ君が何とか体勢を立て直すのを見てからその場を離れる。

女子寮前

神楽坂がオコジヨを肩に乗せて出てきた。

「ネギ君の所に行くのか？」

「クラスさん」

神楽坂が私に気付いて立ち止まる。

「いいのか？ せっかくネギ君が君を巻き込まないように一人で向かったのに。その覚悟を無碍にして」

「クラスさんが言ったんじゃない。君たちが導けって。一人で無茶しようとしてるあいつに手を貸してくれる人がいるってことを教えてあげなきゃ」

「いい答えだ」

ウイングパックからレアバードを出し乗り込む。

「乗れ。ネギ君のところまで連れてってやる」

橋

橋の入口のところにレアバードを下す。

「私が送れるのはここまでだ」

「ありがとう。クラーズさん」

「恩に着るぜ旦那」

そう言うのと凄まじいスピードで走って行った。それと入れ替えにチャチャゼロが歩いてきた。

「どんな感じだ？チャチャゼロ」

「アンナノ子供ノ遊びだ。全然熱クナレネエヨ」

チャチャゼロが私の頭の上に乗りながらつぶやく。

「子供相手なんだからしょうがないだろ」

そついい遊び場へと脚を進める。

ネギ君とエヴァが魔法の矢で撃ち合いをし茶々丸と神楽坂が離れたところでデコピンの打ち合いをしている。確かに子供の遊びだな。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル。来れ雷精、風の精！！」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック。来れ氷精、闇の精！！」

これが最後の打ち合いになるかな？エヴァは余裕の笑みを見せ、ネギ君は困惑を見せる。

『雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐』

『闇を従え吹雪け常夜の氷雪。来るがいいばーや！！』

完全に遊んでるなエヴァの奴。

『雷の暴風！！！！』

『闇の吹雪！！！！』

二人の魔法がぶつかり拮抗する。だがこの勝負エヴァの勝ちかな？ネギ君はもう限界みたいだ。

「ハックシュン！！」

あ、エヴァ負けたな。

「オイオイクシャミニ押シ負ケタゼゴ主人ノ魔法」

まあ、あれはただのくしゃみじゃないからな。

「武装解除の魔法が暴走したものだからなあれは」

「いけないマスター！戻って！！」

チャチャゼロと喋っていると茶々丸が焦った声を出した。

「予定より7分27秒も停電の復旧が早い！！マスター！！」

「ええいつ。いい加減な仕事をしておって！きゃんっ」

麻帆良に次々と明かりがとまり、エヴァの体に電気が流れ川へと落ちていく。

「エヴァンジェリンさん！！」

ネギ君と茶々丸が川に向かうが間に合わない。

「アスカ！！エヴァを助ける！」

大きな光の鳥が現れエヴァと魔力切れのネギをその背中に受け止める。

「…なぜ助けようとした？そんな魔力も切れて飛べない体で」

「え…だ、だって…エヴァンジェリンさんは僕の生徒じゃないですか」

「…バカが…」

「えへへ。さあ、これでほんとに僕の勝ちですよ。もうこれで悪いこともやめて授業にもしっかり出てもらいますからね」

ネギ君うれしそうだな。名簿取り出して何か書いている。おおかた「僕が勝った」とかだろ。あ、エヴァが止め出した。

「さてそろそろ帰るかチャチャゼロ」

「ソウダナ、一杯ヤロウゼゴ主人ヲ冷ヤカシナガラ」

「いいねえ」

召喚士、見学する（後書き）

感想待ってます。

召喚士、世界を作る（前書き）

新技が出ます。

召喚士、世界を作る

日曜

「さて、修学旅行の準備でも……ん？」

「買い物にでも出かけようとしたら目の前を小さな人が横切って行った。」

「子供？それにしては筋肉がつきすぎているし髭もある。ちょっとついて行ってみるか」

その小人の後をしばらくついていくと森の中にある洞窟についた。その中を覗くと。

「これは…すごいな」

洞窟の中には妖精やドワーフ、ホビット、コロポックル、ブラウニイなどがたくさんおり一つの世界として独立していた。

「小人の世界といったところか？」

「あなたは誰ですか？」

小人の世界に見とれていると一人の年老いたドワーフが話しかけてきた。

「私はクラス・F・レスター。召喚士だ」

「ワシはユージーンと申す。この小人の国の代表をやっておる。クラス殿はなにようでこの国に来たのだ？」

「たまたま、ドワーフを見かけましてね。気になってついてきたんですよ」

「ふむ。クラス殿。一つ聞きたいのだがこの森の外はどうなっておるのだ？」

「森の外？この森も含めてここら一体、麻帆良学園都市という都市になっているが」

「そうか…ならここで生活するのも限界かの」

「住む場所に困っているのなら私にアテがあるのだが」

「本当かの！？」

「ああ、ユージーンさんちよつとついできてくれ」

エヴァ宅

「クラス、なんだ後ろのドワーフは？」

エヴァが後ろにいるユージーンを見て言う。

「あとで話す。それより前使っていない別荘があると行ってたな。あれを私にくれ」

「かまわんが中はただの荒地だぞ？」

茶々丸に持つてくるよう指示しながら私に言う。

「そこは私に考えがある。それで彼のことだが……」

茶々丸が別荘を持つてくる間ユージーンと小人の国について簡単に説明した。

「小人の国ね。よく今まで見つからなかったものだ」

別荘内

茶々丸が持つてきた別荘の中は見事に何もなかった。

「それでは始めるか。…精霊たちよ！ 汝らの力で命なき世界に命を！ 不変の世界に変化を！ 世界に始まりを！ 創世の輝きを今此処に！ イノセント・ガーデン……」

詠唱が終わるとともに世界が一変した。荒地だった大地は海に呑み込まれ、沈んだ大地では火山が噴火し新たな大地が出来上がり、新たな大地には無数の植物が生まれ成長し、そこに無数の命が生まれた。

「なるほど、一から精霊たちに作らせることで世界の隅々まで魔力がいきわたっている」

「ユージーンさん。この世界なら人間には見つかりませんよ」

「確かにここなら安心して過ごせそうじゃの」

その後洞窟に向かいすべての小人が別荘の中に入って行った。

「さて代償をもらおうか」

別荘を部屋に置いてから戻ってくるとエヴァがそんなことを言ってきた。

「今回はなんだ？」

「そうだな…私とチャチャゼロそれと茶々丸の三人と戦ってもらうことにしよう。しばらく戦ってなかったしな」

「おいおい、さすがにそれは「チャチャゼロに聞いたぞ？また、新技を完成させたそうじゃないか？」おい、チャチャゼロ」

「ケケケツ！イイジャネエカ。俺達ガ実験台二ナツテヤルツテンダカラヨ」

エヴァの別荘内

「さあ、来るがいい！」

しょうがない、腹をくくるか。

「我は依り代。精霊を我が身に宿し戦う者なり。翠の風まとう姉妹よ、今こそ我が身に宿り汝が力を我に貸し与えよ。ひと時の間我を精霊に昇華せよ！シルフ・エレメンタル！」

詠唱が終わると同時にエヴァたちが動き出した。チャチャゼロがナイフを首に、茶々丸がパンチを胸に、エヴァが糸を四肢に、それぞれ放ってきた。が。

「…「なっ！？」」」

それぞれの攻撃はクラースの体を素通りしていった。

「悠久ゆうきゆうの時ときを廻めぐる優やさしき風かぜよ 我が前まえに集つどいて裂刃れつじんと成なせ！サイクロン！！」

クラースを中心とした巨大な竜巻が起こる。がすぐに消え去ってしまった。クラースもその中心で倒れている。

「どうしたんだ？おい！クラース！」

数時間後

「んっ。ここは？」

「私の部屋だ」

声のする方に顔を向けるとエヴァたちがいた。

「お前に聞きたいことがある。さっき使ったあの技はなんだ？」

「あれは簡単にいえば精霊そのものになったんだ」

「精霊そのものに？」

「精霊を取り込むことによって一時的にその精霊と同格の存在になるんだ」

「しかしただの人間にそんな真似が…」

「これは私なりの推測だが…マーテルはこの世界と前の世界が精霊が行き来できる程度につながっていると saying していた。ならば私がこの世界に来れたのは精霊、少なくともそれに近いものに一時的になつていたと考えるべきだ。その私の体なら精霊の力を取り入れても大丈夫だと思っただ。で、前やってみたら思っただ通りで来たんだ」

「じゃあ、なぜ今回は失敗したんだ？」

「ただの魔力切れだろ？よくよく考えてみたら。曲がりなりにも世界を作った後だぞ？そりゃ魔力も切れるさ」

「それもそうだったな。今日はゆっくりと休め」

そう言つと皆部屋を出て行つた。

その夜

「やはりあれは拒絶反応だな。一度精霊たちと対話するか」

召喚士、世界を作る（後書き）

新技は簡単にいえば精霊を使った闇の魔法です。
感想待ってます。

召喚士、京都に着く（前書き）

修学旅行編です。

召喚士、京都に着く

京都

修学旅行が始まり京都についた。新幹線の中で何かあったようだが寝ている間にネギ君が解決したようだ。今は清水寺にいるのだが…。

「京都おー！ーっ！ー！！！」

「これが噂の飛び降りるアレ！」

「だれかつー！飛び降りれっ！」

「では、拙者が…」

「おやめなさいっ！ー！！！」

うちのクラスの生徒がいつも以上にテンションが高い。

「若いつていいね」

「いや、あんたも止めるよ。クラスさん」

「長谷川か、お前はいつも以上にテンション低いな」

「あんたはいつも通りだな」

長谷川とはパソコンやケータイなどのことで助けてもらって以来話すようになった。

「それはそうと前から気になってたんだがいつもその帽子かぶってるよな。なんか意味でもあるのか？」

「それは私も気になるです」

長谷川の質問に綾瀬も乗ってきた。

「これは…」

「最近薄くなってきた頭頂部を隠すためだったね。クラスさん」
時が止まった。

「龍宮、お前はそんな目で私のことを見てたのか？」

「軽いジョークだよ、クラスさん。だからその手の本を閉まってくれないか？」

軽く小突き話を戻す。

「これは恩師の帽子だ。彼を忘れないように毎日着けてるんだ」

「そのおかげで頭頂部が…。ちよつ!？」

バン!ズン!バシ!

有無を言わず本で振り下げ 突き 振り上げの三コンボを叩き込む。綾瀬が目を光らせて私の本捌きを見ている。

「龍宮。次その話を言ったら角でやるからな」

「…さすがクラスさん。見事な本捌きだ」

「勉強になります」

「いや、使い方間違ってるだろ…」

「別におかしくはないだろ?どこかのRPGじゃストローや羽根ペンや水瓶で戦ってるんだから」

「どこその伝説を紡ぎだすRPGの話をされても…」

「そんなことより早くいくぞ」

長谷川たちを連れて音羽の滝に向かう。

音羽の滝に着くと10人ほどが酔いつぶれていた。しかも運が悪いことに新田先生が。

「ん…?なんかお酒臭くないですか?」

「あー!新田先生これは…」

「すいません、新田先生。向こうの店でお酒の試飲をやってたからつい…」

「はっはっはっ。クラス君のお酒好きには困ったものですな。あんまり生徒の前で飲まないでくださいよ?さっちゃんの店でないつても付き合いますから」

普段から一緒に飲んで良かった。

「ありがとうございます。クラスさん」

「いいからさっさとバスに押し込め」

やれやれゆっくり観光できそうにないな。

風呂に向かう途中ロビーでネギ君たちが話していた。

「私は…お譲様を守れば満足なんです」

「刹那さん…」

「……よし、わかったよ桜咲さん。あんたがこのかのこと嫌ってなくてよかった。それがわかれば十分！！友達の友達は友達だからね。私も協力するわよ」

「よし、じゃあ決まりですね。3-Aガーディアンエンジェルス結成ですよ！！関西呪術協会からみんなを守りましょう！！」
守るのは結構だが…。

「少しは大人を頼れよ、お前ら」

「「「クラスさん」」」

「クラスの旦那」

「とりあえずお前らにこれを渡しておく」

懐から琥珀のペンダントを二つだし桜咲と神楽坂に渡す。

「これってネギのと同じ…」

「何かあったらそのペンダントに念じる。助けに行くから。それじゃ、私は温泉に入ってくるから」

風呂の時間ぐらいは休ませて欲しいものだ。

『クラスさん。このかさんが！！』

「アレフ！ネギ君たちの様子は！？」

アレフが映し出す映像ではネギ君たちが巨大な炎の足止めを喰らっていた。仕方ないな。距離はあるが行けるだろう。

「イフリート！お前の炎とあの炎をつなげてくれ！」

「了解した」

その後イフリートが作り出した炎に飛び込んだ。

「ホホホ。並の術者ではその炎は超えられまへんえ。ほな、さいなら」

「悪いがそうはいかない。シルフ！邪魔な炎を吹き飛ばせ！」

「な、なんやー？」

「「「クラスさん！」」」

転移を終えた瞬間シルフで炎を吹き消す。

「さっさと行けお前ら！後ろの奴は私がやる」

後ろにはいつの間にか鬼と白髪の少年がいた。

「まさか気付かれるとはね」

「それでも英雄と呼ばれていたんでね」

「あなたが英雄？そんな情報はなかったはずだけど」

白髪の少年と話しながら指輪をつけていく。

「まあ、どうでもいいけどね。ルビカンテ、あの人を倒して」

鬼が剣を持って飛んでくる。

「舐められたもんだな。フェンビースト！奴を倒せ！」

フェンビーストが現れ鬼を切り裂き消える。

「！相打ちとはね。それなりに強力なんだけど…」

「悪いが終わらせてもらう。蒼き水流の女傑よ！契約に従い我に従え！ウンディーネ！奴を切り裂け！」

ウンディーネが作り出した水の刃で切ろうとするが障壁によって止められてしまう。

「ここは引かせてもらうよ。召喚士さん」

ウンディーネが呼び出した水で転移する白髪の少年。ネギたちの方を見ると桜咲がこちらに向かって走ってきた。

「どうしたんだ、桜咲？」

「何でもありません」

「桜咲さん。明日の班行動一緒に奈良回ろうねー。約束だよー」
全く。

「明日はおそらく敵も来ないだろうからしっかり楽しめよ」
刹那の頭を軽く撫で旅館に向かう。

「…刹那、こつから旅館はどう行くんだ？」
「こつちです」

召喚士、京都に着く（後書き）

これからアンケートを取りたいと思います。

次回でおそらく「ラブラブキッス大作戦」を書くと思いますのでそのことについてアンケートを取りたいと思います。

その一、誰と仮契約をさせたいか？

その二、アーティファクトはどんなものがいいか？

この二つです。

また出して欲しい精霊やカッコイイ詠唱などは随時募集します。
感想待ってます。

アンケート（前書き）

アンケートを取ります。

アンケート

いくつかアンケートを取ります。

その一、クラスと生徒を仮契約させたいかさせたくないか。

その二、仮契約させたいなら誰とさせたいか。またどんなアーティファクトがいいか。

その三、敵の仲間にテイルズキャラを出したいか出したくないか。

その四、出したいなら誰がいいか。

その五、味方にテイルズキャラを出したいか出したくないか。

その六、出したいなら誰がいいか。

その七、生徒との日常風景を描くとしたら誰がいいか。

の七つです。

全てに答える必要はありませんがどれか一つでも答えてくれると嬉しいです。

アンケート（後書き）

感想待ってます。

召喚士、一人で観光する（前書き）

アンケートに答えてくれてありがとうございます。

出来る限り反映したいと思いますが、イノセンス、ヴェスペリア、ハーツ、グレイセス、テンペスト、ラタトスクの騎士はプレイしたことがないので登場させることはできません。本当にすいません。今のところ決定しているのは敵にバルバドス。見方にディセンダーの二人です。おそらくヘルマン編ぐらいで登場すると思います。アンケートの答えは随時募集します。

召喚士、一人で観光する

修学旅行。二日目の夜

昼間はネギ君とは違い誘ってくれる生徒がいなかったの一人でそこらへんを観光していた。ネギ君が宮崎に告白された以外にこれといった事件はなかったがさつき朝倉に魔法がばれたらしい。よりもよって麻帆良のパパラッチにばれるとは…。

「もーダメだ。あんた世界中に正体ばれてオコジヨにされて強制送還だわ」

「そうですね」

「そんな〜っ一緒に弁護してくださいよ。アスナさん、刹那さん、クラスさん」

「大丈夫だ」

ネギ君の肩に手を置く。

「クラスさん…」

ネギ君は顔を明るくし…

「君がオコジヨになったら私と契約しよう」

一気に青ざめる。

「うわ〜ん」

とネギ君の涙腺が崩壊したところで朝倉が来た。話を聞くと秘密を守ることに協力してくれるらしい。

カモと仲良くしていることが不安だがまあ大丈夫だろう。

11時頃

外の見回りを終えてロビーに行くと新田先生が長谷川と明石を正座させていた。

「どうしたんですか新田先生？」

「ああ、クラス先生。彼女たちが勝手に部屋から抜け出していた

んで正座させてるんですよ」

「なら、私が見てますので新田先生は見回りを続けてください」

「そうですか。なら頼みますよ」

そう言つて新田先生が見回りに行った。

「さてと長谷川は足を崩していいぞ」

「ちょっとクラスさん。何で千雨ちゃんばかり贖するのさ？」

明石が文句を言ってくるが。

「どーせ、またクラスでゲームでもしてるんだろ？長谷川はお前と違って積極的に参加しないから巻き込まれでもしたんだろ」

そう言つと文句を言うのをやめたが今度は長谷川が文句を言ってきた。

「なら私は部屋に戻つても良いだろ？」

「だめだ。新田先生に説明するのめんどくさいしな」

「おいコラ」

「いいじゃないか。コーヒーおごるから私の話し相手になってくれ」

そついい長谷川にコーヒーを渡す。

「クラスさん私には？」

明石が涙目でこつちを見るからテキトーに選んで渡す。

「パナシアボトル？」

紙パックの裏面には『ナンデモ癒す万能の薬！』と書かれている。

「まずい」

まあ、薬だからな健康時に飲むものではないな。それにしても向この世界の薬がジュースになつてるとはな…

しばらくたわいもないことを話しているとネギ君が外から戻ってきた。それに合わせ宮崎と綾瀬もロビーにやってきた。そのまま私たちには目もくれず話し始めた。どうやら宮崎の告白に対してお友達からというお決まりの返事となつたみたいだ。…ん？おい、綾瀬。

何をたくらんでる？あつ。足かけてネギ君が支えようとしてキスカ。あー仮契約かなるほど。さて、後は…。

「全員朝まで正座ーっ！」
こうなるわな。

次の日、シネマ村

今回も誰にも誘われなかったので一人でシネマ村を楽しんでいると塀を超えて桜咲が近衛を抱えて入ってきた。金は払ったのか？まあ、そんなこと気にしてる場合じゃなさそうだな。一様私も動けるようにしておくか。

「…すず」

シネマ村、日本橋

「何があつても私がお嬢様をお守りします」

「ひゃっきやこお」

そろそろ助けに入るか。

「忍法・児雷也！来い！」

上から児雷也を落として半数ほどの妖怪を還し、さらに炎でほとんどの妖怪を還す。

「あなたは!？」

「すずちゃん？」

「桜咲さん。近衛さんを連れて逃げてください。彼女の相手は私がします」

「誰ですか？」

「伊賀栗流、藤林すず。我が主の命により近衛嬢あなたをお守りします」

「ここは任せました」

そう言つて桜咲が近衛を連れて走っていく。

「忍者は私が相手ですか？ウチを楽しませてくださいね」

「快楽のために戦うのですか。哀れな…。忍法・飯綱落とし！」

高く飛び相手の上から回転切りを行う。相手の剣士は危なげもなく捌いていく。

「にとゝれんげきざんてつせゝん」

「遅いつ！忍法・鎌鼬！」

後ろに回り込みいくつも真空波を相手に放つ。

「なかなかやりますな」

そついいながら刀で全て弾いている。まわりの観客が騒ぎ出したのでそちらを見るとお城の上に鬼が三対と術者が二人。よりにもよつてあんなところに。

「よそ見はあきまへんえ」

「くっ」

相手の斬撃をかわしつつ桜咲たちの様子をうかがう。

「あゝん。こつち見てくれないとややわ」

今は桜咲を信じるしかないか。

「ざんがんけゝん」

「忍法・五月雨！」

相手の懐に入り忍刀による三連撃を放ち蹴り上げ切り払いと繋げてゆく。

「忍法・曼珠沙華！」

さらに炎を纏わせた手裏剣で追い打ちをかける。その隙に桜咲の方を見ると近衛を抱き上げて走っているところだったどうやらうまく逃げれたようだ。

「なかなかやりますな。ウチ楽しくなってきましたわ」

「御免！忍法・葉隠！」

木の葉にまぎれて桜咲の後を追う。

「あゝん。逃げるんですか」

いつまでもこんな戦闘狂の相手なんかしてられるか。とりあえずネギ君たちの様子を見に行ってみるか。

召喚士、一人で観光する（後書き）

感想待ってます。

召喚士、京都で戦う

「ファーストエイド」

ネギ君に向けて法術を使う。これでだいぶ楽になるはずだ。

「ありがとうございます」

「てっゆーより、なんで助けに来てくれなかったのよ！」

神楽坂がギャーギャー騒いでいるが、私も戦っていたしなにより呼ばれなかったんだから気付くはずもない。

「私も戦っていたんだよ。桜咲の方で」

「えっ？でも向こうにクラスさんらしき人はいませんでしたよ？」

「私は見てないかもしれないがこの子は見ただろ？」
懐から一枚のカードを出して見せる。

「すずちゃんのカード？」

「このカードの力ですずの姿を借りて戦ったんだよ」

「そうなんですか」

その後、桜咲と近衛それとなぜかともにいた朝倉、綾瀬、早乙女達と総本山に向かうことになった。

近衛の実家である総本山でネギ君は無事親書を渡し、西ノ長の計らいで今日は泊まっていくことになった。今は西ノ長の近衛殿と一緒に風呂に入っている。

「クラスのことはお義父さんから聞いていますよ。何でも異世界の英雄だとか」

風呂場の岩の後ろ

「クラスのことはお義父さんから聞いていますよ。何でも異世界の英雄だとか」

『異世界の英雄？刹那さん何か知ってる？』

『いえ、私も知りませんでした』
まあ、魔法使いがいるんだから異世界があっても不思議じゃないけど…。

「英雄といっても私は精霊たちの力を借りているだけですよ。…そうだ。近衛さん。陰陽道の召喚について聞きたいのだが…」

「それなら召喚に関する文献を差し上げましょう。明日になります
がよろしいですか？」

「ああ、恩に着るよ近衛さん」

『そう言えばクラスさんて強いのか？』

『かなり強いです。話によると本気のエヴァンジェリンさんと茶々丸さんを同時に相手にできるとか…』

『エヴァちゃんを！？それはすごいわね…』

「それじゃあ、私はそろそろ上がります」

そう言つてクラスさんが風呂場を出て行った。

部屋

それにしてもあの白髪の少年…。おそらくかなりの実力者だ。ここには簡単に手を出せないだろうがこれで諦めるとは思えん。少し用心しておくか…。エメラルドと念のため地水火風の契約の指輪は着けておくか。

コンコン

「ん？誰だ？…お前は！？」

「悪いが眠つててもらうよ。石の息吹」

「しまっ！？」

部屋の中に煙が充満した。

「これで大丈夫だろう」

白髪の少年はそう言つてどこかに行つてしまった。

本山近くの森の中

「どうする刹那の姉さんと仮契約したはいいがまだかなり悪い状況だ」

風の障壁の向こうには100を軽く超えるほどの鬼たちがいる。二人だけを残していくのはやっぱり不安な状態だ。

「クラスさんがいれば…」

兄貴の言ったことはもつともだがクラスの旦那はあの…。

『呼んだか？』

「えっ。クラスさん？」

風の中から出てきた私を見てネギ君たちがぼかーんとしている。

「どうした？幽霊でも見たような顔をして」

「クラスさん、石にされたんじゃない…」

「無効化するのに時間はかかったが今はそんなこと言ってる場合じゃないだろ？」

「クラスの旦那がいりゃあ百人力だ！さっきの作戦でいけるぜ」

カモの作戦はネギ君以外がここで鬼たちをひきつけておいてその隙にネギ君が近衛を奪還すると言ったものだった。

「仕方ないそれでいいだろう。桜咲、外の鬼の数は？」

「少なくとも500はいるかと…」

「500が一応あいつを呼んでおくか。…契約のもと我が下へ来い。

チャチャゼロ！」

「ケケケツ。ドーシタ旦那？召喚ナンテ珍シイ」

「500ほどの鬼とな戦いだ。さっさと終わらせるぞ」

「ナラアレ出セ。アノトカゲノ鎧」

「トカゲって…。彼女の鎧と化せ、グレムリンレアー」

そうするとチャチャゼロの体がグレムリンレアーを模した鎧に包まれ、手足には鋭い爪が現れた。

「私は後方で援護する。我に力を与えよ。アーチエ・クライン！」

そう言うくとクラーズの姿がピンク色の髪をした魔女っ子になった。

「じゃあ、道はアタシが作るから」

「えっ！？あっはい」

「雷雲よ我が刃となり敵を貫け！サンダーブレード！！」

そう唱えるとアーチエの頭上から雷の刃が敵に突き刺さりに十体ほどを還す。その隙にネギ君が杖にまたがって飛んで行った。

「落ち着いて戦えば大丈夫です。せいぜい街でチンピラ五百人に絡まれた程度だと考えてください」

「それってケツコー危ないでしょ」

「ケケケツ！安心シロヨ。オマエラノ後口ニハ英雄ガツイテルンダ。コノ程度ノ敵、屁デモネエゼ」

「我が俤なる虚空の彷徨い星よ！落つこちら！メテオスオーム！！

… んどうかした？」

どこからか降ってきた五つの隕石で敵の半数が潰れた。

「…」

「アゝ、サツキノ訂正ナ。オマエラノ後口ニハ破壊神ガイルンダ。

死ニタクナケリヤ、サツサト終ワラセニ行クゾ」

「ハイ（涙）」

その後三分ほど500体ほどいた鬼たちは70体ほどになった。

「結構いいコンビだな、二人とも」

「マア、俺たちホドジャナイガナ」

私は今、元の姿に戻って精霊の鎧を身につけて警備の時のようにチャチャゼロと共に戦っている。なんで元の姿に戻っているかというとアーチェはまあ、あの、なんていうか大雑把過ぎて地形が代わりそうだから気軽に使えないんだ。

「ごっ五百の兵が三分で10分の1だと！？化物かこの譲ちゃん達」

「天敵の神鳴流はともかくあのハリセンとからくりと西洋魔術は反則ですぜ、オヤビン」

「それはともかく…すかあとの下に肌着をつけんのが最近のはやりかいな？」

学園長室

「ははははっ！突然チャチャゼロが行ったと思ったら面白いことになってるじゃないか」

クラスが置いて行った琥珀の球を見ながら笑う。くくく。この球は便利だなチャチャゼロを勝手に連れて行った代償としていただく。

「それよりまだかじじい。早くしないとクラスが終わらせてしまう」

「やれやれ、せっかちじやのう。もう少し待てんのか」

京都

やばいな。桜咲は鬼と狐女に、神楽坂は烏族に、チャチャゼロは剣士、ツクヨミだったかにそれぞれ足止めされてるし、さすがに何十体も相手にしながら召喚はできないな。そんなことを考えているとそれぞれ足止めしていた敵が何者かに狙撃されている。いやこんなことできる奴は一人しかいないか。

「クラスさん、いくらで私を雇う？」

「あのデカいの本物アルか？強そうアルねー」

そこには龍宮とクーがいた。

「学園長にもらえるだけもらっとけ」

どこからか『ちよっ！？マジ！？』と聞こえたが気のせいだろ。

学園長室

『学園長にもらえるだけもらっとけ』

「ちよっ！？マジ！？」

『ならたっぷりもらうとするか』

あの様子じゃ本当に限界までもらいに来るかも知れんのう。

「ははは。さっさとしなから余計な出費を出すことになるんだ」
ナギの奴め力任せに術をかけおって。

召喚士、京都で戦う（後書き）

感想待ってます。

召喚士、鬼神を倒す（前書き）

私の好きな精霊？が出ます。

召喚士、鬼神を倒す

鬼は龍宮たちに任せて今はネギ君のところに向かっている。桜咲と神楽坂は先ほどネギ君に召喚されて先に行った。

「たくつ。次から次へと」

見据える先にはかなり巨大な鬼が召喚されている。

「あれは鳥？」

巨大な鬼の前には白い翼が羽ばたいてる。そして鬼の肩あたりにいる人物から何かを奪い去った。

「桜咲と近衛か？」

月をバツクに天使のような桜咲とそれに抱えられている近衛。

鬼の方に目を戻すと鬼が結界に拘束されている。よく見ると茶々丸が銃を構えているのが見える。

「となるとあの小さいのがエヴァか」

エヴァが何かを詠唱し鬼が氷漬けにされた。

『クラス見ているか？』

「ああ、今そっちに向かっているところだ」

エヴァからの念話をカードを額に当てながら答える。

『トドメはお前に譲ってやる。本当の召喚というものを奴らに教えてやれ』

「わかったよ。そっちに召喚してくれ」

目の前が白く染まりそれが治まるとネギ君の前に召喚された。

「ぼーや。クラスをよく見ている。英雄と呼ばれるものがどういうものかよくわかる」

「アデアット『契約の証・エメラルド』エヴァ、魔力を借りるぞ」「存分に使え」

そう唱えるとカードが光となり契約の指輪に宿る。クラスのアーティファクトの能力は契約したものの力の一部を開放するというもの。解放する力は主の魔力に依存する。

「テイルズ・マーテル・エターナル」

「始動キー！？クラスさんは魔法を使えないはずじゃ…」

「始動キーとはもともと精霊たちに呼び掛けるために使うものだ。別に魔法が使えなくても精霊の力を借りることはできるだろう」

「我は召喚士クラス・F・レスター。世界を繋ぐ扉なり」

クラスの足元に魔方陣が浮かび上がる。

「我が繋ぐは闇。全てを覆い隠す永久の暗黒」

詠唱が進むと同時にクラスの周りの雰囲気が暗く重いものに変わっていく。

「我が願うは力。善と悪どちらにも染まらぬ圧倒的な力」

クラスの足元から紫色の霧が広がる。

「我が呼ぶは王。冥界を統べる誇り高き帝王」

氷に罅が入り何かを感じ取った鬼が暴れる。

「契約に従い我が呼び声に答えよ！プルート！！」

「これが英雄…」

手も足も出なかったあの鬼がいとも簡単に。

「ぼーや、見ていたか？この圧倒的な力を。時空戦士と呼ばれた英雄の力を…」

エヴァンジェリンさんがクラスさんの方を見ながら話しかけてきた。

「は、はい…」

どうやったらあんな力を手にすることが…。

祭壇

「いいか、ぼーや。今回のことをRPGに例えるとだな。最初の方のダンジョンで死にかけたらなぜかラスボスが助けに来てくれたよ
うなものだ」

「何それ」

「私はラスボスか？」

まあ、ダオスからみればラスボスか…。

「ようは私たちの力をあまりあてにするなということだ」

「は、はい…！？エヴァンジェリンさん！！」

ネギ君が突然走り出しエヴァを庇うように抱き締めた。そこには水たまりから顔を出した白髪の少年が…。

「バカどけっ」

「障壁突破・石の槍」

ドシュッ

「ぐっ！」

「がはっ！？」

エヴァの腹と私の左腕を石の槍が貫く。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルにクラス・F・レスター。『人形遣い』に『召喚士』か…」

「エヴァンジェリンさん！！クラスさん！！」

「エヴァちゃん！！クラスさん！！」

油断したか…だが。

「そう『不死の魔法使い』さ」

そついい蝙蝠になって少年の後ろにエヴァが回り込んで一撃加える。

「セルシウス・エレメンタル！」

氷の精霊を取り込み吹っ飛んだ少年の目の前に移動する。

「なるほど。相手が吸血鬼の真祖では分が！？」

「さつさと帰れ！獅吼爆碎陣！！」

獅子の形をした闘気を三度少年に叩き込む。

「まさかここまでやるとは…今日のところは引くとしよう」

そう言くと少年の体は水となって消えた。

「逃げたか…っ！？がはっ」

血を吐きその場に崩れ落ちる。

「くっ！拒絶反応が…」

そこで私の意識は途切れた。

召喚士、鬼神を倒す（後書き）

感想待ってます。

召喚士、麻帆良に帰る（前書き）

修学旅行編終了。

召喚士、麻帆良に帰る

光を感じる。何か温かいものに包まれている。そうこれはマナのよ
うな光…。

目を開けるとエヴァがいたその後ろには茶々丸がいる。

「エヴァ…?」

「目を覚ましたか…」

周りを見回すとネギ君たちもいた。おそらく近衛とネギ君が仮契約
したのだろう。

「明日はゆつくりと回れそうだな…」

「当り前だ。明日は私の京都観光に付き合ってもらうぞ」
違う意味で慌ただしくなりそうだな。

本山

「で、なんで私は今睨まれているのかな？」

屋敷に戻ってからすぐ休もうと部屋に向かおうとしたらエヴァに連
れ去られた。

「言わないつもりか？」

「あの技のことか？それなら麻帆良に帰ってから言うつもりだった
が…」

「そんな悠長なこと言ってる場合か？あの技は確実にお前を喰らい
つくすぞ。あの技はただの人間には過ぎた力だ」

「問題点も対処法もわかってる。それに今の私はただの人間ではな
い」

「ただの人間ではないだと？自惚れるなよ人間」

まあ、私でも信じられないが…。

「うぬぼれてはいないよ。実際私も信じれないがな。…この世界に
来てから年を取らないんだ」

「年を取らないだど？」

「ああ、この前茶々丸に頼んで私の体を調べてもらったが、この世界にきたところとほとんど変わらないんだそうだ」
エヴァが茶々丸の方を見る。

「本当です。99、89%一致します」

「不老になったのか？」

「不老というよりは半精霊化だな」

「確実に化物になりつつあるなお前は。それで問題点とは何だ？」

「半精霊化している私がどの属性にも属さないという点だ」

「？どういうことだ？どの属性にも属してないのならむしろどの精霊ともうまくいくだろう」

「どうやら半分残っている人間の部分が拒絶するらしい」

「はっ。それはそうだ」

「で、対処法としてはそれぞれの精霊に頼んで私の体に呪文処理してもらおう」

「まあ、精霊になるよりは現実的な方法だな。しかしそんな簡単にいくのか？好戦的な奴が多かったが…」

「それぐらいのリスクは背負うさ。まあ、最初は話が通じる奴からだけだな」

「わかった。もう、いいぞ。あと明日はわかっているだろうな？」

「京都観光に付き合え、だろ？わかってるさ」

「そついい部屋に戻る。」

翌朝

「おい、もう行くのか？せめて別れの挨拶くらい…」

「…顔を見れば辛くなりますから」

「なんだもう行くのか？」

「…クラスさん」

さつていく桜咲を呼びとめる。

「そんな顔するなら残ればいいだろ」

桜咲の眼には涙が浮かんでいる。

「一族の掟ですから。…あの姿を見られた以上仕方ありません」

「なら私と契約するか？…我が名はクラス・F・レスター。桜咲

刹那が一族の掟を破棄し、我と新たな契約を交わすことを望む」

「そ、そんなことを言われても…」

「刹那さんっ！！」

突如現れたネギ君によって契約の件は有耶無耶になった。どうしてもいいが、ネギ君。生徒に抱きつくのは先生としてどうだろう。必死なのはわかるがもつと落ち着いて説得できないのか？…いやこれが若さか！？

「…若いっていいよなー」

「いきなり老けこまないでください。マスター、クラスさん」

はあ。お茶がうまい。

その後、旅館に送っていた身代わりの紙型が暴走したのですぐに戻ることになった。もちろん桜咲も一緒に。

エヴァに連れられ京都観光（ほとんど私が回った場所だが）を終え、西ノ長の案内によってサウザンドマスターの別荘に向かうことになった。そこでネギ君たちはサウザンドマスターの話を聞き、私は召喚に関する文献をもらった。

その夜、麻帆良

「もうすぐ生まれる…。世界を見つめるもう一人の私が…」

召喚士、麻帆良に帰る（後書き）

感想待ってます。

少女の霊、友達ができる（前書き）

作者のネギまで好きなキャラが出ます。

少女の霊、友達ができる

みなさんはじめまして。私、相坂さよ。地縛霊はじめて60年程になります。60年も幽霊やってますが影が薄いつてゆーか、存在感がないってゆーか、誰にも気付いてもらえません。只今友達募集中です…。

こんな私ですが最近気になる人ができました。その人は…。
ガラッ

（ひっ、誰ですか！？）

「あゝ、やっぱりここにあったか」

（何だクラスさんですか…）

この人がさっき言った気になる人。3-Aの副担任のクラス・F・レスター先生です。好きというわけではないんですがなぜか惹かれるものがあります。たまにぼくとしていていつの間にか着いてしまいます。で、この前うっかり家までついて行ってしまつて…。したらなんとすごいことがわかつてしまったんです！なんと！クラスさんは魔法使いだったんです！それだけでなくクラスメイトのエヴァンジェリンさんは吸血鬼でもあるんです！話によるとネギ先生も魔法使いだとか！……………そんなすごい人たちにも気付いてもらえない私つて（涙）

あつ、クラスさんが教室から出ていきます。どうやら置き忘れた教材を取りにきたみたいです。一人でいるのは寂しいのでちょっとついて行ってみます。

エヴァ宅

「クラスさん。チェリーパイが焼けました」

「ああ、ありがとう」

クラスさんはよくチェリーパイを食べています。何でも恋人の得意料理なんだそうです。それにしてもおいしそうですねえ…。

「やはり最初はシルフか…他の四大精霊は…ブツブツ」

何やら難しい本を読みながらブツブツ言っています。少し本を見てみましたが全くわかりませんでした。

カランコロン

誰か来たみたいです。

「何？私の弟子にだど？アホか貴様」

どうやらネギ先生はエヴァンジェリンさんに弟子になりたいようです。

「京都での戦いをこの目で見て魔法使いの戦い方を学ぶならエヴァンジェリンさんしかいないと！」

京都で何かあったみたいです。

「ねえ、クラスさんはネギに魔法を教えてあげないの？エヴァちゃんより強いんですよ？」

「私が使ってる魔法はネギ君たちの魔法とは違うからな。魔法使いとして学ぶならエヴァの方がいいさ」

ネギ君たちが話している横でクラスさんとアスナさんが話しています。あつ、エヴァさんがネギ君に向かって足を突き出しました。何するんでしょう？

「まずは足を舐める。我が下僕として永遠の忠誠を誓え。話はそれからだ」

（ぶっ！？）

「アホかーッ！！」

スパーーーーーン！

「へぶう！？」

ピコッ！

「ぺぽ！？」

アスナさんとクラスさんがハリセンとピコピコハンマーではたきます。あつ、お星様が…。

「あああ、神楽坂アスナ！！真祖の障壁をテキトーに無視するんじゃないっ！！」

あゝ取っ組み合いが始まってしまいました。どうしましょう。

「あ、あのー…」

あつ、ネギ先生のおかげで止まりました。よかった。

「わ、わかったよ。今度の土曜日もう一度ここへ来い。弟子に取るかどうかテストしてやる。それでいいだろ？」

「え…あ…ありがとうございます！」

よかったですね。

「クラス。前から気になってたんだがお前には見えてないのか？」
エヴァンジェリンさんがクラスさんに話しかけてます。見えてないのかって何のことでしょう？

「何のことだ？」

どうやらクラスさんもわかってないみたいです。

「お前の後ろだ」

後ろを見ますが特になんにもないですね。前を向きます。

「本当に見えてないようだな…」

「だから何の話だ？」

「お前の後ろに相坂さよがいるんだよ」

（相坂さよ？あゝ私のことですね……って見えているんですかエヴァンジェリンさん！？）

「ああ、見えてるし聞こえているよ」

（やったー！地縛霊はじめて60年やっと私のことを見える人に会えましたー！）

「私には見えないが…」

でも、クラスさんには見えてないみたいです。

「ふむ。クラス。幽霊と契約できるか？」

「相手が受け入れてくれれば可能だが…」

「そうか。相坂さよ。クラスと契約しろ。うまくいけば姿が見えるようになるぞ?」

（やります。やらせてください!）

「決まりだなクラス。指輪を出せ」

エヴァンジェリンさんが言うのとクラスさんがたくさん指輪を出します。どれもきれいですね。

「相坂。好きな指輪を選んでくれ」

（悩みますね。あつそのグリーンのがいいです）

「クリソプレーズか。宝石言葉は新たな始まりだったか?お前にぴったりだな」

「それじゃあ、相坂。私の前に来てくれ」

（あつ、はいわかりました。…ここでいいですかね?）

「いいぞ、クラス。始めろ」

「我、いま少女の霊に願ひ奉る。指輪の盟約のもと、我に彼女を従わせたまえ…。我が名は…クラス・F・レスター」

光が私を包みます。…なんだかすごく安心します。光が収まるとみなさんが私のことを見えています。

「あの、私のこと見えてますか?」

「ああ」

「うむ」

「ハイ、見えています」

エヴァンジェリンさん、クラスさん、茶々丸さんが私の眼を見てしっかりと頷いてくれました。

「あ、あの。私の友達になってくれませんか?」

「もちろんだ」

「ハイ、私でよろしいのなら」

「まあ、なつてやつても良いぞ」

長年の夢が……今、叶いました。

月曜日

「『『かわいい』』」

「クラスさん。誰その子？」

「あれ？足りないじゃん!？」

「静かにしろ。ほら自己紹介」

クラスさんに言われて前に出ます。

「出席番号一番、相坂さよです。地縛霊ですがよろしくお願いします」

「『『『え』』』』』!？」

今年はクラスさんのおかげでいつもより楽しい年になりそうです。

少女の霊、友達ができる（後書き）

感想待ってます。

召喚士、テストを行う

「いいだろう。我が力を貸してやろう」

人間と同じくらいの大きさのプルートが目の前にいるクラスにそう言う。

「驚いた。お前が一番手を貸さないと思ったんだが…」

「人の身で我と契約し、人の力を借りたとはいえあそこまで我が力を引き出したのだ。認めぬわけにはいかまい」

そう言った後プルートは組んでいた腕をほどき何かを描くようにクラスの周りをなぞっていく。なぞった跡は一瞬ひかり消えていく。

「これでいいだろう…」

「ああ、ありがとう。プルート」

クラスからの言葉を聞くとプルートは消えていった。

「さて、そろそろ外に出るか…」

エヴァ宅

「やっと出てきたか」

今は金曜日の四時。学園長に無理行って仕事を休ませてもらい別荘内で約三カ月間、精霊たちと対話（一部戦闘）していた。

「ああ、すまなかつたな」

「別にいいさ。対価は血…いやぼーやの弟子入りテストの相手をしてもらおう」

ああ、魔法使いの弟子入りの件か。

「それはかまわないが、私が手加減するとは思わないのか？」

「テスト内容も合格条件も自由にしかまわないが、私の修行についてこれられないような甘い内容にだけはするなよ」

ふむ、それなら…。

「茶々丸。ネギ君がどこにいるかわかるか？」

エヴァの後ろに立っている茶々丸に聞く。

「おそらく、世界樹近くの広場かと…」

「わかった。ありがとう」

とりあえず様子を見てくるか。

世界樹近くの広場

広場ではネギ君とクーが中国拳法で組み手を桜咲と神楽坂がハリセンと木刀でこちらも組み手。近衛はその様子を見て、佐々木もリボンをくるくる回しながら同じように見ている。

「がんばってるな、みんな」

声をかけると全員こちらに注目した。

「クラスさん。用事はもういいんですか？」

「ああ、さつき終えたところだ」

「クラスさんは何しに来たんや？」

「ああ、ネギ君の弟子入りテストの相手をする事になってな」

そう言った途端神楽坂と佐々木は「クラスさんなら手加減してくれるから大丈夫だね」と言い。ネギ君も「そうですね」と言っている。はあ、本当に大丈夫か？

「言つとくが甘い内容にするつもりは一切ないからな。それだと意味がないからな。しっかり鍛練しろよ」

神楽坂と佐々木が「ケチ」とか「鬼」とか言っているが気にしない。

「ネギ君。テストの時間は日曜の午前0時場所はエヴァの家だ。同行者は神楽坂、桜咲、近衛、宮崎、クー、長瀬、のみ認める。一般人は連れてくるな」

そう言い残しエヴァの家に戻る。

午前0時

「ネギ・スプリングフィールド、弟子入りテストを受けに来ました」
時間通りにネギ君が来た。その後ろには神楽坂、桜咲、近衛、宮崎、クー、長瀬それに龍宮が来ていた。龍宮が来るとは意外だな。

「私は見学だよ。クラスさん」

どうやら顔に出ていたらしい。

「それじゃあ、場所に案内するからついてきてくれ」

そついい森の中に入っていく。

森の中の開けた場所

「よく来たなぼーや達」

そこにはエヴァと茶々丸、チャチャゼロがいた。

「ぼーやはそこにいろ。ほかの奴らは私の後ろに來い」

そうエヴァが言くとネギ君を残しエヴァの所へ向かう。私はそれを見ながら20メートルほど離れた場所でネギ君と向かい合う。

「では、始めようか。テストの内容は簡単だ」

懷からカードを出し言葉を紡ぐ。

「我がマナを宿しその姿をここに現せ！藤林すず！」

カードが光り輝きすずがそこに現れる。

「ネギ君の使える力をすべて使いすずに一撃入れてみる」

「その条件でいいんですね」

「ああ」

そう言い残しエヴァのもとへ行く。

エヴァの後ろへ立つとエヴァが開始の合図を言った。

「では始めるがいい！！」

その言葉とともに二人の距離は0になった。

すずさんの拳を受け流し裏拳を放つ

八極拳・轉身胯打！

その攻撃はすずさんの肩に当たり吹き飛ばす。……はずだった。

「消えた！？」

あたる直前すずさんの体が霞のように揺らめいて消えてしまった。

「きやあつ！？」

この声はアスナさん！？声のした方に目を向けるとアスナさんがずさんにクナイをつきつけられていた。

「アスナさんに何をするんですか！！！」

怒りのままそつちに行こうとすると隣から声が聞こえた。

「怒り。それは、冷静な判断を失わせるものと知れ」

隣に顔を向けようとしたらものすごい衝撃に吹き飛ばされた。

くそ！いつの間に僕の隣に！？

「卑怯ですよ！アスナさんを人質に取るなんて！」

「……」

そう言ってもずさんはなんにも言いません。

「なら。ラス・テル・マ「忍法・不知火」！？」

魔法を放とうと杖を手にした瞬間後ろから現れたずさんに杖を奪われた。

「……」

杖を奪ったずさんは僕に背を向けたまま無造作に杖を投げ捨てました。

「ああっ！？僕の大切な杖……」

「悲しみ。それは、力を失う元と知れ」

「ぐっ！？」

投げられた杖を見ていると僕を見ていたずさんに蹴り飛ばされた。

ず殿戦いはまさしく忍びの戦い。私情を持ちこまず、相手をだまし、影を渡り歩く。一度も本体を現さぬとはいやはや。忍者は非情でなければ務まらぬ……でござるか。

「楓、刹那。彼女に勝てると思うか？」

そう考えてると真名殿にそう聞かれた。

「私では無理だな。お嬢様を人質に捕らわれて冷静さを失くしたところを背後から一撃といったところだ」

「拙者も似たようなものでござるか。あそこまで非情にはなれない

でござる。そういう真名殿はどうでござるか？」

「あそこまで徹底して姿を隠されたらお手上げたな」

真名殿でも無理か…あの年でこれほどとはどんな試練をぐりぬけてきたのか気になるでござるな。

「これで終わりです」

すずさんがまっすぐこっちに走ってくる。今だ！！

「契約執行90秒間ネギ・スプリングフィールド」

すずさんが伸ばしてきた腕を引っ張りすずさんに肘鉄を喰らわせる。

八極拳六大開「頂」？打頂肘！！

「ぐっ！？」

技が決まりすずさんがその場にうずくまる。

「やったー！ッ！クラスさんこれで合格ですよね？」

そっくりクラスさんの方を見るとそこにすずさんが！？

「喜び。それは、他人にねたまれる元と知れ」

そう言われ僕はまた吹き飛ばされた。

「なかなか意地悪な試験を用意するじゃないか？」

そっくり隣のクラスを見る。

「当然だ。世界はそんなに優しくできていない」

まあ、問題はそれにばーやが耐えられるかどうかだな。

くっ。どうすればすずさんに一撃入れられる？

「きゃああああああ！」

そんなことを考えていると急にすずさんが目の前に吹き飛ばされてきた。胸元には鋭い爪で切り裂かれたような傷跡が。

「大丈夫ですか！？今手当てを！」

「あわれみ。それは、自分の死につながるものと知れ」

また！？

「何よこれ…」

こんなのは試験なんかじゃない。ただのいじめだ。

「クラスさん！これはどういうこと！？こんなのただのいじめじゃない！！」

「黙れ小娘。私に弟子入りするならこの程度耐えられなければ意味がない。それにこちらの世界はそんなに優しくない」
だからってこんな…

どうすればずさんに…

『ネギ君の使える力をすべて使いせずに一撃入れてみる』
僕の使える力…

魔法、中国拳法…

そう言えば…

『私はただ精霊たちの力を借りてるだけだよ。一人では何もできない』

そうだ！

「みなさん！力を貸してください！」

「おい、あれはいいのか？」

エヴァが助けに入る神楽坂達を指さしながら言う。

「現実を知り自分に力を貸してくれる存在を再確認した。十分じゃないか」

「本物は後ろですネギ先生」

「魔法の射手・光の1矢！」

魔法の射手がずさんの右手に当たる。そしてアスナさんたちが相手をしていた分身も消える。クラスさんの方を見ると笑顔でこっちを見ていた。

「「「やったー!」」」

「笑い。それは、心のスキを見せるものと知れ」

「!?!」

また!?

「答えは一つにあらず。己の心の思うまま、それが答えなり。…あなたが進む道それがあなたの答えです」

そう言い手を出してきた。その手を握り返す。

「合格だよ。ぼーや。いつでも私の家に来い。…ああそれとカンフーは続けておけ、どの道体術は必要だしな」

そう言いエヴァたちは家に戻って行った。

「さて、お前らちよつとこっちに来い」

ネギ君たちを私の前に集める。

「ミント」

そう呟きミントの姿になる。

「紡ぎしは抱擁、莊嚴なる大地にもたらされん光の奇跡にいま名を与うる。リザレクション」

私の足元に巨大な魔方阵が浮かび上がり輝きだす。光が収まるころにはネギ君たちの傷が全て治っていた。

「よく頑張ったなネギ君」

元の姿に戻りネギ君の頭をなでてやる。

「はいっ!」

「クラスさん！！いくら必要なことだとしてもあれはやりすぎでしょ！？ネギはまだ子供なのよ！？」

「アスナさん。僕は大丈夫ですから…」

「あんたは黙ってなさい！ネギはまだ子供なんだから…（ガミガミ）

」

「あう」

ネギ君諦めないでくれ私の足はもう限界だ。後ろのお前たちどうにかしてくれ。あっおいつ目をそらすな。龍宮。餡蜜でもなんでもおごってやるから。

「聞いてるんですか！？」

「ハイ」

朝食の準備を終えた茶々丸が私を呼びに来るまで神楽坂の説教は続いた。

召喚士、テストを行う（後書き）

感想待ってます。

世界樹の落とし子、生まれる（前書き）

ディセンダーの事前募集します。テイルズキャラの名前以外で願います。

世界樹の落とし子、生まれる

この世界とは違う世界の昔々のお話です

その世界の始まりには世界樹しかありませんでした

世界樹は大地を作り大地からは精霊が生まれました

それから動物や人々を生み出しました

その世界には様々な命が溢れ世界樹の生み出すマナの恵みを受け幸せに暮らしていました

しかし人々はいつしかおらかさを失いさらなる豊さを求めマナを奪い合つて争い始めました

精霊は人々の前から消え人々の争いは次の争いを呼び世界はどんどん疲れ果てて行きました

世界樹はこのままではいけないと1人の人間を生み出しました

世界樹から生まれた勇者“ディセンドラー”です

生まれたばかりのディセンドラーは世界の事も自分の事でさえも何も知りません

そして不可能も恐れも知りません

ディセンドラーは人々の助けに応じるかのように小さなお手伝いから

始めました

そして人々のマナを巡る争いを終わりに導きディセンドーはまた世界樹へ帰って行きました

いつもいつまでもその世界を世界樹とディセンドーが見守っているのです

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

ネギ君がテストを受けているころ。

「行きなさい。ディセンドー。彼のもとへ…」

その頃麻帆大、世界樹をこよなく愛する会

「部長！世界樹が！」

「これは！？大発光並の発光だ！」

「！？光が上空に向かって飛んでいきます！」

「今すぐ世界樹に向かうぞ！他の皆は映像の解析だ！」

「「「はいっ！！！！」」」

翌朝学園長室

「で、何の用だ？学園長」

茶々丸が作ってくれた朝食を食べ終わったところに学園長からすぐ学園長室に来るように言われた。

「くだらない用事だったら帰るぞ」

「エヴァは呼んでないんじゃないの？…まあいいわいタカミチ君、彼

女を」

学園長がそう呼ぶとタカミチが入ってきた一人の女の子を連れて。

「おい、ジジイ。なんだこの小娘は？」

女の子はアーチェと同じくらいの背丈だ、髪の色は茶々丸と同じ少し薄い緑、長さは肩にかかる程度。瞳の色は海のような青。そして昔のすずのような無表情。

「ワシが知りたいんじゃないの。彼女は世界樹から来たそうじゃ、クラーヌ君何か知らないかのう？」

「世界樹から？」

もう一度女の子を見る。女の子はじつと私のことを見ている。世界樹から来たか…。私の世界の住人か？しかしそう簡単に来れるはずはないんだが…。

「名前は？」

フルフル

「わからないのか？」

コク

「世界樹から来たこと以外にわかることはあるか？」

スッ

「…あなたを手伝うよう言われた」

私を指さしてそう言った。私を手伝うように？しかしマーテルからは何も…。もしかすると…。

「君はディセNDERか？」

コク

やはり。

「そろそろこっちにもわかるようにしてほしいんじゃないが。ディセNDERとは何かの？」

女の子と話していると学園長が聞いてきた。

「まあ、私の世界にあった御伽噺なんだが、簡単にいえば世界樹が世界を見るために生み出す分身だ」

「世界樹の分身かの？」

「おそろくな」

「で、君の目的はなんなのかの？」
学園長が女の子に話しかける。

「私は彼を手伝うよう言われた」

「誰にかの？」

「…世界樹」

「うゝむ。ウソは言っていないようじゃのう」

「…」

「それじゃあ、戸籍とかはこちらで用意するとしてしばらくはエヴァのところまで預かってもらうとするかの」

「なぜ私のところなんだ？」

「彼女はクラス君に懐いてるようだしのう」

隣を見るといつの間にかタカミチの隣から私の隣に来ていた。

「まあ、いいだろう。いくぞクラス」

「ああ」

そう言い学園長室を出ていくついでに行く。女の子も私の隣をぴったりとついてくる。

エヴァ宅

「ふむ、なかなか興味深い話だな」

ディセンダーの物語を読み終えたエヴァがそう言った。

「まあ、お前のことはおいおい聞くとしてまずは名前だな」

「それもそうだな」

「プレセアなんてどうだ？」

「いやいやゲームのキャラから決めるなよ。確かに雰囲気は似ているが」

「なら、お前は何かあるのか？」

「そうだなあ…。キティなんて…なんでそんなに睨むんだ？」

「その名前はやめろ」

「うゝん。茶々丸は何かあるか？」

「私は……」

世界樹の落とし子、生まれる（後書き）

感想待ってます。

伝説の玩具、その名は…（前書き）

ディセンドーの名前決まりました。

伝説の玩具、その名は…

「よし。では、始める。刹那、気は抑えておけ。相応の練習がなければ魔力と気は相反するだけだ」

「ハイ。エヴァンジェリンさん」

「いきます」

エヴァの修行一日目。ネギ君の前には桜咲、神楽坂、宮崎、近衛が並んでいる。

「契約執行180秒間！ネギの従者、近衛木乃香、宮崎のどか、神楽坂明日菜、桜咲刹那」

「うひゃひゃこそばー！ー」

「あう…」

「慣れないのよねコレ」

「そうですか？私はそれ程…」

魔力供給を受けた四人は程度の差があるものの皆顔を赤くしている。

「よし次だ。対物・魔法障壁全方位全力展開！」

「ハイ！」

「次！対魔・魔法障壁全方位全力展開！！」

「ハイ！」

「そのまま3分持ち堪えた後北の空へ魔法の射手199本！！結界張つてあるから遠慮せずやれ！」

「うぐツ…ハ、ハイ！！」

「光の精霊199柱、集い来りて敵を討て」

ネギ君の放った光の矢が障壁に当たりネギ君が倒れた

「あうう？」

「ふん。この程度で気絶とは話にならんわ！いくら奴隷りの強大な魔力があつたとしても使いこなせなければ宝の持ち腐れだ！！」

「よーよーエヴァンジェリンさんよお。そりゃ言いすぎだろ。兄貴

はまだ十歳だぜ。四人同時契約三分+魔法の矢199本なんて修学旅行の戦い以上の魔力消費じゃねーか。気絶して当然だぜ。並の術者だったらこれでも十分……」

「黙れこの下等生物が並の術者程度で満足できるか。……煮て喰うぞ?」

そう言われるとカモが神楽坂に抱かれて震えだした。

「ふん。クラーズ手本を見せてやれ」

「私がか？」

「そうだ。私と茶々丸とチャチャゼロそれと刹那に魔力供給を6分間。対物・対魔・魔法障壁を全方位全力展開。その後北の空へそれなりの攻撃魔法を放て」

しょうがないな……。

「いくぞ。刃に秘めし聖なる力よ、彼等に更なる力を分け与えたまえ……アグリゲットシャープ！」

秘めし力よ刃に纏え…アグリゲットシャープ！絢爛たる光よ、惨禍を和らぐ壁となれ…フォースフィールド！」

このまま6分。

「見せてやろう…ダオスレーザー！」

パリーン！

「あつ」

「アホかーーーーーッ!?」「あつ」「じゃないわ」「あつ」「じゃあ弱っているとはいえ真祖の結界を簡単に壊しおって!」

エヴァが私の肩を掴みブンブン振ってくる。

「いやあ。待て待てエヴァ。私なりに考えたんだよ。手本になりな
らイメージしやすいように似たような技の方がいいだろ？それで私
ができる手から出す術はあれしなくてな。あとは何て言うかノリ
？あの技使うならこの程度の結果は破らないとな」

「ノリ？ じゃないわぼけー！ー！ーッ！ー！ ええい、今日という今日は頭に来た！ 貴様の血を吸いつくしてくれる！」

「ははは。今のお嬢ちゃんにそれができるかな？」

「きつ貴様あ……」

「ケケケ。俺モ混ぜロヨ」

「茶々丸さん。止めないんですか？」

「さよさん。私が言って止められる可能性は28%そのうち27,9%の可能性で私はスクラップです」

「ですよ〜。私もあそこに行ったら霊体とか関係なく消滅させられそうです。」

トントン

「……止めたほうがいいの？」

グレイア

この子はクラスさんの親戚のユノ・G・レスターさん。物静かな人で今度から3-Aに転校することになりました。というのは建前でなんとその正体は世界樹から生まれたディセンドラーという世界樹の分身なんだそうです。まだ一歳にもなっていないので私と茶々丸さんで勉強を教えることになったんですが、物覚えのよさと好奇心の高さで中学三年の勉強をあっという間に終わらせて今では大学で習うような勉強を始めてます。私はそこまでは教えられないので一般常識などを教えています。

あつと、話がそれてしまいました。

「止められるんなら止めたほうがいいですけど……」

「……わかった」

そう言いユノさんはクラスさんたちの方へ向っていきます。

「……ピコハン」

184

空を見上げればそこにあるのは巨大な歯車。

絶えずその身を回し続ける。

まるで何かを生み出そうとするように。

目の前に視線を戻すとそこには半透明の翼を持った金髪の天使がいた。

彼女はこっちを振り向くと……。

「あれ？間違えちゃった？」

「は？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

その言葉とともに地面から無数の……。

「ピコハン!？」

.....夢か。

伝説の玩具、その名は…（後書き）

感想待ってます。

召喚士、南の島へ行く（前書き）

前回のラストは某錬鉄の英雄の心象風景を参考にしてみました。

召喚士、南の島へ行く

ネギ君たちに誘われて海に来たわけだが…。

『海だーーーーーっっ！！！！』

「若いつていいねえ」

「…うん」

「老けこまないでくださいよ二人とも。それにユノさんが一番若いでしょ」

そうは言うがあいつらのあのテンションにはついていけないよ。

「ほらほら、みんなの様子を見に行きましょうよ！」

「お前もテンション高いな」

「だって海ですよ？南の樂園ですよ？ここであげなくていつあげるんですか？」

やっぱり相坂も2・Aの一員か…。

適当に歩いていると足元にビーチボールが転がってきた。

「あ、クラスさん。ボールとって」

ボールを拾って佐々木に投げて渡す。

「ありがと」

そのままビーチバレーをやっている集団に近づいて行く。

「大河内、隣いいか？」

「あ、どうぞ」

大河内に許可をもらってから隣に座る。そのままビーチバレーの試合を見ていると大河内がちらちらこっちを見てきた。

「どうした？聞きたいことがあるなら聞くが？」

「いや、その、全身にあるんですね」

「ん？…ああ、刺青のことか。やっぱり気になるか？私が副担任になった時も質問してきたし」

「はい、おまじないって言ってましたけどどういふものなんですか

？」

「簡単にいえば語りかけるためのものだ」

「語りかけるですか？」

「そう。精霊や妖精といった存在要するに目に見えない者たちに『私はあなたたちと仲良くしたいんです』『あなたの力を貸してくれませんか？』と語りかけるものだ」

「だから、私が惹かれてたんですね！」

「あ、相坂さん。いたの？」

「ガン！！」

「ご、ごめ……」

「いいんです。いいんです。私なんて姿が見えるようになったところでこの存在感の薄さはなおないんです。大河内さんが悪いんじゃないかもしれません。私が、存在感ない私が悪いんです」

相坂がしゃがみこんでのの字を書き始めた。

「ご、ごめん！悪気があったわけじゃないんだ。ただクラスさんの刺青が気になってそっちに目が言っちゃって。だから、えーとつまりこれはクラスさんのせい？…じゃない何私は人のせいにするんだ？」

大河内が頭を抱えて悩みだした。どうしたらいいんだこれは？ん、ユノ？

なでなで

「どーせ私なんて…ユノさん？」

「えーとつまり…ユノちゃん？」

ユノが二人の頭を撫で始めた。

「…落ち着いた？」

「あ、はい」

「う、うん」

ニコッ

「それじゃそろそろ次の所に行くか。大河内もしっかり楽しめよ」
「ハイ」

「やつほ。クラスさん。両手に花だね」

しばらく歩いていると寝ながらデジカメをいじっている朝倉が話しかけてきた。

「ネギ君にはかなわないがな」

「ナハハハ。ネギ君にはかなわないよ。そうだオイル塗ってよクラスさん。さつきネギ君に断られちゃってさ」

「鳴滝姉妹。朝倉がオイル塗って欲しいそーだ」

「いくよー史伽！」

「了解ですう」

「えっ、ちよつと!？」

「ん？神楽坂か」

「あ、クラスさん」

「どうしたんだ？そんな顔して。神楽坂らしくもない」

今日の前にいる神楽坂からはいつもの元気は感じられない。

「ちよつとね…。クラスさんは幼馴染の人と喧嘩したことってる？」

「そりゃあ、何度もあるが…」

「どうやって仲直りしたの？」

「私たちの場合は私が家を出てお互い一人の時間を作ったな。それでしばらく一人で考える。それで頭が冷えて家に戻るとまるでそんなことなかったみたいについて通りの生活に戻ってたな」

「そんな簡単に？」

「長く一緒にいるとな。お互いの考えもわかってくるんだよ」

「ふん」

「で、いつ仲直りするんだ？君たちは」

「だって…」

「もう許してるんだろ？それにお互いの考えがわからないなら話
あうしかないじゃないか」

「そうね…。クラスさんネギ呼んで来てくれない？」

「ああ」

さてネギ君は…あそこか。

「うーん兄貴やっぱアスナの姉さんがいねーとカッコつかねーなー

ー」

「はっ！そうだアスナさん。僕アスナさんに謝りに行かなきゃー」

「落ち着けネギ君」

「クラスさん」

「神楽坂なら向こうにいるからしっかり話し合って来い」

「はいっ。わかりました！」

そう言うともものすごい速度で走って行ってしまった。

「クラスさん。聞きたいことがあるのですが…」

「なんだ綾瀬」

「クラスさんの研究とは魔法関係のことですか？」

「ああそうだよ。私が研究しているのは召喚術だ」

「私に教えて欲しいのですが」

本気みたいだなだが…。

「無理だな」

「なぜですか」

「いくつか理由はあるが、なかでも三つが問題だ」

「それはなんですか？」

「ひとつは刺青。ただの人間が召喚術を学ぶなら最低でも私の体に
刻まれているぐらいの刺青を刻まないといけない」

体に刻まれている刺青を見せながら言う。

「ひとつは契約の指輪。精霊たちと契約するにはそれなりの力がこ
もった宝石が必要だ」

契約の指輪を見せて言う。

「最後は契約する相手。契約する際には相手の同意が必要不可欠だ。そして無償で力を貸してくれる相手なんてのは滅多にいない」

「そうですか」

綾瀬が目に見えて落ち込む。

「ファンタジーな力が欲しいならネギ君に魔法を教えてもらえばいいだろ？」

そう言うところにいる全員がぼくんとした顔をした。

「どうしたんだ？」

目の前にいた綾瀬に聞くと。

「いえ、てつきりネギ先生のように危険だからかわるなと言いつたので」

「そんなわけないだろう。こちらの世界を知ってしまったんだから最低限自分の身は守れるぐらいにはならないとな。いつ巻き込まれるかわからないし」

「巻き込まれるとはどういうことですか？」

「どういうこともなにも実際に巻き込まれたら？修学旅行の時」

あのクラスには普通じゃない子がたくさんいるしな。

「こちらの世界に踏み込めばあの時以上の危険があるということは覚えておけ」

さてそろそろ寝るか…。

その夜

「わるいですけど今回は勝たさせていただきます！ドローツ―！」

「…ドローツ―」

「ふああ。ドローツ―」

「負けへんで。ドローツ―！」

「読んでましたよ。この展開！さらにドローツ―！そしてウノ！」

「…ドローツ―」

「奥の手は最後まで取っておくものだ。ドローツ―」

「それがさよちゃんの敗因や。ドローフォー！」

「うう、ぐすつ、なんで勝てないんですかあゝゝゝ？もう一度です次は負けません！……………」

「…月夜ばかりと思うなよ（ボソッ）」

「…！？」

召喚士、南の島へ行く（後書き）

感想待って待ってます。

音の精霊、現る（前書き）

あの子が巻き込まれちゃいます。

音の精霊、現る

「龍宮。桜咲はしっかりやってるか？」

「ちゃんとクラスさんの作ったプリントをやらせてあるよ」

今日は警備の日だが中間がもうすぐあるので勉強させている。

「それじゃあ、いくぞ」

「ケケケ」

「…うん」

「ちよつと待つてくれ、クラスさん」

見回りを始めようとした瞬間龍宮に止められる。

「どうしたんだ？」

「刹那の代わりの警備って彼女かい？」

私の隣にいるユノを指さしながら訪ねてくる。

「そうだが？」

「心配スナナヨ。俺ト旦那ト妹ガ直々ニ鍛エテンダ。アイツニ負ケ
ネエグライツエエゾ」

「…よろしく」

「あ、ああ。よろしく」

しばらく歩いていると何か違和感を感じた。立ち止まってあたりを見回してみる。

「どうしたんだい、クラスさん」

「静かすぎる」

虫の鳴き声や風が木の葉を揺らす音そういつ当たり前の音が聞こえない。

「周りを警戒しろ」

「了解」

「…うん」

「ケケケ」

四人の背中を合わせてまわりを警戒する。

「……」

「……敵を討て」

「上だ！」

上を見ると無数の魔法の射手がこちらに向かって来ていた。それぞれ回避する。全てを回避してはなってきた相手を見る。

「妖精？」

上空には30センチほどの小人が背中の中をパタパタ動かして飛んでいる。

『魔法の射手連弾・光の11矢!!』

『魔法の射手連弾・光の11矢!!』

『魔法の

射手連弾・光の11矢!!』

『魔法の射手連弾・光の11矢!!』

『魔法の射手連弾・光の11矢!!』

『魔法の射手連弾・光の

11矢!!』

『魔法の射手連弾・光の11矢!!』

『魔法の射手連弾・光の11矢!!』

『魔法の射手連弾・光の11矢!!』

『魔法の

射手連弾・光の11矢!!』

「これはネギ君の声？」

ネギ君の声が壊れたプレーヤーのように何度も同じ詠唱を続けて魔法の射手を生み出し続けている。

「全員私の近くに集まれ！粗暴な紅蓮の猛者よ、翠の風まとう姉妹よ、奔放なる大地の精よ、蒼き水流の女傑よ、地水火風を司りし四大精霊よ……」

呼びかけに応じて魔法の射手をよけながら私の近くに集まってくる。

「我らを守る堅固な盾と化せ！テトラシールド！」

詠唱が終わり四面体が私たちを囲み魔法の射手から守る。

「あれは一体何なんだ？」

「おそらく、音の精霊だな。しかしなんでこんなところに？」

『なんじゃこりゃー！？』

この声は！？

「ったく。よりもよって新田の授業の宿題を学校に忘れるとは……」
クラスさんとかなら簡単に許してくれるけど新田はなあ……。

「さっさと行くか」

…ドオン…ドオン…ドオン。

「な、なんだ？」

ロボ研の奴らがまたおかしなものでも作ってんのか？近所迷惑だつての。

そう思い音がする方を覗いてみたら。

妖精みたいな小さな奴。その小さな奴の前から無数に放たれている光の弾丸。その光の弾丸を受けている半透明の四面体。その中にいるクラスさんとクラスメイト二人と人形。

ここから導き出される答えは……。

「なんじゃこりゃー！？」

あれは長谷川！？何でこんな時間に！？しまった精霊が彼女に気付いた。

「ノーム！彼女をここまで連れて来い！」

四面体の一つが外れ彼女のもとへ飛んでいく。長谷川のもとまでいくと彼女を包みこみこちらに戻ってくる。

「おい！どーゆーことだよこれ！光の弾丸とかこのアニメの話だよー！？」

「とりあえず落ち着け、長谷川。手短に説明するぞ？これは現実で

この中にいる限りは安全だ。私たちの今すべきことはあれを倒すか
説得して無力化することだ。質問は？」

「……………」

なにも言えないか。確かにいきなり巻き込まれたら困るよな。

「チャチャゼロと龍宮は長谷川を守れ。怪我ひとつさせるな」

「シヨウガネエナア」

「了解」

「ユノは私が精霊の気をひきつけるからそのうちにマナを流し込んで暴走状態を止める」

「…わかった」

「いくぞ！来い！イフリート！シルフ！ウンディーネ！ノーム！」

そう叫び今まで盾となっていたそれぞれの精霊が元の姿を取る。

「音の精霊よ！私たちが相手だ！」

クラースがそう叫ぶと音の精霊は新たな呪文を唱え始める。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル。来れ雷精、風の精！！」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラ

ツク。来れ氷精、闇の精！！」

「雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐」

「闇を従え吹雪け常夜の氷雪」

「雷の暴風！！！！」

「闇の吹雪！！！！」

かつてエヴァとネギ君が打ち合った呪文が並んで飛んでくるが…。

「四大精霊を舐めるな！受け止める！」

四大精霊がそれぞれ火、風、水、土を操り受け止める。

「ユノ！今だ！」

魔法を受け止められて戸惑っている精霊の後ろからユノが飛び出し精霊を抱きしめる。

「…大丈夫。…怖くないから」

ユノからマナが送られるとともに高ぶっていた精霊の感情が静まっていく。

「ボクは…ボクは…」

「落ち着いたみたいだな。話を聞かせてくれるか？」
「うん」

音の精霊エトスは自分の存在に気付いてくれる人を探して世界中を旅した。その途中で出会った魔法使いに麻帆良へ行くように言われおまじないをしてもらいここに来た。そこからは記憶がないようだ。
「わかった。お前が望むなら私とこないか？」

「いいの？あなたたちに酷いことをしたのに？」

「かまわないさ。その代わり君の力を貸してほしい」

「うん。アズライトの指輪がいい」

「我、いま音の精に願い奉る。指輪の盟約のもと、我に精霊を従わせたまえ…。我が名は…クラス・F・レスター」

エトスが光となり指輪に宿る。

「終ワツタミタイダナ」

「ああ」

「クラスさん。あんたに聞きたいことがあるんだが…」

精霊との契約が終わりチャチャゼ口達のもとへ戻ると長谷川が話しかけてきた。

「お前の気持ちもわかるが今は寮へ帰れ。聞きたいことは明日…いやもう今日か。今日の放課後に教えてやる。龍宮送ってやってくれ」
「了解」

龍宮と長谷川を見送りまだ残っている二人に話しかける。

「私たちも帰るか」

「…うん」

「ケケケ」

「すみません。宿題忘れました」

「長谷川！お前たるんで…どうした顔色が悪いぞ？」

「ちよつと調子が悪いので保健室で休んできます」

保健室

長谷川さん大丈夫やろか？

ガラ

「長谷川さんだいじょうぶ…」

「あり得ない。あり得ない。あり得ない。あり得ない

…ブツブツ」

「…」

そつとしてあげるのが一番やな。別にかかわりたくないとかそんな
んちゃうで？

音の精霊、現る（後書き）

感想待ってます。

世界樹の落とし子の設定（前書き）

ユノの設定です。

世界樹の落とし子の設定

名前 ユノ・G・レスター グレイア

年齢 肉体年齢15歳 実年齢数週間

身長 157センチ

体重 ?キロ

容姿 髪の色は茶々丸と同じ少し薄い緑、長さは肩にかかる程度。
瞳の色は海のような青。そして昔のすずのような無表情。

性格 無垢。好奇心旺盛。

趣味 調べもの。小物作り。

能力

その一

ディセンドラーの能力により様々な武器を使いこなすことができる。
また魔法も使える。

その二

自らのマナを分け与えることで相手の感情を落ち着かせることができる。

その三

????

ネギまの世界の世界樹により生み出されたディセンドラー。クラス

を手伝うために生み出されたためかクラスによくついている。
無表情だが感情がないのではなく出し方が分からないだけ3 - Aの
生徒たちによって表情が豊かになりつつある。

世界樹の落とし子の設定（後書き）

感想待ってます。

召喚士、向きになる

「…というのが魔法とそれに関係する裏の世界の概要です」

「ふうん」

魔法がばれるとオコジョとかどこの魔女っ子ものだよそのベタな罰則。ついて行けねーぞ。ん？ちよつと待てよ。

「なんで私の記憶は消されないんだ？ばれるとまずいんだろ？」

「そのことはクラスさんに聞かないとわかりません」

「じゃあ行くか」

「案内します」

それにしてもファンタジーとしか言いようがねえな此処は。

「こつち側のことは大体わかったか？」

茶々丸が連れてきた長谷川に話しかける。

「わかったけどよ。なんで私の記憶は消されないんだ？」

ん？ああ、説明してなかったか。

「それはお前の体質に問題があるんだ」

「体質？」

「この学園にはな、認識阻害の結界があつてあり得ないことが起こつても大体は『まあ、麻帆良だから』って感じで不思議に思わないようになつてるんだ」

「だから、10歳のガキが先生をやれるのか」

「そう、で、問題なのは長谷川の体質だ。長谷川はそういう魔法が効きにくいんだ。だから昨日のように本来は近づけない場所にも入つてしまうし、周りの奴らとの感覚の違つてきてしまうんだ」

「マジかよ。ということはまた巻き込まれる可能性があるってことか？私の日常が…」

そう言い頭を抱えてしまった。

「大丈夫だ」

長谷川の頭を撫でながら言う。

「たとえどんな危険が長谷川を襲っても私が守ってやる」

長谷川は顔を上げ。

「クラスさん………あんたって強いのか？」

ピシッ。

「千雨さんクラスさんは……」

「あんときだつて敵の攻撃受け止めてただけだし。防戦一方だったじゃねえか。そんなんで守るとか言われても」

ブチッ！

「え？」

「いいだろうそこまで言うなら私の本気というものを見せてやる」
ちようど新しい技も考えていたところだ。

「プラクテ・ビギ・ナルー………！！」

全くよくやるな。わざわざ平穩を捨てているようなものだぞ。

「エヴァー！久しぶりに模擬戦をやるぞ！」

珍しいなこいつから勝負を申し込んでくるなんて……。なんか笑顔が怖いぞ！？

「私は一人でいい。そつちは三人で来い。なんなら桜咲を入れても良いぞ？」

「どういうことだ茶々丸」

こいつの様子は明らかにおかしい。

「ハイ、実は……」

ふむ………ガキかつ………まあ、久しぶりに暴れられるからよしとするか。

「刹那！ちよつとこつちに来い」

まさかクラスさんと戦うことになるとは、しかしクラスさんのあの太刀筋、あれは剣を習っている者のものだ。一度手を合わせた
いと思っていた。

「エヴァンジェリンさん。最初は私にいかせてください」
「いいだろう。ただし十分だ。そしたら私たちも手を出す」
「わかりました」

「最初は桜咲か」

エヴァたちはまだ手を出さないみたいだな。なら…。

「クレス！」

姿をクレスに変えエターナルソードを構える。

「来い！」

「斬岩剣！！」

ガギンツ！！

「甘いよ！秋沙雨！」

素早い突きを繰り返すが全て逸らされる。なら。

「奥義！獅子千裂破！」

やはり逸らすか…だが！

ゴウツ！！

「ぐあっ！」

そんな状態では決めの獅子戦吼は避けられないだろう。

「くっ！斬空閃！」

「守護方陣！」

「なっ！？」

「いくよ！空間翔転移！」

これでお終いだ。

「消えた！？」

「上だ！刹那！」

「遅い！」

連撃を叩き込み吹き飛ばす。桜咲の動きが止まったのを見て姿を戻してエヴァたちに言う。

「さっさと全員で来い！」

「私の実力はこんなものだが不満か？長谷川」

「さっきはその生意気言つてすいませんでした…」

「つか、早くその格好やめろよ！昨日の夜とは比べ物にならないくらいこえーよ！！なんだよその翼！鱗！爪！もろ悪役じゃねえか！！！」

「クラス！貴様、私を殺す気か！？なんだそのバカみたいな防御力と攻撃力は！」

「いやいや生きてるだけで十分化物だよエヴァンジェリン！！」

「はあ…。こいつらに比べたら麻帆良の非常識なんて可愛いもんか。」

召喚士、向きになる（後書き）

精霊装填・ワイバーン『飛竜乗雲』のようにカツコイイ四文字熟語を募集します。

出来れば風や水などその精霊の属性を入れてください。
感想待ってます。

時空戦士たちの過去〜物語の始まり〜（前書き）

時空戦士の過去。まずはクレスとチェスターです。

時空戦士たちの過去―物語の始まり―

夜

ネギ君の記憶を見た。

父親を夢見て無茶をするネギ君。

紅く燃える村。

無数の悪魔。

石になった村人。

助けに来た父親。

杖を渡し去っていく父親。

「今でも時々思っんです。あの出来事は『ピンチになったらお父さんが助けに来てくれる』なんて思った僕への天罰なんじゃないかって…」

あれは天罰なんかじゃない。襲ってきた奴らに対してネギ君の存在が『ペンダント』あるいわ『魔科学』そのどちらかだったのだろうが…

ネギ君を中心に集まる彼女たちを見て思う。

私たちと同じで一人じゃないきつと乗り越えられるさ。

「……………」

「どうしたのゆえっち？」

「いえ、今見た悪魔と修学旅行の時にクラスさんが召喚したもの

が随分違うと思ひまして…」

「それはそうだろ。あれはまったく違う存在だ。いい機会だクラス。こいつらにお前の過去を見せてやれ」

まあいいだろう。

「これから見せるのは私たちの記憶だ。ネギ君の記憶より酷い場面もある。それでも見たい奴は私の周りに集まってくれ」

カード見せながらそう言う全員が私の周りに集まって来た。

「いいだろう。…心の精霊、ヴェリウスよ。我らの心を彼らに見せたまえ」

そう言う私たちの周りが一変した。

「天光満つる所に我はあり…」

どこかの城の中。4人組のパーティーが金髪の男と戦っている。剣士が剣を振り、男がそれに反撃する。その間に魔術師が詠唱を続ける。

「黄泉の門開くところに汝あり…出でよ、神の雷…」

「なに！？それは…」

「これで最後だ！インディグネーション！」

凄まじい雷が男に直撃する。

「そんな…そんな馬鹿な！うわあああつ！」

男が叫び倒れる瞬間、男は光となってどこかへ消えた。

そして舞台は地下墓地に変わる。雷を放った魔術師にそっくりな者と剣や杖を持った四人のパーティーの前に雷と共に現れる男。

「き、貴様！！なぜ、ここに！？やめるおおおおつ！」

その刹那、男は結界に閉じ込められ、その力を2つのペンダントに封じられた上で石の棺の中に閉じ込められる。

「これで…私の家に代々続いた使命も終わりか…」

「この人たちは？」
「見てればわかるさ」

場面は変わりあるのどかな村。剣術道場で赤いバンダナを巻いた少年が大人と老人に話しかける。

少年「こんにちは、トリスタン師匠。お久しぶりです」

トリスタン「おお、クレスか。久しぶりじゃのう」

大人の男性「クレス」

クレス「なに、父さん？」

クレスの父「母さんの具合のほうはどうだ？」

クレス「熱も下がったみたいだし、もう大丈夫だと思うよ」

クレスの父「実はな、クレス…お前にやったペンダントについて、話があるんだ」

クレス「ペンダント？ああ、15歳の誕生日の時にもらったペンダントのこと？あの時、父さんに言われたとおり大切に持ってるよ。あれが、どうかしたの？」

ある家の前青い髪をした少年が同じく髪の色い少女に話しかける。

少年「それじゃ、狩りに行ってくるよ」

少女「気をつけてね、お兄ちゃん」

少年「ああ、留守番たのむぞ」

少女「お兄ちゃん、クレスさんに渡したいものがあるって伝えてほしいんだけど」

少年「ああ、わかったよ」

少女「行ってらっしゃーい」

剣術道場に向かう少年。

少年「おーい、クレス、行くぞー！」

再び道場の中に視点は移る。

クレス「あ、父さんごめん。今日は、チェスターと約束していたんだっ」

クレスの父「ああ、ペンダントのことは夕食の時にでも話そう」
クレス「はい。トリスタン師匠、ゆっくりしていつて下さい」

家の外に出るクレス。

クレス「悪い悪い、待たせたな」

チエスター「気にするなよ。それより、誰か来てるのか？みんなの
声が、いつにも増して気合入ってるように聞こえるけど…」

クレス「ああ、師匠が来てるんだ」

チエスター「師匠って、トリスタンとかいうじいさんか？あんまり、
すごい人には見えないけどな」

クレス「昔、父さんは師匠に厳しく剣の手ほどきを受けたという話
だけど…」

大人の女性「クレス」

女性が玄関まで出てくる。

クレス「母さん、まだ病み上がりなんだから外に出ちゃダメだよ」

クレスの母「でも、お前が心配でね。ケガしないように気をつけな
さいよ」

クレス「わかってる。チエスターの弓と僕の剣があれば大丈夫さ」

チエスター「おばさん、心配しないで。山ほど獲物を狩ってくるか
ら」

クレスの母「わかったわ。でも、くれぐれも無理はしないでね」

チエスター「それじゃあ、そろそろ行こうぜ」

クレス「ああ、そうしよう」

チエスター「あつ、そうだ忘れてた。アミイが、お前に渡したいも
のがあるってさ」

家の中に入っていくクレスの母。

平和な風景を見せる村。少女、アミイにお手製のマスコットをもら
ったり、雑貨屋からもらったりんごをアミイにあげたりした。結婚
を控えた村人はその事を幸せそうに語っていたりと、平穏な日々の
情景がそこにはあった。村の外に出ようとすると、
トリスタン「クレスよーい」

トリスタンもまた帰る所であつた。

クレス「師匠、お帰りですか？」

トリスタン「実はな、先程、見知らぬ者が来て急に呼び出されたんじゃ。何の用事が告げもせぬ。まったく、無作法者じゃ。おんしはどこへ行くんじゃ？」

クレス「南の森まで猪狩りに行つてくるんです」

トリスタン「そうか、精進せいよ」

そう言いトリスタンは村を去った。

南の森にて。

チエスター「あつ、猪だ！！」

一目散に逃げていく猪。

チエスター「追いかけよう！」

森の少し奥にて先程の猪を見つける。

クレス「いた、あそこだ！！」

またも逃げる猪。

チエスター「逃がすもんか！」

森の奥の大きな枯れ木の近くにやってくる二人。

クレス「あれ？見失ったか……」

チエスター「間違はなく、この辺にいるはずなんだけどな……オレ、近くを探してくるぜ」

クレス「確かに、こつちへ来たと思つたんだけど……」

その時、精霊のような女性の声がする。

???「樹を……けがさないで……」

そしてクレスの眼に映る、枯れ木がまだ生きていたころの姿。しかし気がつくとそのはまた元の大きな枯れ木であった。

チエスター「こつちには、いなかったぞ。そつちはどうだ？クレス、どうした？」

チエスターの声に我に返るクレス。

クレス「いや……」

その時、猪が目の前に現れる。

チエスター「いたぞ！」

猪との戦い。勝利した後、

クレス「大物だな！」

チエスター「これだけ獲れば十分だろう。それじゃあ、村に戻る
うぜ」

その時、村の危急を告げるための半鐘が森の中に鳴り響く。

チエスター「なっ、なんだ!？」

クレス「あれは…村の半鐘の音だ!何かあったのか!？」

チエスター「急ごう!!」

大急ぎで南の森を出て、村に戻る二人。しかし二人を待ち受けていたのは火をかけられ、廃墟と化した村の姿だった。

「ひどい…」

あまりの光景にほとんどの者が顔をそむける。

クレス「そ、そんな…」

チエスター「オレ…家を見てくる!アミイ！」

アミイの名を呼びながら、単身家のほうへ走っていくチエスター。

村人たちはすでに息絶えたものがほとんどであった。先程まで平穏な日々を過ごしていたはずの村人たちが何故?クレスは剣術道場まで戻るが、そこには瀕死の重傷を負った父の姿があった。

クレス「と、父さん…」

クレスの父「クレス…母さんは…無事か…」

クレス「父さん、何が起きたの？」

クレスの父「…ぐふっ!」

息絶えるクレスの父。

クレス「父さん!!」

その時、家の戸口からクレスの母が現れる。

クレス「母さん!!」

しかしクレスの母も瀕死の重傷を負っていたようで、クレスの前で倒れる。

クレス「母さん、しつかり！」

クレスの母「クレス、逃げなさい。伯父の住む北の都ユークリッドに……あいつらは、お前のペンダントを……」

クレス「あいつらって誰！？いったい誰が……こんなことを……」

クレスの母「父さんは……私が入質にとられなければ……ああ……」

息絶えるクレスの母。そして降り出す雨。

クレス「母さん、母さん……」

クレスの母「……」

クレス「目を、開けてよ……母さん……」

クレスの悲痛な絶叫が空に木霊する。

クレス「うわああああ……」

そしてチエスターの家。チエスターがアミイの亡骸のそばにいた。

クレス「……チエスター……チエスター、ここは危険だ。ユークリッドの僕の伯父の所へ行こう……」

チエスター「……アミイや村の人達をこのままにして、逃げるっていうのか？オレはいやだ！行くんなら一人で行け！……みんなを弔わないと……オレ一人だけでも……」

クレス「村を襲った奴らが戻ってきたら、殺されるかもしれないんだぞ！」

チエスター「……すまん、クレス……それでも、オレは……」

クレス「チエスター……」

チエスター「先に行つててくれ……二人とも残るのは危険だ。オレは後から必ず行くから」

クレス「必ずだぞ……」

チエスター「ああ、必ずだ……二人で必ず敵を討つぞ！」

クレス「ああ！」

チエスターの家を出ようとしたとき、クレスの母の最期の言葉が甦

ってくる。

クレスの母「あいつらは…お前のペンダントを…」

クレス「父さんがくれた、ペンダントを狙う奴ら………早くここから離れよう！そうすれば、少なくともチェスターが狙われることはないはずだ…」

そしてクレスは単身、ユークリッドを目指し村を出ることとなる。

時空戦士たちの過去／物語の始まり／（後書き）

全部書くことはできないのでとりあえず、それぞれの出会いとアリーのイベント、最終決戦／エピソードまでのことを書きたいと思います。他にもこのイベントは外せないというモノがありましたら感想に書いてくださいできる限り書きたいと思います。
感想待ってます。

時空戦士たちの過去へ語られる因縁へ（前書き）

マイソロ3買いました。

クラスさんあなたの帽子はしっかり受け継ぎました。

時空戦士たちの過去へ語られる因縁

壊滅した村を単身旅立ったクレスは、ユークリッドの伯父オルソンの元に向かうが、オルソンに裏切られ黒鎧の男に捕えられた。

「どうして…クレスさんを」

「そうしなければあの街が壊滅していたさ…まああの男も生かされてはいないだろう」

兵士「ミゲールの息子を、捕らえてきました！」

黒鎧の男「ごくろう。ふ、貴様のような若造が持っていたとはな…」

クレス「村を襲ったのはお前だな…！」

黒鎧の男「だとしたら、どうだというのだ弱き者よ」

クレス「くっかつ、返せ…！」

黒鎧の男「このペンダントは、もらっておくぞ…おい、この若造の武器を奪って牢に入れておけ。ふふ…これでついに…」

番兵「よし、入れ！長生きしたかったら、おとなしくしていることだな」

クレス「くそっ…！」

牢屋に入れられたクレスは周囲を探る。

クレス「うーん、この穴からじゃ出られないな…」

牢屋に空いていた小さな穴を調べると声が聞こえた。

女性「私の…声が、聞こえますか」

クレス「なんだ？今…女の人の声がしなかったか？」

女性「手をこちらへ…」

クレス「誰…ですか？」

女性「手をこちらへ…差し伸べて下さい…あなたの助けに…なりた

いのです…」

クレス「……」

クレスが穴の向こうに手をかざすと手の上に何かを置かれた。

クレス「これは、イヤリング？」

それは角を持った白馬、ユニコーンをかたどったイヤリングだった。女性「それを壁にかざして…そして、牢屋に捕まっている女の子を助けてあげて…あなたなら…きっと、館から出られるわ」

クレス「ちょ、ちょっと待って！あなたは…」

女性「…お願い…」

クレス「……とにかく、イヤリングをかざしてみよう」

壁にイヤリングをかざすとまばゆい光が溢れだし、その光が治まると壁にあった小さな穴が人がくぐれるほどの大きさになった。

クレス「これは…さっきの人に会って、お礼を言わなければ・・・」
そこでクレスが見たのは鎖でつながれ剣で貫かれている女性の姿だった。

クレス「そんな…あの手の温もりは、何だったんだろう…」

ほとんどの者が目をそらす。裏にかかわっている桜咲も顔をしかめている。

クレス「剣が突き刺さってる…ひどいことを…使わせてもらいます」
クレスは女性から剣を引き抜き牢屋の扉をこじ開けた。牢から出て出口を探すと一人の少女を見つけた。

クレス「大丈夫？ケガはない？……心配しなくてもいいよ。僕は、君を助けに来たんだ。僕はクレス、君は？」

少女「ミント…私はミント」アドネードですあの…助けていただきたい
てありがとうございます」

クレス「僕も捕まっただけだね。さあ、一緒にここから出よう。
いつまでもここにいろわけにはいかないからね」

ミント「あの…私の母も助けて下さい…向こうの牢に捕らえられて

いるはずです」

クレス「えっ？」

その方向はさつき自分が出てきた方向。そこで見つけた人は自分を助けてくれた彼女しかない。

クレス（この子は母親の死を知らない。現実をこの子に見せるのは、あまりにも気の毒だ…）

クレス「……あっちには誰もいなかったよ」

ミント「で、でも…確かに、母の声が聞こえていました！私を、励ます声が…確かに、母が…」

クレス「時間が無いんだ、早くしないと見つかってしまうかもしれないし…」

ミント「わかりました…」

地下水路を抜け二人は外へ出た。

クレス「ここまで来れば、もう大丈夫だろう…ミント、危ない！！」
木の上から落ちてきたなめくじ形のモンスターにやられて倒れるクレス。

クレス「くっ！！」

ミント「クレスさん！！」

クレス「くそっ、油断した…」

ミント「クレスさん、しっかりして！クレスさん！！」

倒れた拍子に転がり出たイヤリング。

ミント「これは！？」

それを拾い胸に抱くミント。

ミント「お母さん…」

涙が一筋彼女の頬を伝った。その時遠くから馬が走る音が聞こえた。
ミント「追っ手？逃げないと…」

ミントはイヤリングをしまい、クレスを背負うとよろめきながら歩き出す。

「強いなこいつは…」

目が覚めたクレスはモリスンと名乗る人の家にいた。そこでチエスターと再会する。モリスンにペンダントのことを聞かれ奪われたことを話すとクレス達を置いて地下墓地に向かう。残っていたクレス達はモリスンの家にやって来たトリスタンの話を聞き地下墓地に行くことを決意する。数々のトラップをくぐり抜けて奥に進むクレス達。そして地下墓地の奥。結界に囲まれている棺の前に黒鎧の男とその部下らしき人物が二人。それに相對するようにモリスンが立っていた。

モリスン「お前の悪だくみもこれまでだ！ マルス＝ウルドール！」

マルス「ふん、わざわざ見物に来るとはな…ほら、仲間も来たようだぞ」

モリスン「お前達…あれほど来るなと…」

モリスンがクレス達に気を取られているうちにマルスが結界の中に入る。

モリスン「しまった！！」

マルス「はははっ、間抜けが…」

マルスがペンダントを二つ棺の上に置くと結界を作っていた三つの水晶が砕け結界が消えると同時に地下墓地が揺れ出した。

チエスター「な、何だ？」

マルス「さあ、いにしえの王の復活だ」

クレス「何だと!？」

マルス「そうだな、冥土の土産に教えてやろう…ヴァルハラ戦役…貴様らも知っておろう、今より100年ほど前に起こった戦いを…当時最大を誇った二国の連合を相手に圧倒的な力を見せつけた一国の王がいたその王の名はダオス！！しかしその男も、ある冒険者達の前に敗北することになる」

モリスン「知っているさ私は、その冒険者の血をひいているからな」

クレス「!?」

モリスン「私だけではない。クレス君、君とお嬢さんは…私と同じく、その昔、ダオスと戦った者達の子孫なのだ」

クレス「僕が？」

ミント「私が!？」

モリスン「君達が襲われたのは、偶然ではない。昔から続いた、ダオスをめぐる因縁ゆえなのだ。そのダオスの復活を、この男は私欲のためにたくらんだ。そうだな…!元・ユークリッド独立騎士団長マルス「ウルドール」

マルス「ふ…ダオスの復活は、定められたことだ!止められぬわ!」
クレス「……」

チエスター「うるせえ!ダオスだか因縁だか知らねえが俺には…そんなことは関係ねえ!てめえは…てめえはアミイの仇だ!!それだけで十分だ!」

マルス「愚か者どもが!もう遅いわ!」

棺の中から光が溢れだし蓋を破壊しながら金髪の男が現れる。

マルス「おお…これが、いにしえの王ダオス」

マルスはダオスに語りかける。

マルス「ダオスよ、いにしえの王よ、我の命ずる所を聞け。我が名はマルス…マルス「ウルドール」」

ダオス「ふふ、運命の系に操られていたことに気づかぬ愚か者よ」

マルス「何を言っている!封印を解いた俺が、貴様の主なのだ!!」

ダオス「私を封印した者どもを殺し、封印を解く鍵を奪わせたのは、他ならぬこの私自身…思い出させてやろうか?三ヶ月前、お前がこ

こに訪れた時に何があったかを…」

マルス「ぬ、ぬかせ!!」

モリスン「危ない、よける!!」

マルス「何!？」

ダオス「お前には、もう用はない」

マルス「う、うわぁー!!!」

ダオスの手から光線が放たれマルスとその部下が消え去る。

ダオス「私が背負う重大な運命もわからず、我利のみを求め勝手な振る舞いを続ける人間達…そして私を封印した者どもの生き残り…そこのお前！！断じて許せるものではない」

ダオスはモリスンを睨みながら話す。

モリスン「奴は剣では倒せない私が法術で、君達がある場所へ送る。そこで、奴を倒す方法を学んでくるんだもうこれしか方法はない！！」

クレス「どういうことです！？」

モリスン「説明しているひまはない！！それと、この本を…」

クレス「これは！？」

モリスン「ミゲールとマリアの遺志を、継いでくれ！！頼んだぞ…」
そう言うともリスンが詠唱を始める。

ダオス「ククク、死ね」

ダオスの手に力が集まり始める。

チェスター「くそっ、間に合わない！！」

チェスターがダオスに殴りかかり、力を集めるのをやめたダオスに殴り飛ばされる。

クレス「チェスター！！」

ミント「チェスターさん！！」

クレス達が叫んだ瞬間モリスンの呪文が発動し、青白い光となりクレスとミントはどこかへ飛んで行った。

モリスン「チェスター君、しっかり！」

ダオス「あの輝きは時間転移の光。答えろ…奴らをどこへやった？」

モリスン「言うと思っているのか！？」

ダオス「こしやくな奴め…いつの時代に送ったかは知らぬが…自身自身を転移できないとは、まだ未熟だな」

モリスン「……くそっ！！」

ダオス「クククク…ここで朽ち果てるがいい！！」

ダオスを中心に光が押し寄せ何も見えなくなった。

時空戦士たちの過去へ語られる因縁へ（後書き）

感想待ってます。

時空戦士たちの過去へ集まりだす英雄達へ（前書き）

クラスとアーチェです。ロディはいろいろとややこしくなりそうなので過去を見終わった後軽く説明するのみにしたいと思います。

時空戦士たちの過去へ集まりだす英雄達へ

クレスとミントが目覚めた場所はどこかの草原だった。二人はモリスンの本を読みダオスと自分たちの関係を確認する。その後二人は近くの村に行きここが100年前だということを知り魔術でしか傷つかないというダオスを倒すため、村長に聞いたクラスを訪ねることにした。

ミント「あの、あなたがクラスさんでしょうか？」

クラス「ん？」

「あつ。クラスさんや」

クラス「そうだが…この私に何の用かな？お嬢ちゃん…」

ミント「クラスさんの魔術の知識を教えてくださいたいのです」

クラス「魔術？…ああ、魔術学の受講希望者か。ならば、奥にいるミラルドにそう言ってくれ。受講料は前金で2万ガルド」

ミント「えっ、お金？そんなには…」

クラス「それでは、教えるわけにはいかないな。出直しておいで、お嬢ちゃん」

ミント「……その呼び方はやめて下さい」

クラス「すまないね。何しろ、まだ君の名前を知らないものでな。初対面だと思ったのは、私の勘違いか？」

ミント「あつ、す、すみません。私は、ミント・アドネードと申します。こちらは、クレスさんです」

クレス「クラスさん、僕達には魔術がどうしても必要なんです！

ダオスを倒すために！」

クラス「ダオスを倒すだと？本気か？ふん、魔術についてタダで学ぼうという口実にしては、大風呂敷すぎると思うがな」

クラス「なっ！」

ミント「ひどい……」

「……クラス」

「このころはあまり人が好きではなくなてな」

女性「クラス！そんな言い方はないでしょ！」

クラス「ミラルド！」

ミラルド「まったくもう！どうしてあなたはそうぶっきらぼうで、がさつで、思いやりがないの？初対面の人でしょ？あなたを頼って来てるんでしょう？もう少し優しくできないの？ほんつとにばかばかか！もうっ！……ごめんなさいねこの人、精神的に子供なの。」

……そうだわ！こんな人じゃなくて、もっと頼りになる人を、私が紹介してあげるわ。こ・ん・な・人……じゃなくてね」

クラス「な！おいっ！！こんな人とはなんだ！！こんな人とは！！！」

ミラルド「悪い？頼りにならない人になんて、こんな人で十分でしょ！」

クラス「頼りにならないとは、どういう意味だ！この辺じゃ私以外に誰がいるというんだ！？」

ミラルド「あら、わかってるじゃない」

「くっくく。尻に敷かれてるな。クラス」

「つつるさい！黙ってみてろ！」

ミラルド（あなた達、もうひと押しよ！）

ミント「あの、私達……」

クレス「どうしても、クラスさんの協力が必要なんです」

クラス「協力？」

ミント「はい、そうです」

クラス「ふう、なんだか知らんがわけありらしいな… いったい、どういふことか話を聞こうじゃないか」

クレス「自分が自分たちのことを話す。」

クラス「うーん… 未来からねえ。信じがたいな…」

クレス「信じてもらえなくても仕方がないことです…。僕もそうでしたから…。どちらにしても、ダオスを倒すためには魔術が必要なんです」

ミント「お願いです、力を貸していただけませんか？」

クラス「残念だが、私自身が魔術を使えるわけではない」

クラス「私は、エルフでもハーフェルフでもない普通の人間だからな。耳はとがっていないだろ？」

ミント「それは、ベルアダムの村長さんからもうかがいました。でも… クラスさんならきつと力になっていただけははずと」

クラス「……… 実は、魔術を使えるのはエルフだけではない。精霊もまた、魔術に等しい力を持っている。私の研究テーマは、精霊達の力を借りて魔術を行使する方法を探ることだ。その名を召喚術…」

ミラルド「でも、まだ使えないのよね」

クラス「いちいちうるさいな。理論的に可能なことはわかってるんだ。あとは、精霊と契約することに成功すれば、魔術と同等の力を行使できる。… だが、契約には様々な危険が伴うんだ何しろ精霊というやつは、人間がなかなか足を踏み入れないような所にいることが多くてね。クレス君にミントさん、だったかな？ そこで、だ…。君達が私に協力してくれるというなら… 私の召喚術を君達の目的のために役立てようじゃないか。それでいいかな？」

クレス「は、はい！」

ミント「ありがとございます！！」

クラス「それなら、早速で悪いがローンヴァレイにつき合ってくれ。あの谷には風の精霊のシルフが住んでいるんだ。ミラルド、帽子を取ってくれ。……しばらく帰れないかもしれないが……」
ミラルド「私のことなら大丈夫よ。そうそう、帰ってきたら、今考えている新しいパイを作ってあげるわ」
クラス「ならば、それを励みにがんばるとするか。それじゃあ、行ってくるぞ」

クレス「ここが……」

クラス「風の精霊が住む谷、ローンヴァレイさ。この世の全ての物には、霊が宿っていると言われている。その多くがまだ未確認なんだが強い力を持つ四大精霊は、存在が確認されている」

クレス「四大精霊ですか？」

クラス「そう、地水火風にそれぞれ宿る精霊を四大精霊と呼ぶ。風の精霊シルフはその内の一つなんだ」

ミント「それでは、これからシルフの助力を得るわけですね」

クラス「まあ、簡単にはいかんがそう考えて構わないだろう。実は、精霊との契約にはルーンリングと呼ばれる指輪が必要なんだ。私は『契約の指輪』と呼んでいるがな。まずはそれを手に入れる」
クレス「必要……ってクラスさんが、召喚術を考えたんじゃないのかっただですか？」

クラス「実は、古文書が残っていてね。私はそれを元に研究し、完璧なものにしたのさ」

クレス「クラスさん一人ですか？すごいですね！」

クラス「頭の固い学会の連中には、できるわけがない、と言われていたがね。まあとにかく、その家に入るぞ。会いたい男がいるんだ」

クラス「失礼だが、あなたがバートさんですか？」

バート「あなたは？」

クラス「私はクラス、風の精霊との契約に挑戦したいんだ」

バート「しばらく待った方がいい。以前に地震があつたろう？あの後から精霊達が妙に騒ぎだしてな。一人じゃ近奇れんし、原因もわからないままだ」

クラス「事情はわかったが、急ぐんでね。それと、君のところにあるルーリングを譲ってほしい。もちろん、それに見合う対価は払おう」

バート「……あんたがなぜ指輪のことを知っているのか知らないが……私の頼みを聞いてくれるなら指輪はタダで譲ってもいい」

クラス「どういうことだ？」

バート「実は、私の娘が何日か前から行方知れずになってな。心配して精霊の様子を見に行つたかもしれないんだ」

クラス「女の子が一人で？危険すぎるだろう！？」

バート「無鉄砲な娘でな……困っている」

クラス「よし、引き受けよう」

バート「娘の名はアーチェといってポニーテールが特徴だ。誰に似たのかオテンバでね。とにかく目立つ子だよ」

クラス「わかった、捜してこよう」

バート「風の精霊は、谷の一番奥のつり橋の向こうにいるはずだ。娘を頼む」

瘴気によつて精霊たちが苦しんでることが分かった三人は瘴気が出ている穴を塞ぎシルフのもとへ向かった。

シルフ「あなた達が……瘴気を取り除いてくれたのですね……」

クラス「いにしえの指輪の命に従い、風を司るそなたとの契約を結びたい」

シルフ「まあ……その紋様、心地いい鳴子の音、そして指輪から感じられる波動……。人の身で、よくぞ召喚術を完成させましたね」

クラス「では！」

シルフ「あなたの力になりました。でもその前に、一つお願いがあります」

クラス「精霊が人間に願い？」

シルフ「はい、実は…今のままでは私達と契約しても近いうちに必ず、全くの無駄になってしまうのです」

クラス「意味がわからんな。どういうことだ？」

シルフ「私達の力の現でもあるマナが、世界から失われようとしているのです。その結果、精霊も魔術も、世界から消滅してしまいます」

クラス「何だって！？それは、なぜ！？」

シルフ「精霊の森に生える世界樹ユグドラシルに一度会って下さい。これを持っていけば、世界樹の精霊に会うことができます」

シルフ「話が聞ければ未然に防ぐこともできるかもしれません」

クラス「……わかった、行ってみよう。その前に、一つ聞きたいことがある。この谷に少女が一人で迷い込まなかったか？教えてくれ」

シルフ「この数ヶ月の間、谷を訪れたのはあなた方だけです。あなた方以外の人間は誰も見ておりません…」

クラス「そうか…」

シルフ「では、契約を結びましょう。オパールの指輪を…」

クラス「我、今、風の精に願い奉る。指輪の盟約のもと、我に精霊を従わせたまえ…。我が名はクラス…」

バート「やったのか！？風が、すっかり元通りに戻ってるぞ！」

クラス「ああ…」

バート「それで？」

クラス「あんたの娘が谷に入った形跡はなかった。正気を取り戻した精霊にも聞いてみたのだが…」

バート「そうか…。いつたい、どこに行ってしまったんだ…。アーチェは？」

ミント「そう気を落とさないで下さい。これから向かう町でも、娘さんのことは聞いてみますから」

バート「……ありがとう」

クラス「よし、それじゃあシルフの言っていた精霊の森とやらに行ってみるか」

ミント「確か、ベルアダムの子の南でしたよね」

クラス「ああ、そうだ」

クラス「これがシルフの言っていた世界樹ユグドラシルなのか？

…ん、な、何だ！？」

クラス「この光景は…」

樹の精霊「私が、見えるのですか？声が、聞こえるのですね？ならば、聞いて下さい。滅びの時が、近いことを…あなた方だけにでも知ってもらいたいのです。私は、世界樹『ユグドラシル』に宿る精霊『マーテル』今、世界樹ユグドラシルの死期が近づいています」

クラス「それは、寿命ということか？」

マーテル「いいえ、創世の時代より大地に根付く世界樹に、寿命はありません。マナが枯渇しようとしているのです…。精霊達と魔力の現であるマナはこの世界樹から生まれているのです。御存じではありませんか？」

クラス「何だって！？本当なのか？この樹一本で、世界中に満ち足りるだけのマナが？」

マーテル「そうです」

クラス「にわかには信じがたいな」

マーテル「嘘は、申しません。世界樹が、枯れた後でなければ信じてもえませんか？精霊も魔術も、全てが失われてからでなければ…」

クラス「……」

クラス「この精霊が言っていることは、本当だと思いますよ。僕とミントが住んでいた100年後の世界には、魔術は存在しませんでしたから。それに、僕は見たんです。この樹の、枯れ果ててしまつて

いる姿を……」

クラス「本当なのか？だとしたら……」

マーテル「マナは、世界樹ユグドラシルが生き続けるために必要です。しかし、魔術で消費されたくらいで枯渴することはないのです」

クラス「では、なぜ？」

マーテル「わかりません……何らかの強い力がマナを大量に消費しているとしたら……」

クレス「何とか樹を助ける方法はないんだろうか？魔術がなければ、ダオスを倒すこともできなくなってしまう」

クラス「私の研究も無駄になってしまうな……」

クラスがつぶやくとマーテルの姿が少しずつ薄くなり消えてしまった。

クラス「待つてくれ！！まだ、聞きたいことが……！」

ミント「私が、やってみます」

クラス「え？」

ミントが世界樹に法術をかけるが何も変わらなかった。

ミント「私の力が、足りないようです。私に、母のような強い法術の力があれば……」

クラス「そんなに、都合良くはいかないか……マナが消えたら、魔術は失われてしまう……」

ミント「ダオスが、未来に時間転移してしまう前に倒すことはできないのでしょうか？」

クラス「とにかく、マナを大量に消費する原因を取り除かなければなるまい。このままでは、歴史は繰り返すばかりだ」

クレス「取り除くって言うても……これから、僕達は何をしたらいいんでしょう？」

クラス「マナが魔術に関係があるとすれば原因はやはりダオスかもしれない」

クレス「じゃあ、ダオスを倒せば……」

クラス「可能性としては高いだろう。まあ、それも簡単にはいか

ないだろうがな……………現在、存在を知られている精霊の中で最も強い力を持っていると言われているのが『ルナ』という月の精霊だ。そして、そのルナと契約するために必要な指輪がモーリア抗道に、あると言われている」

クレス「モーリア抗道？」

クラス「アルヴァニスタにあるドワーフ族の鉱山蹟だが、詳しいことはわかっていない。アルヴァニスタ王国は世界で最も魔術文化が発達した国でね。そこに行けば必ず重要な情報が得られるはずだ」

クラス「ルートは、北にベネツィアという港町がある。そこから、定期船が出ている」

クレス「では、ベネツィアの町に行ってみましょう」

ベネツィアに向かう途中立ち寄った町は廃墟と化していた。

クラス「町が…」

ミント「ひどい…」

クラス「生存者はいないのか？」

クレス「……………」

街の中を捜すと少女がいた。

クレス「大丈夫か！？」

少女「あ、私は…何ともありません」

クラス「いったいこの町に何が起こったんだ！？」

少女「デミテルが……………」

クラス「えっ？」

少女「この町を襲った魔術師です。私のパパとママも殺されて……………」

クレス「仇討ちなら僕が力になる！」

少女「えっ？」

クラス「おいおい、私達には時間がないんだぞ！」

ミント「で、でも、見過ごすなんてできません」

クラス「おいおい、ミントまで！」

クレス「急がなければいけない時なのはわかっているけど僕は……………」

クラス「二人とも、どうしたんだ？ なんだか様子が変わぞ」

クラス「……いえ、何でもありません。ただ、放っておけないんです」

ミント「私も、クラスさんと同じ気持ちです。彼女の力になりたい……」

クラス「ふむ……まあ二人がそこまで言うなら、私も反対はしがないが。それなら、その魔術師の話を詳しく聞かせてくれないか？ 相手が魔術師なら魔術に関する情報が手に入るかもしれないから」
少女「デミテルの居場所ははっきりとわかっていませんが……。北の方へ去って行ったのを見ました」

クラス「なるほど……。それならベネツィア方向に捜していけば見つかる可能性が高いわけか……」

少女「あの……何とお礼を言えいいか。本当にありがとうございます。申し遅れましたが、私の名前はリア「スカーレット」です」

ミント「私はミント。リアさん、どうぞよろしく。彼はクラスさん、こちらがクラスさん」

リア「はい、こちらこそ、よろしくお願いします」

デミテルが住んでいるという西の孤島の館に向かい、デミテルにあったクラス達。

クラス「お前がデミテルか！」

デミテル「いかにも。それがどうかしたのかな？」

クラス「お前はリアの両親の仇！ 覚悟しろ！」

デミテル「ほう、スカーレット夫妻を御存じか。しかしあの方を師と仰ぐ私を仇呼ばわりするとはどういうことかな？ 夫妻は事故死だったはずだ」

クラス「何だつて！？」

デミテル「いったい誰にそんな話を吹き込まれたのかね？」

クラス「スカーレット夫妻の娘、リアに決まってるだろう！」

デミテル「確かに、スカーレット夫妻には一女がおられたが……この

娘が夫妻の御息女だというのかな？……おとなしく立ち去るがよい。眞実を教えてやるう」

デミテル「我が師匠の愛娘リアは、両親と共に事故死している。その娘が本当は何者で、何を考えてこのようなことをしているかは知らぬが……何とも、間抜けな話よ。その娘、リアとは似ても似つかぬわ！」

クラス「いったいどっちが本当なんだ？」

クラス「リア、あいつの方が嘘をついていると言ってくれ!!」

デミテル「その娘を残していけば館に勝手に踏み入ったことも許してやるうではないか」

クラス（僕はこの子を信じたい……きっと何か事情があるはずだ）
鏡に映るデミテルの後ろには黒い影がまとわりついてた。その影はペンダントを奪ったマルスの後ろについていたものと同じだった。
クラス「あの影は!!とうとうしっぱを出したな!お前もダオスの手先か!!」

デミテル「何!?ちつ、貴様見えるのか」

クラス「きみは隠れているんだ!」

デミテル「ふははははは!!貴様ら、生きて帰れると思うなよ!!
覚悟!!!」

デミテルを倒した後クラスは戸惑っていた。

クラス「……これで本当によかったのか？」

そう思っているとリアが突然倒れた。

ミント「リアさん!？」

クラス「大丈夫か!？」

リア「みなさん……あ、ありがとうございました……」

ミント「しっかりして!」

リア「こ、これで私も……両親の元へ逝くことができます」

ミント「え?」

リア「最後のお願いです……私の心優しい友人を、どうかよろしく……」
クラス「リア、しっかりするんだ!」

ミント「リアさん!!」

リアが目を閉じるとリアの体から茶色い髪をした幽霊が空へと向かって飛んで行った。

ミント「み、見ましたか？」

クレス「見た!」

クラス「今のは、いったい？」

ミント「リアさん、手に何かを持っているようです。これは…リボン?」

クレス「リボン?」

リア?「ここは、どこ? リアは? リアはどうなったの?」

ミント「リア…さん?」

リア?「リア? 違うの… あたしは… あたしはアーチェ」

クラス「アーチェだって?」

アーチェ「リアはあたしの親友なの…」

バート「アーチェ!」

アーチェ「ごめん… 実は…」

バート「いいんだ、帰って来てくれさえすれば…」

アーチェ「お父さん、ごめんなさい…」

クラス「仇への憎しみがはれぬあまりに嘆きさまよう友の魂に、自分の体を貸し与える… か」

ミント「リアさん、天国に行けたでしょうか?」

クレス「行けたさ、きつと」

クラス「あのアーチェって娘に魔術の才能があったからできたことだろうが… まったくおどろいたな」

クラス達が外で話していると家の中からアーチェが出てきた。

ミント「リアさん! あ… すみません… アーチェさんでしたね」

アーチェ「いいのよ、気にしなくても。ミントちゃんだっけ? 私がいつまでもこの格好をしているのが悪いんだもんね」

アーチエ「これでどう？」

アーチエがリボンを結びポニーテールにする。

ミント「あ…ええ、お似合いです」

アーチエ「リアの力になってくれてありがとう、ね 今度は、あたしがみんなの力になってあげちゃうから」

クラス「同じ顔なのに、口調ががらっと変わったのでなんだか違和感があるな…」

アーチエ「まあ、これがあたし本来の話し方なんだから許してよ。あつ、そうそう。これは、あたしのお父さんからのお礼だってさ」
クラス「契約の指輪か」

アーチエ「さ、行こうよ！」

クラス「よし、アルヴァニスタへ向けて出発だ！！」

時空戦士たちの過去へ集まりだす英雄達へ（後書き）

感想待ってます。

時空戦士たちの過去〜変わってしまった過去〜（前書き）

syu00さんご意見ありがとうございました。

今回はジエストーナ編です。

モリスンさんの手紙は今でもこの胸に残っています。

時空戦士たちの過去へ変わってしまった過去へ

クレス、ミント、クラース、アーチェの四人は旅を続けた。精霊と契約をしつつ、ある国の王子をダオスの手下の手から救いだしたり、モリスンさんの祖先のエドワード・D・モリスンに出会ったりした。そこでクレスは戦争で力になると言い、エドワードはすべてが終わった後クレス達が未来に帰れるようにしようと言った。そしてダオスに対抗する国ミッドガルズ…

ライゼン「待たせて申し訳ない。私はこの国の騎士団長でライゼンという者です。あなた達のことはモリスン殿から聞いております。まだお若いのに一騎当千の勇士と聞きおよんでいますぞ」

クレス「いえ、若輩ですが、戦列の端に加えていただければ幸いです」

モリスン「ありがとう、やっぱり来てくれたんだね」

クレス「ええ、力を合わせてダオスの野望を阻止しましょう」

アーチェ「ヤボウ？そういうえば、ダオスの野望って何なの？」

ライゼン「何を言っておるのかね。ダオスはこの世界を滅ぼそうとしておるのだぞ！」

アーチェ「ホントに？」

ミント「アーチェさん…？」

クレス「何か、気になることでもあるのか？」

アーチェ「世界を滅ぼすために？」

ライゼン「その通りだ！」

アーチェ「……ま、いつか」

クラース「申し訳ない。何か考えすぎていたようだ」

モリスン「と、とりあえず、改めて礼を言わせてもらいたい。来る戦いにそなたらが加勢してくれること、何よりも心強く思う所だ」

城から出たところでアーチエが突然話した。

アーチエ「あたしは納得してないよ」

クラス「は？」

アーチエ「ダオスの目的のことだよ。確かにダオスは町を襲った。人を殺めた。魔物を操っている。だけど…」

クラス「だけど？」

アーチエ「だけどベネツィアやユークリッドを襲ったことってある？アルヴァニスタではレアド王子を操って動けなくしたただけでしょ？内部から崩すことだってできたはずなのに…ダオスって直接にはミッドガルズにしかちよっかい出してないじゃん。これってどういうこと？」

クラス「そう言われてもなあ」

クラス「いったいどうしたんだ？奴はハーメルを襲ったじゃないか！」

アーチエ「……」

クラス「リアやリアの両親を殺したのもダオスが裏で手を引いていたんじゃないか！何とも思わないのか！？」

ミント「クラスさん、言いすぎです！」

アーチエ「そこなの」

クラス「へ？」

アーチエ「そこだけ変なのよね。どうしてハーメルだけ襲ったのかなあ？」

クラス「うん…」

アーチエ「考えすぎかなあ。ミッドガルズとハーメルに、またはリアの両親に何か共通点ってあるんじゃない？」

アーチエ「やっぱ変じゃん、他の町が無事なのは…」

クラス「ダオスの目的か…そう言われると、少し妙かもしれんな」
アーチエ「一度、あたしの家に行ってみようよ。お父さんに聞けば何かわかるかもしれないし…それに、少し文句も言いたいしね」

クラス「い、今からお前の家に！？少し遠すぎやしないか？」
アーチエ「だいじょーぶ、ダイジョーブ。パッと行ってパッと帰ってくればいいじゃん？さ、行こ」

クラス「ふう、やっとアーチエの家に着いたな。アーチエ？」

家に着くなりアーチエは家の中に入ってバートを問い詰め始めた。

アーチエ「お父さんの嘘つき！！お母さん、死んでないじゃん！」

旅の途中ハーフェルフ禁制のユミルの森にアーチエが入ってしまった
殺されそうになったところを助けてくれたのだ。

バート「ななな…あ、会ったのか？」

頷くアーチエ。

バート「そうか…」

アーチエ「どうしてお母さん、家から出て行っちゃったの？浮気？」

バート「ばつ、何てことを、何でそうなる」

クラス「エルフは種族として団結する道を選んだ…確か、そうじゃなかったか？」

バート「その通りだ…ほんの十数年前まではエルフと人間は共存していたんだ。しかしある時、突然彼らは人間を嫌い…エルフの血が人間と交わることを拒んで今のユミルの森に移り住んだのだ。もちろん、エルフ族全員がそう考えていたわけではない。むりやり人間と引き裂かれた例もたくさんあった。私とルーチエもその中の一つにすぎないんだ」

バート「ルーチエ！…どうしても、行くのか？」

ルーチエ「はい…」

バート「…なぜだ？なぜ、もう一緒に暮らせないんだ？ルーチエ、考え直してくれ！」

ルーチエ「…バート…」

バート「一緒に…もう一度…」

ルーチエ「……」

しかし彼女は戻らない。

バート「ルーチェ、なぜなんだ!!」

エルフ「種族の隔たりは、考える以上に大きかったということだ。お前達人間が、今までしたことやこれからしようとしていること...その愚かさをもう一度よく考えてみることだ」

バート「何だと、いったい、どういうことなんだ？」

エルフ「でなければ、二度と我々が人間の前に姿を見せることもあるまい」

バート「どういう意味なんだ...ルーチェ...」

クレス「人間がしようとしていることの愚かさ？」

バート「私には全くわからんよ。とにかく、自分を死んだことにしてくれというのは、ルーチェたつての願いだっただ」

アーチェ「お母さんね...」

バート「えっ？」

アーチェ「お母さん、謝ってたよ、ごめんなさいって...お父さんは、お母さんのこと、恨んでる？」

バート「...私は、一度たりとも、母さんを恨んだことはないよ」

アーチェ「...それじゃあ、今でもお母さんのこと...愛してる？」

バート「もちろんだよ」

アーチェ「...だったら...いつかきつと、もと通りになれるじゃん！じゃあ、この話はもうおしまい！」

バート「ああ...すまなかつたな、アーチェ」

クラース「アーチェ...いいかな？」

アーチェ「あつ、ごめん。ねえ、お父さん...リアの両親のことなんだけど...何か悪いことしてたの？」

バート「?どういうことだ？」

クラース「スカーレット夫妻とミッドガルズの間、何か共通点がないかと思っただ」

バート「...以前はミッドガルズに住んでいたらしい。数年前にミッ

ドガルズから引越してきたくらいしか…何でも、城で未知の力の研究をしていたとか聞いているが彼らがどうかしたのか？」

クラース「未知の力？ もしや、それは魔科学のことでは…」

アーチエ「魔科学とダオス、何か関係でもあるのかな？」

クレス「さあ…」

ミント「そろそろミッドガルズに戻らないと…」

クラース「そうだな…」

ミッドガルズに戻ると魔物が少年を人質に取っていた。

クレス「モリスンさん、これは！？」

モリスン「……」

魔物「ふふ、ようやく役者がそろったか」

モリスン「ジェストーナ、何が望みだ？」

ジェストーナ「これから戦争をしましょうと言うだけで、そのまま帰るのは、俺の性に合わないのよ。ここで、ついでに貴様らの命を絶つておけばダオス様もお喜びになろうというもの！」

クレス「何だと！？」

ジェストーナ「動くなよ！少しでも動けば、このガキの命はないぜえ…」

クレス「汚いぞ！」

ジェストーナ「自害しろお！小僧とモリスン、それにその三人全員だ！」

モリスン「みんな、よく見るんだ…」

モリスンが何かを呟くと青白い光となり空へと飛びジェストーナの後ろへ現れた。そして体当たりをして子供を逃がした。

ジェストーナ「うお！！き、貴様ああー！！」

ジェストーナが手に持った剣でモリスンを貫く。

クレス「モリスンさん！！」

モリスン「近づくな！！これをもっと拡大すれば、時間転移を引き起こすことも可能になるはずだ…」

ジェストーナ「ははは、とどめだ!!」

モリスン「うぐう…この力の研究を完成できなかったことが…残念だ…」

モリスン「はあ、はあ、これは、まねするなよ…」

ジェストーナ「な、何を!？」

モリスンがそうつぶやくとモリスンとジェストーナの間に結界が張られ、魔力が圧縮し…爆発した。

ミント「こんな、こんなことって」

クレス「モリスンさん…アーチエ、まだダオスの目的に疑問を持っているのか？見ただろう!？奴は僕達を殺すためならどんなことだつてするんだ!」

アーチエ「わかった…もう言わない…」

ミント「クレスさん…歴史が…本に書かれていたことと違ってしまいました…」

クレス「モリスンさんには…二度も助けられたよ。もうたくさんだ！僕達で奴を倒すんだ!!そして…そして、全てに決着をつけよう!!」

その後クレス達はミッドガルズ軍とともに魔物の軍勢の陸軍部隊長を倒しミッドガルズに戻っていた。

ライゼン「みんな、よくやってくれた。これで戦争に勝利したも同然」

兵士「階下……!!」

ライゼン「なにごとだ、騒々しい!!」

兵士「た、たいへんです!!敵が、敵が攻めてきます!!」

ライゼン「何!？そんなばかな!すでに平原は我々の手に」

兵士「そ、それが空から…」

ライゼン「空戦部隊か!!すぐに投石器、大砲部隊を投入するのだ、急げ!!」

兵士「はっ！」

ライゼン「階下は安全な場所へ」

国王「いや、わしもここに残る。民をおいてわしだけ逃げることはできるか」

ライゼン「……わかりました。よい機会です。魔科学兵器の力、ダオスに見せつけてやりましょう」

クラス「まずいぞ…私達も加勢しよう!!」

クラス「でも空からじゃあ…」

クラス「何もしないわけにはいかないだろう」

空から来る魔物の軍勢ネギの村を襲った魔物の何十倍の数の魔物が空を覆い尽くしている。魔科学兵器の魔道砲が三分の二ほどを消し飛ばすが二撃目を放とうとしたところ魔道砲が暴走し壊れてしまった。しかし今までどこかに消えていたクラスがペガサスとともに現れアーチェとともに空軍部隊長を倒し魔物たちは統率がとれなくなり引き返して行った。城に戻るとライゼンがモリスンの手紙を渡してきた。

『この手紙が読まれているということは、私は志半ばで倒れたということだ。』

陛下やライゼン殿には、心から謝罪をしたい。

しかし、必ずや私の志を継いでくれる者がいると、そう信じている。

かつてダオスは言った…

『この世に悪があるとすれば、それは私ではない。貴様ら人間の心に中にあるのだ』

それはある意味、正しいのだろう。だが、あくまでも一面でしかない。

私は人間を信じている。自分の血の半分である人間を。

だから、私の志を継いでくれる者達に、私が知る限りの呪文を託そう。

その魔術を使いこなし、どうか世界を救うために役立ててほしい。

エドワード「D」モリスン」

モリスンの意思を継ぎ四人はダオス上へ向かう。

時空戦士たちの過去〜変わってしまった過去〜（後書き）

読めばわかるんですが別にダオスの命令ってわけでもないんですよ。クレスの早とちり。まあ、あの状況で冷静になれるはずありませんが。

それは置いといて皆さんに聞きたいことがあります。

ロディは必要ですか？

ファンタジアをプレイした回数が二桁いつてるのに対してクロスの方は一周しかしておりません。そのため、ロディを入れようとする違和感が半端ないです。（なら最初から入れるなよって感じですが…）

これからことを簡単に考えてみましたが活躍する場所が皆無です。ですので編集でロディの部分だけカットしようと思うのですがどうでしょうか？

意見待ってます。

時空戦士たちの過去と過去から未来へ（前書き）

ロディのことは消すことにしました。近いうちに修正します。
本編に関してはそんなに変わらないと思います。

時空戦士たちの過去と過去から未来へ

ダオス城の中を進みついにダオスを見つけた四人。

クレス「ダオス、ついに見つけたぞ！覚悟しろ！！ここで、全ての決着をつけてやる！！」

ダオス「……」

クレス「どうした、怖じ気づいたか！」

ダオス「なぜ私に剣を向ける？私には、お前達と戦う理由はない」

クレス「お前にはなくても、僕達にはあるんだ！！」

ダオス「笑止！しょせんお前達もミッドガルズの手先というわけか。降りかかる火の粉は振り払わねばなるまい」

クレス「ダオス、覚悟！！」

ダオスと戦うが戦いの途中で未来に逃げられてしまう…。

クレス「逃げられた…ちくしょう！！」

ミント「クレスさん…どうすればいいの？」

クラス「……いつまでもここにいても仕方がない、いったん戻ろう」

その後四人はクレス達のいた時代でダオスを倒すためにユニコーンの力で世界樹を癒し、モリスンが残した文献に書いてあった古代都市トール（今は海の底に沈んでいるが都市機能は失っておらず、科学で時間転移をも可能にした都市）に向かう。そして四人はクレス達の時代へ時を越える。

ダオス「あの輝きは時間転移の光。答えろ…奴らをどこへやった？」
モリスン「言うと思っているのか！？」

ダオス「こしやくな奴め…いつの時代に送ったかは知らぬが…自身を転移できないとは、まだ未熟だな」

モリスン「……くそっ…！」

ダオス「クククク…ここで朽ち果てるがいい！！な！？…き、貴様らは！？」

モリスン「おお…」

チェスター「クレス…」

クレス「仲間も世界も、お前の好きにはさせない！！」

ダオス「ふん、望むところだ。私には、やらねばならぬ使命がある！！こんな所で倒れるわけにはいかないのだ！！」

四人はかるうじてダオスを倒すが地下墓地が崩れ出す。

モリスン「危ない、逃げるんだ！！」

クレス「い、いつたい、どうなっているんだ！？」

モリスン「おそらくダオスが復活する時に膨大なエネルギーが解放されたんだ！！地殻に異常が起きたとしても不思議じゃない！！」

クレス「早く！！地下墓地が崩れるぞ！！」

トリスタン「おお、クレス無事じゃったか…モリスン、これはどうなつとるんじゃ！？」

クレス「トリスタン師匠、早く逃げて下さい！！」

モリスンの家で戦いの傷を癒したクラスとアーチェはツールへ向かうためクレス達に別れを告げる。

クレス「お別れ、ですね…」

クラス「ああ…後は、我々だけでツールに行くことにするよ」

アーチェ「忘れちゃだよ…あたしは絶対みんなのこと忘れないから…絶対、忘れない…」

クラス「ミント、泣くな。私達は、本来できるはずのない出会いをしてしまった…いや、することができた。私はむしろ、みんなに出会えてよかったと喜ぶべきだと考えているんだ」

ミント「……はい……」

クレス「クラスさん…アーチエ…二人とも、お元気で」

クラス「ああ、お前達もな……」

アーチエ「それじゃ、バイバイだね」

モリスン「な、何だ!？」

アーチエ「みんな、あれ見て!!」

地震が起こった後アーチエの言う方を見てみると無数の隕石が降り注いでいた。隕石が治まると時空転移の光とともに一人の男が現れた。彼は五十年後の未来からダオスを倒すため四人の力を借りるためにやって来た使者だった。チエスターを加えた五人はツールで五十年後へと向かう。

そこで五人は時の魔剣のことを知る。時の魔剣エターナルソードがあればダオスの時空転移を防ぐことができる。その魔剣を手に入れるため五人は旅を続ける。その中で彼らは一人の少女と出会う。彼女は藤林すず。忍びの里の忍者でダオスに操られた両親を探すために世界を回っていた。すずの祖父、里の長、乱蔵の言葉を聞き五人は旅の先ですずの両親を探すことを約束する。そしてユークリッドで自らの腕を磨きつつ、旅の資金を得るために闘技場で一人戦っていたクレスの前に二人の忍者が現れる。二人はすずの両親、銅蔵とおきよだった。連戦の後で疲労している体に鞭を打ちつつ戦っているとすずが現れた。

クレス「すずちゃん!」

すず「父上、母上、もう人を殺めるのはやめて下さい!!」

銅蔵「すず…わ、私達を斬るのだ!!」

???「だ、黙れ!!完全に洗脳できなかったか!」

銅蔵の口から銅蔵とは違う声が聞こえる。

すず「父上…私には…できません…」

おきよ「う…」

銅蔵「うおおおおおお！！！」

「???」な、か、体がいうことをきかない…」

「???」ギ、ギヒヒヒイイ！！！」

二人が叫ぶと互いの武器をお互いに刺し合った。

すず「父上、母上！！！」

クレス「そ、そんな…」

「???」こ、こんなばかな…」

すず「父上ー、母上ー！！こんな…こんなことって…」

二人に駆け寄りすずは涙を流す。

銅蔵「よ、よいのだ…わ、我らの罪は我らの手で償わなければならぬ…すずの…手を汚す必要はない…」

おきよ「今まで親らしいことをしてやれなくて…ごめんなさい…でも…最後にあなたの涙を見て…安心したわ…」

銅蔵「これで我らも…心…おきなく…地獄に…いける…」

すず（父上、母上…すずは、もう泣きません。この涙が最後の涙…すずは立派な忍者になります）

クレス「すずちゃん、何て言ったらいいか…僕は、取り返しのつかないことをしてしまった…」

すず「クレスさんが謝る必要はありません。あなたは両親の心を救ってくれた恩人なのです」

クレス「でも、僕はご両親の命を救うことはできなかった…」

すず「これも忍者の掟。忍者は…忍者は…非情でなければ務まらないのです」

その後すずはクレス達に恩を返すべく共に戦うことを誓う。すずを加えて六人になった彼らは炎の剣、氷の剣を手に入れ、オリジンの力で二つを合わせエターナルソードを作り上げた。そしてダオス城があるという常闇の町アーリィへ…。

時空戦士たちの過去〜過去から未来へ〜（後書き）

かなりの駆け足ですいません。さすが仲間になるところですが、闘技場にいた理由はテキトーです。

次はいよいよアーリーのイベント。

その次でようやくネギまに戻ると思います。

時空戦士たちの過去〜決戦前夜〜（前書き）

遅くなってすいません。

なぜか新しい小説のアイデアが浮かんできてそれを書きとめていました。

アンケートですが生徒との契約については打ち切ります。

時空戦士たちの過去〜決戦前夜〜

常闇の町アーリイ。この時代にダオスが現れてから朝が来ることなくなった炭鉱の町。この町でダオスの城が見られたと聞き、クラス達はアーリイへ向かった。そして明日に備えるために宿で休むことに。

クラス「うう、寒い寒い…ストーブ、ストーブ…」

クラス「どうしたの、ミント？」

皆が宿に入っていく中ミントは入り口で立ち止まった。

ミント「クラスさん…」

クラス「えっ、なに？」

ミント「クラスさん、あの、実は…お話ししたいことが…あります。宿屋の裏で待っています…あとで…来ていただけますか？」

クラス「え、あ、はあ…」

そういうとミントは宿から出っけ言ってしまった。

アーチェ「あれ、ミントはどうしたの？」

クラス「えっ…散歩かな」

アーチェ「散歩??」

クラス「そっ、そう！散歩だっけさ」

アーチェ「よりによって、何で散歩しなきゃなんないの？」

チェスター「人の勝手だろう」

クラス「何もこんな寒い場所で…」

アーチェ「ふっ…はお風呂なんじゃない？こんな寒いよ。それなのに、なあって散歩なのさ？」

チェスター「それじゃお前はそうしたらいいじゃないか？」

アーチェ「だつてえ…一人じゃつまんないじゃん」

チェスター「……」

クラス「とにかく、今は暖まるっ…うう、ますます冷えてきた」
皆が暖炉の前であつた待っている中クラスはしきりに窓の外を気に

していた。

クラス「どうしたクレス？」

クレス「えっ、いや、その…ちょ、ちょっと散歩に行ってくる…」

アーチエ「じゃ、あたしも!!」

クレス「ひ、一人で行きたいんだ」

そう言うところへクレスはさっさと宿屋を出て行った。

アーチエ「へ〜んなのお〜」

クラス「こんな寒い時にクレスまで…若いというのは良いことだな」

アーチエ「オヤジくさいこと言わないでよねえ」

クラス「そうか？」

アーチエ「まだ、二十代なんですよ」

クラス「まあ、一応はな…さて、時間もあるし、何をしようか…」

やっと暖炉の前から動いたクラスはクレスが置いて行ったエターナルソードを見て何かを思いついた。

アーチエ「どうしたの？」

クラス「何、ちょっとしたイタズラを思いついたのさ」

契約の指輪を出しオリジンを呼び出す。

クラス「オリジンよ、あなたは時間を越えた世界を見せる力を持っているのではなかったか？」

オリジン「…確かにそうしたこととも可能だ。だが、未来を見ることは許されぬ」

クラス「私が見たいのは過去の世界なんだが…どうしても、気がかりなことがあってな…」

オリジン「…………この私の、初めての主の願いだ。一度だけならば許そう」

クラス「一度だけか…ああ、それで構わない」

アーチエ「なにしてんのさ？」

オリジン「それでは、いつの時代、どの場所を望むのだ？」

クラス「…すまん、二人とも部屋から出ていてくれないか？」

アーチエ「えゝ、何でえゝ？寒いじゃん！」

クラス「頼むよ…あとで、好きなものをこちそうするから…」

アーチエ「まったくもう、何なのよお！みんなして」

そう言つてアーチエとチェスターが部屋から出ていく。

オリジン「それで、どうするのだ？」

クラス「……」

オリジンを呼び出したときとは正反対に小声でこによこによとオリジンに伝える。

オリジン「は？」

クラス「……」

オリジン「…ふむ、わかった。しかし、なぜそのような小さな声なのだ？恥らう年でもあるまい。では、いくぞ…」

エターナルソードから溢れる光の中に見えるのは故郷にいる幼馴染。

ミラルド「はい、それじゃあ今日の授業はここまでね。基本的なことはだいたい今日で終わりね」

生徒「ありがとうございます」

生徒「ところで…クラスさんはいつ戻って来るんですか？」

生徒「あのダオスをやつつけたんですね？」

生徒「村長も大喜びで村をあげてパーティーやるんだってはりきってますよ」

ミラルド「さあねえ…まあ、あいつはゾンビみたいにしぶとい奴だから、そのうちに帰ってくるでしょ」

生徒「はは、そんなもんですかね」

生徒「それじゃあ、また明日」

ミラルド「ええ、またね。まったく、どこをほつつき歩いてんのかしらねえ…あれでも少しは役に立ってんのかしら？ま、気長に待っててあげるわ」

クラスが過去を見ているころ宿の入り口では。

チェスター「おい、アーチェ」

アーチェ「な、なによ？」

チェスター「おまえ、クレスが何してるか、のぞきにいくつもりだろ。まったく…おまえは」

アーチェ「うっさいなあ！あたしがなにしようが、あんたに関係ないでしようが」

チェスター「クレスは俺の親友だからな！関係あるぜ！」

アーチェ「ったく！」

ひとしきり睨みあった後アーチェが溜息を吐く。

アーチェ「……あーあ、やんなっちゃう！なんで、こうケンカばかりなんだろう！」

チェスター「おまえが売ってるんだろ」

アーチェ「なに言ってるのよ！いつつもからんてるのはあんたでしょうが！あたしが嫌いなのはかまわないけどさ…いいかげんにしてほしいんだよね…」

チェスター「だ、誰が、嫌いだって言っただい！だいたい、お前を初めて見た時から…」

アーチェ「えっ…みた…とき…から？」

チェスター「……！…何でもねえよ」

アーチェ「ふうん………ね、チェスター…外行こ」

チェスター「いいよ、オレは…」

アーチェ「来て、ほらほら」

宿屋の裏。

クレス「ごめん、待った？」

ミント「ううん」

クレス「一人で出てくるタイミングがなかなかなくて…となり、いい？」

ミント「ええ」

クレス「で…話って、何？」

ミント「これを…見て下さい」

クレス「このイヤリング…」

なくしたと思っていたミントのお母さんのイヤリング。

ミント「ユニコーンの飾りがついたイヤリング、珍しいでしょう？

これは、法術師の証です。私の母が、いつもつけていたものと同じ

…母は、もう…いないんですね」

クレス「……ごめん……」

ミント「謝らないで…あの時、もし…クレスさんが、母の死を隠してくれなかったとしたら…私、きつと取り乱して…」

ミントの頬に滴が一粒流れる。

クレス「ミント……」

ミント「本当に…ありがとう……」

その後二人はどちらかともなく体を寄せ合った。

宿屋の入り口。

アーチェ「ミント……」

チェスター「おい、もう戻ろうぜ。また、雪も降ってきたし……」

アーチェ「も、もうちょっと……」

そういうアーチェをチェスターは引きずって中に入る。引きずられていく中アーチェは二人で作った雪だるまを見てくすつと笑った。

宿屋の屋根の上。

すず（父上、母上…もうすぐ、ダオスとの決闘です。……父上、母上…今、すずは迷っています。…父上、本当に忍者は非情でなければなりませんか？クレスさん達と一緒にいると、なぜか、すずは不思議な気持ちになります）

胸に手を当てて考える。

すず（それは…それは、すずの心の弱さでしょうか？…母上、この気持ちは何なのでしょう……私には…わかりません……でも…でも、せめて…最後の戦いは…クレスさん達と心を重ねて戦いたい…

それで、この身倒ることになろうとも…後悔はいたしません

六人にとって最後かもしれない夜が過ぎていく。

時空戦士たちの過去〜決戦前夜〜（後書き）

感想待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9372o/>

麻帆良に来た召喚士

2011年5月2日23時51分発行